

参考資料

地域再生を担う人づくり第1回研修会議事録
地域再生を担う人づくり第1回研修会資料
地域再生を担う人づくり第2回研修会議事録
地域再生を担う人づくり第2回研修会資料
地域再生を担う人づくり第3回全国研修会議事録
人材育成プログラム事例

地域再生を担う人づくり第1回研修会

議事録

■研修会開催内容

第一部

基調講演の部:『これからのまちづくり ひとづくり』

第二部

ワークショップの部

前半:「岩手県花巻市」、「大阪府柏原市」、「奈良県黒滝村」、
「沖縄県やんばる3村」

後半:「兵庫県丹波市・篠山市」、「島根県雲南市」、「岡山県笠岡市」

■研修会日時・会場

日時 平成21年10月1日(木) 14:00～18:30

会場 東京都千代田区 スクワール麹町

第一部

基調講演の部：『これからのまちづくり ひとづくり』

(中村)

本日のプログラムですけれども、先ず第1部基調講演の部と第2部ワークショップの部という2本柱で構成してございます。

第1部基調講演の部では、地域リーダーや地域住民を主体としたまちづくりについて、あるいは人づくりのあり方を中心に、中央大学の細野助博先生にご講演いただきます。

第2部ワークショップの部は、本日参加されています皆様と一緒に、人づくりをキーワードに討論を行い、この事業に取り組む意義、目標といったことを明確化していただくと共に、現在抱えていらっしゃる問題点・課題点をそれらの対応策も含めて、皆様で一緒に考えていきたいと思っております。

ワークショップの部では、できるだけ多くの皆様にご意見を述べていただくよう、機会を設けるために、前半、後半2つのグループを作って議論していただきます。

60分毎でメンバーを交代していきますけれども、会場にいらっしゃる皆様、全員参加で議論を盛り上げていただければと存じます。

申し送れましたが、本日司会進行を努めさせていただきます。株式会社価値総合研究所中村と申します。

何かございましたら、私どものスタッフがおりますので、お声掛けの方を宜しくお願いいたします。

それでは、第一部基調講演の部に入りたいと思っております。

基調講演には、中央大学大学院公共政策研究科委員長であり、社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩専務理事でいらっしゃいます細野助博先生をお招きしております。

細野先生は、公共政策、都市計画を中心に研究されておりますが、立川ですとか浜松市といった地域活性化計画委員長にも就任されるなど実践的に各地のまちづくりを支援しておられる方でございます。

それでは細野先生、宜しくをお願いいたします。

(細野)

はい。宜しくお願いします。私もどちらかというと実践家です。

23区の2倍の面積を有するのが、多摩地域です。人口は23区が800万人いるのに対して、多摩地域は400万人です。福岡県や静岡県とだいたい同じくらいであり、早く独立したいそうです。

事業所が14万社ぐらい。昔、立川飛行場とか、軍事工場が沢山ありました。また、軍服を作る工場も八王子にありました。

まちづくりの話をしてはするわけですが、まちの良いイメージ作りをどうするかということ、また、そういう時に人材をどう作ったらいいかという話を一つしたいと思っております。

もう一つ、西小山というまちのまちづくりの仕掛けをしているのですが、その商店街の事例をお話したいと思います。

いま、地方は押し並べて中心市街地活性化をどうしたらいいかと考えているわけです。

昭和40年から45年くらい、東京には地方から、毎年30万から40万の人間が押し寄せていました。40万人にプラス10万人すると、高知県の人口とほぼ同じです。

いわば、高知県一つの人口が、東京に毎年来ていたのです。人口割合にして10%から11%です。その後、国土交通省等も含みますが、色々法律を作って、事業所を地方分散させました。その結果、2%くらい下がりましたが、今はまた上昇しています。

これは、東京は問題ないにしても、日本全体からするとかなり問題があります。第一に、東京に人が集まりますけれども、東京都は、全国一出生率が低いのです。

地域を活性化するにはどういう形でリーダーを育てていったらいいのか。という点についてお話をするわけですが、例えば、東京の大学に勉強しに来て、就職活動時期に実家に戻ろうとしても、働くところが無いのです。これを何とかしなければならない。

空き店舗ができれば、そこでどうしようかと考える。それではダメなのです。これからデータの話をしていきますけれども、実は、自営業の比率というものと、若者の失業率というものは、はっきり反比例しています。マイナスの関係になっています。自営業の比率の高いところは、若者の失業率が低くなっていくのです。ではそこをどうするかということなのです。

産業構造が確かに違ってきていますけれども、ご承知の通りグローバル化が始まって、ものづくりの雇用吸収力がどんどん落ちてきているのは確かです。

それから、皆さんの中心市街地もそうですけれども、卸・小売業の人口吸収率も下がっています。今一番上がっているのは何かといいますと、医療・介護・福祉です。そこをどうするか。どういう形で職を若い人たちに入れるか。

それから、もう一つは、地域に長く住む人たち、彼らにノウハウを作ってもらって、彼らに一肌脱いでもらう。NPOでもいい、今日はそのリーダーとなられる方がきていらっしゃると思いますが、皆さんが、若者を育てる。どうやったら育てることができるのか、そこを考えていただきたい。私は中央大学で教えていますが、学生に勉強させます。その後、家に帰れといいます。そしたら皆さんには、俺のところに来てと、こういうようなご用聞きをしていただきたいと思います。

これから、今から二つの事例をお話します。

多くの大学で見られるのですが、中心市街地の真ん中にインキュベーションを与える施設を町の人たちがちゃんと作っている。しかしながら、大学では、文部科学省から補助金がなくなると学生を引き上げる。そうじゃなくて、大学のお金でやりなさいと、大学は生きた教材なのではないか。

先ず一つに町の人たちが何をしてくれるかというのと、躰をしてくれる。ちゃんと挨拶しない大学生は、一杯います。挨拶くらいしなさいと、まちの人たちにどんどん怒って欲しいのです。

データを取ってきて、町に、何月何日何時にどういう人たちが何パーセント歩いているか。グラフに描いて、そういうのも良く分かるわけです。統計学の勉強もできる。商売で、どこの店がこう流行っているのか。例えば、何故ドラッグストアが三つ一緒に並んでいても潰れないのか。みんなは疑問に思うのです。

例えば、三つドラッグストアが揃っていても、一つは、化粧品に優れているドラッグストアで、一つは、健康食品に優れているドラッグストア、もう一つは、本当に薬局として営業しているドラッグストアと三つある。

そうすると、何故一緒のようなものが集積することで潰れないのだろうか。それは、聴視する多様性があるからです。お互い競争します。そういうことを、自分の目で見て、疑問に思っ、納得しなければならない。そういった教材が、まちには一杯ある。やはり、競争はしないとイケないのです。

次に、少子高齢化といったら、人口減少です。東京のピークはいつだと思いませんか。2022年です。

沖縄のピークは一番遅い。沖縄のピークは 2027 年です。少子高齢化ではなくて、人口減少です。人口が増えるまで、40 年かかります。40 年後は、誰も分からない。

これからは、人口減少経済、人口減少社会だということです。これを先ず念頭において欲しい。念頭において、まちづくりをして欲しい。これから、金の卵は、若い人たちです。若い人たちの奪い合いになります。そうすると、若い人たちにとって、魅力的なまちづくりをどうするかということを考えないといけません。

次に、商店街には、モールが掛かっているところがありますが、何のためにあるか分かりますか。雨が降っても傘をささなくてもいいようになっているのですよね。写真を見てください。傘をさしています。

これを雨が漏一る（モール）といいます。困るでしょ。人もいないのです。定休日ではないですよ。かつては人が一杯いました。今は、この状況です。まだ借金も残っています。皆さん、これを笑っていられません。どこもこんな感じです。

次に、人口ピラミッドです。これは、1930 年の綺麗なピラミッドです。これは多産多死、たくさん生まれて、たくさん死ぬという状況で、後進国に多い人口ピラミッドです。

1990 年になると、人口のエコー効果となります。団塊ジュニアです。女性は、自分が生まれ 30 年経って、また子供を産む。これを人口のエコー効果といいます。

次は 2020 年です。単に 30 年足せばいいです。ところが、団塊ジュニアの人たちは、子供を作らなかった。なぜか、それは就職氷河期だからです。今また氷河期です。就職氷河期になると、結婚できない。職がないと結婚ができない。

バブル経済がはじけてから、経済も傷つきましたが、人口構造も傷つきました。しかもさらに、人口は職を求めて移動します。有効求人倍率は、今の日本の平均は、だいたい 0.4 です。0.4 というのは、職が欲しいといっても、5 人のうち 2 人しか就職できないということです。ならば、有効求人倍率が高くなればなるほど、県内へ入って来る人たちが多くなります。

有効求人倍率が低くなるほど、県外へ出て行く人たちが多くなります。これは、はっきりしています。人口は、職を求めて移動します。今、東京はそうです。社会増です。そして、入ってくる人たちは、若い人たちです。ですから、自然増でもあるのです。しかし、圧倒的に社会増です。でも皆さんの地域からは、結婚適齢期の女性がみんな出て行く。しかも、人口は職を求めて移動しますから、社会減です。プラス、自然減ともなります。東京都の出生率が一番低い。将来的には、どんどん自然減になっていきます。これ以上、東京に、ブラックホールのように、人間を呼ぶということはよくないです。だから、皆さんに頑張ってください。

次に、松江のショッピングセンターです。年少人口、生産人口、高齢人口です。活動力があって、購買力があるのが、若い人たち。しかしながら、実際にショッピングセンターには購買力が無くて、移動力が無くて、ショッピングセンターに行っても、ただ時間を消費するだけ。一日中、ただ座っているだけです。家にいると電力を消費するので、ショッピングセンターの液晶大型画面でテレビを見ているのです。

しかし、これからは、この若い人たちが欲しいのですよ。これがターゲットです。

この若い人たちをどうやって掴むかが問題なのです。この人たちが、どういうまちづくりを望んでいるかが問題なのです。これがとっても大事です。

次に、これを見てください。15 歳から 29 歳の若い人たちの人口比率、こっちは 65 歳以上です。私もここに入ります。

そうすると、お年寄りの比率が高いと若い人たちの比率が低い。お年寄りの比率が低いと若い人た

ちの比率が高い。反比例の関係になっています。あまり良くない。

事例に見るまちづくりのリーダーという話をします。私が選んだ、立川の事例を紹介します。先ほども紹介しましたが、立川には古くは米軍基地がありました。住民が、砂川闘争を起こし、米軍は撤収しました。ところが、そこからが問題でした。

米軍基地が無くなって、今の UR がここを再開発した。ここにビルを建てました。大型店やオフィスが入ってくる。だんだん綺麗になってきました。南側は、自分たちは表通りだと思っている。しかし、北側が再開発され、表通りになり逆になった。これで北側は、良かったと思っている。

しかし、南側にとっては、面白くないですよ。当たり前ですよ。隣のところは、どんどん景気が良くなって、自分たちのところはどんどん寂れていったら、愉快でない。

そのときに、石原都知事の前知事は、多摩の出身でしたから、何とか多摩の人たちに支持してもらって、もう一回知事をやりたいと思っていました。そのとき、多摩の人たちは、多摩から、都心に行く手段はあるが、南北に行く手段が無い。南北の交通網、つまりは、モノレールを作りますと行って再選されました。その約束を守るため、モノレールを作ることになりました。

しかし、東京の一駅の区間は、だいたい 2 分ですが、できたモノレールは、立川北と立川南の区間はゆっくり走って 1 分です。何でこんなところに、立川の駅があるのに、さらに 2 つの駅が作られたかと言えば、それぐらい仲が悪かった。

一分もかからないところに、2 つも駅を作ってしまった。それぐらい仲が悪かったのに、中心市街地活性化基本計画をつくらうとしていた。

1998 年です。私が、アメリカから帰ってきたときに、その取りまとめをお願いされたのですが、当初は、やりたくなかった。しかし、よく考えると、モノレールもできるし、これは、成功事例になるなどと思って手伝えることにした。基本計画を作るということは、皆さんもご承知の通り、色々な事業計画を立てなければならない。ところが、持って来るもの、全て南の人は、南のことしか目のいかないもの、計画書ばかりしか持ってこない。

同様に、北は北。私は、全部突っ返しました。

私は、南の人たちは、南の人たちの事業が、お互い様効果を持って、北の方にどういうメリットをもたらすのか、そこから先ずは考えようと、事業計画を練ってくださいと言った。北の人たちにも、同様に、南の方にプラスのメリットが出るような事業計画があったら持って来てくださいと、そうしたら、中心市街地活性化基本計画の中に載せますよと言った。

お互い様効果、これが大事なことなのです。向こう三軒両隣、ものすごいプラスの効果を持ったり、マイナスの効果を持つことになります。

一つの空き店舗ができることによって、どれだけマイナスの効果が起こるかということ。ここを自覚させないと、まちづくりができないのです。

いかに早く、空き店舗をなくすか。そのためにはどういう事業を持ってくるか。野菜の商売と同じです。萎びれた野菜、葉がだんだん黄色くなる野菜、これと同じことなのです。商品にならないわけです。商店街自身が商品なのです。お互い様効果を意識させることが重要です。

そしたら、どういう投資の仕方をしていいか。これは決まっています。要するに、南はここ、北はここ、共通の場所はここ。つまり、回遊性を持たせると、北・南といった意識がなくなります。コミュニケーションをとるからです。そうすると、回遊性を良くするために、ここに重点的に投資しましょうということになりました。

それが、このペDESTリアンデッキを作るということです。

北から降りて、ペDESTリアンデッキを歩いて南に行ける、または南から降りて、ペDESTリアン

デッキを通過して北に行ける。そうするとお互い様でしょ。

その結果、多摩の人たちは、どんどん立川のほうへも移動しました。しかし、そればかりでは、ダメですよ。

ファッションなら、新宿、銀座や吉祥寺がある。昔は、中央線を見ると一番乗り降りするのは新宿、吉祥寺、八王子、立川の順でした。今は、新宿、立川、吉祥寺となりました。それぐらい良くなった。

立川には、映画がとっても大好きな人がいました。その人がリーダーです。

スピーカーがあって、映画館のように舞台がある映画の興行手法を作ったのです。今立川には、そういうコミッションがある。

立川の南北戦争を仕掛けた二人が、手を握った。金持ちケンカせず。将来に対する夢があると、ケンカしないのです。まちの実力者の合意はとっても大事です。

よそ者の馬鹿力も大事。私のような学校の先生は何も無いのですよ。立川に米一粒の権利も無い。だからいいのですよ。

南のほうは北のほうに、どういうプラスの効果があるの、北のほうは南のほうに、どういうプラスの効果があるのと尋ね、無かったら返すよということが出来る。何の利害関係も無く、自分の損にも得にもならない。そうしたことができるよそ者は大事です。外部環境の明確な改善。これはモノレールができるという、目に見えるような集中的な投資ができる。そして、南北の需要をここに吸収できるということです。

こういった外部環境はとっても大事。これが事例1です。

ある仕掛け人がいた、それが映画館を作りました。興行施設です。彼が火付けをやった。それは誰かがやったわけではなく、自分自身がやった。外部環境です。

それから、環境が良くなりますから、金持ちケンカせず、お金持ちが手を握った。南北のボスが手を握った。多様なリーダーがいていいですよ。

もう一つ、次は、武蔵小山。これは高架です。一方は品川区で、もう一方は目黒区となります。同じ武蔵小山の商店街の中で、行き来なんかない、これも立川と同じ。

ところが、これが壊され、全部地下になりました。そうすると、南北往来することになる。これも一つのチャンスです。

ここは、あまり誇りを持っていないまちでした。ここにどうやって誇りを持たせようかと仕掛けたことをこれから話します。

何をやったかということ、一年間かけてイベントを開催することにしました。

どういう仕掛けをしたかということ、品川区と目黒区で、両方の商店街の人たちが顔を合わせるようなラウンドテーブルを作って、2ヶ月に一度、ワークショップをしました。なぜこんなことをするのだという文句が出ました。

目黒は目黒で行っていましたし、品川は品川で行っていました。

高架が埋められると、両方とも見えるわけです。毎日が、目黒は何やっているのだ、品川は何やっているのだと。

そうすると、お互い商店街として一体化すれば、もっと色々できるだろうと。行政はそれができない。品川は品川、目黒は目黒。

仕掛けは誰が行ったかということ、東急です。東急と我々が行いました。

2ヶ月に一度ワークショップを行いました。そして、顔合わせをしました。みんな文句ばかりでした。でもお互いに自分たちが、直面している問題は何かと色々しゃべらせました。

それも、学生たちが仕掛けました。おじいさんたち、女子学生たちが来ますよ。孫のようにかわい

いから、一緒に考えるのも面白いかも知れませんよ。おばさんたちには、若い男子学生が来ますよ。一緒にやりませんか。こういう形で釣ったのです。

一年かけて、一体化を図るイベントとして、ミステリーツアーを実施しました。お客様に、ミステリーツアーには満足したかという質問をしたところ、80%、90%が大変満足し、面白かったと答えています。お店の人たちには、ミステリーについてのヒントを与える。買ってくれなくてもいいですよと、タダで振る舞いをする人たちもいるわけです。商売の原点は、お客様が来てくれることです。お客様が来てくれることがこんなにいいことなのだと、お店をやっている良かったなど、思うわけです。

学生が参加していたことについてどう思ったか、という質問には、80%の人達が、良いことだと思うと答えている。

出口調査で、土日で1,800人を集め、学生たちが、怪しげな探偵役をしました。子供たちも参加します。休み処のおもてなしで、冷たいドリンクと飴のサービス、これはタダですよ。でもこれでいいですよ。自発的にこういうサービスを行うのです。暑いときでしたから、お水のサービスを行っていました。

自分のお店のポスターを貼り付けるといったサービスを展開します。武蔵小山ミステリーツアー。シフォンケーキは580円ですが、本日500円にします。

あるいは、抽選もします。買物をしたレシートで抽選をします。ミステリーナス、何がミステリーなのか。なすをミステリーにしたことが、私はミステリーだと思いますが、これは上手い。なすとミステリーなすをくっつけることが、ミステリーだから。

自分のところで、ミステリーツアーに合わせて、サービスを行う。

また、まちの人たちに競争意識を持たせました。これは、一つのポイントです。1,800人の参加者に対して、最も印象に残ったお店はどこですかと。

そうしたら、無料のビールなんか色々飲ませてくれる店でした。でも、この人たち元は取れました。というのは、一杯色々な地酒を出しまして、何が一番人気あるか、マーケティングをしたからです。頭のいい人は、ちゃんとマーケティングをしています。

しかも、一番何が人気だったか、全て発表しました。コマーシャルです。

自分たちが、面白かったと思ったから、今度は自分たちで計画して、自分たちで実行しました。行政ではなく、自分たちで、お金を工面する。これは大事なことです。自前で行う。そうすると、顔つきまで変わってくる。本当に頭が下がります。

今では、このイベントを自分たちのビジネスにつなげようとしている。こういう自信が出てくる。そうか、これがビジネスか。これは、ものすごい自信です。

今、若い人が頑張っているのが、品川区と目黒区が、ちゃんとやっといってくれと言ってくれる。

今ここでいうよそ者の馬鹿力とは、中央大学です。私たちの役割によって、まちの人たちの顔色が変わって、笑顔が出てくる。これを自分で体験できる。

そして、外部環境が良くなる。これは、立川と同じ。立川の場合はモノレール。武蔵小山では、高架が地下に潜ったことによって、商店街が一体化した。外部環境が明確に改善する。

何が、外部環境を明確に改善かということをお客様は色々お考えになっているわけです。

それでは、リーダーづくりのあるいは、まちづくりにおける成功する条件は何か。

一つは、よそ者とのコラボ。地方の大学を是非使ってください。そうでないと、日本の大学は、だんだんダメになってくる。アメリカの大学は、いい大学であればあるほど、自分たちの立地先の地域を大事にする。

私がモデルにしたネットワーク多摩というのは、カーネギーメロン大学とピッツバーグ大学です。

昔は公害のまちだったのですが、鉄がダメになって、失業率がものすごく上がりました。ピッツバーグ大学というのは、医学部で有名です。カーネギーメロン大学はソフトウェア、コンピュータで有名。それから人工知能でも有名。二つがあって、工業と医学が合わさって、バイオテクノロジーのまちに変わっていきました。それから、メロン銀行という、大きな地方銀行があります。それが、地域をどんどん良くしていこうとしている。

よそ者は、ヒントを与えてくれるし、気軽だし、よそ者が広報してくれるわけです。よそ者が一杯ネットワークを持っている。それを使うことができるわけです。よそ者とのコラボは絶対必要です。

うち者の強みももちろんある。うち者の人たちは、自分の城を持っている。自分自身しか持たない情報、それから、仲間と硬いネットワークを有する。硬いネットワークはものすごく重要だが、あまり硬いと困るものです。

また、専門家と素人のコラボも大事。専門家は深い知識を持っている。但し、狭い視野です。自分の専門しか知らない。自分が知っていることしか知らない。それから、専門家は面子を持っているから、なかなか間違いを認めない。でも、これはだめなのです。

素人の直感もとても大事です。素人の常識もそうです。専門家の常識なんて、特に大学の先生の常識はあまりない。しかし、素人と専門家の常識のバランスはとても大事。だから、コラボする必要があるのです。

最後、リーダーは、つくり育てる。リーダーがいなのですよというのは違う。作ってこなかった可能性がある。リーダーが出てくると、ゴンと打ちませんでしたか。いや、打ちませんでしたよというけれども、知らず知らずのうちにガンガン出てくる杭を打っている場合がある。リーダーがいというのは、リーダーを発見することではなくて、つくり、育てることです。リーダーはつくらなければならない。運動体の中から生まれてくる。

無理やり引っ張り出して、リーダーに仕上げてみて下さい。リーダーというのは、どちらかという鈍感です。だから、まちの中で楽観的な人がいい。リーダーなんてうちにはいないよというけれども、リーダーを目利きする人も必要です。おそらく、西小山では、東急の人が見ていた。

まちを育てるということ、駅前を育てるということで、自分のビジネスになる。東急にとっては、それは慈善事業ではなく、自分のビジネスになる。長期的に見ると、これはモノになるなというのわかる。

次は、リーダーを支える人が大事です。二階に上げて、はしごを下ろすということがたびたび起こります。それはだめですね。それを支えることが重要ですね。

どんな成功事例でも、それはリーダーを支える人がいたからです。それをやっぱり必要としています。

以上です。ここでは、皆様にまちの資源の棚卸を行っていただきたい。

私の町には、お金もないですし、人もないですし、誇ることは何にもないですよと言いますけれども、それはあなた自身がちゃんと見てないからです。どこにでもあるのですよ。なければ、どこからか輸入すればいいですよ。先ほどの西小山ミステリーツアーもそうです。これも毎年行いますけれども。まちの資源の棚卸を行ってみてください。

よそ者の目というのはとても大事です。コラボして、まちの資源の棚卸を行っていただきたいです。

以上で私の話は終わります。私もまだまだ話したいことはありますけれども、ここからは質問タイムとして、皆様からどんな質問でも引き受けます。

どうもありがとうございました。

(花巻市笹間)

先生のお話、とても参考になります。ありがとうございます。その中で、事例とは成功のためのステップを上げておられますが、方向性として、これは行ってはならないというものは、悪い例ですか実例があれば、教えていただければと思います。

(細野)

悪い事例ですか。いいにくいのですけれども、使ったコンサルが悪かったことがあります。

これはよくなかったですね。一年間いるのですけれども、そこから立て直さなければならぬから、とても大変です。それでまちの人たちはいっぱい勉強したとっていますが、頭でっかちになっている。あなたの勉強は、明後日の方向の勉強だったのだよと言います。

(花巻市笹間)

その判断というのは、我々素人には難しいと思いますが、どうしたらいいでしょうか。

(細野)

コンサルの世界での評価というものがあって、コンサルの世界って狭いのですよ。

でも、まちの人にはわかりませんよね。この人は専門家だからとお願いしますから。何で活性化できないのだろうと、仲間内で喧嘩するといった例があります。

要するに、丸投げしないことです。だから、こうしたワークショップを開くことがとっても大事です。自分の頭を使わないで、専門家の行ったことをそのまま鵜呑みにして、ああ勉強したと思う。これは勉強ではないのですよ。自分たちが入って、このコンサルは力がある、ないなということを見極めることが重要です。丸投げすることは、まち自身も悪いです。本当の勉強をしていないからです。

(柏原市高井)

我々住民というのは、行政を当てにしていまして、行政がイニシアティブをとるということですが、結果的にはまた弱ってきた。要は、住民から出てくるものを、どう行政がうまいこと料理するかということだと考えます。時間はかかるかもしれないが、たとえば予算編成ができて、それから実行まで1年しかないようなことがある。先ほどの講演の中では、行政がお膳立てをすれば、事業が進むという協議のモデルですよね。そういったものは、好きにしたほうがいいのではと思いますがどうでしょうか。

(細野)

これを仕掛けたのは東急と中大です。

(柏原市高井)

そうすると、後ろに下がり方が問題だと思います。

(細野)

行政が出張ってくるということですか。

(柏原市高井)

要するに、法律と予算が、結果的には決め手になると思います。

(細野)

だから、行政のお金だけを当てにしてはだめです。ここの事例では、自分で資金集めしようと、商店街でましょうとなりました。もうひとつ、これは拮抗しているわけです。この商店街は、目黒区と品川区がある。お互いの行政にも面子はある。そうすると、結構いろいろとがちがちにできるでしょう。どちらの行政もふんぞり返って、お金を出すというものではないです。お互いの行政も競争をします。私は行政のほうがかまかく介入できると考えている。金ばかり出さないと考えている。だから、行政の金だけを当てにしてはだめです。

(柏原市高井)

要は、行政がお金を持って来やすいような、住民の意識を作ることが大切なのは。

(細野)

行政はいろいろな事業費をもっているわけでしょ。それから、事業体自身が活用できる。行政がこれを事業に使ってくださいというのではなくて、私はこれがやりたいんだ、だから行政はこれに対応した事業費を出してくださいということ。だから逆です。住民自身が行政にイベントをアプローチするスタンスが重要です。行政がだめなら、東急の何とか財団とか、大学の実践的な教育費を使用してもいいと思います。

(柏原市高井)

一番言いたいのは、そうした住民の能動的な行動をどう引き起こすかということが、根本的に難しいということです。

(細野)

大事な質問です。

私たちも、こんなに改革的なことをできるとは思いませんでした。もう東急さんと中大さんは後ろでいいですよ。ここからは、われわれが行いますと言われた。

(柏原市高井)

やはり、続けるという住民のエネルギーの問題、住民の生活もありますよね。

そこでお金を生んで、それで生活をするということが重要だと思います。たぶん長期的な問題だと思いますが。

(細野)

その通りです。

このイベントをする時に、300人から400人集まればいいと考えていました。1,800人集まりました。

(柏原市高井)

一過性なら、1,800 人行くかも知れませんが。

(細野)

私はその言い方は賛成しません。

一回行ったから次はだめだよという考え方は、そんなこと言っているは何にもできないですよ。やってみなければわかりません。1,800 人から 800 人になるかもしれない 500 人になるかもしれないという、それははじめから負け戦をするということではなく、次に進化すれば良いということで、去年とは違う方法で活動すれば良いということです。なぜなら、一度行えば、問題点がいろいろ出てくるでしょう。それを解決すれば、1,800 人を 2,000 人にもできるかもしれないですよ。

(柏原市高井)

そのリーダーの作り方がお膳立てでは出来ないのではと考えますが。

(細野)

東急であり、私たち中大がお膳立てをしたのです。

このイベントが成功するかどうかは、はじめからわかりませんでした。行政や私たちは何にも出していませんよ。まちの会費で行いました。多分、来年には行政は出すかもしれない。お金はそんなにかかっていません。150 万ぐらいです。それで 1,800 人です。

今年は成功したと思いますので、来年には両方の区から補助金が出るかもしれません。そうすると今度はいろいろできるかも知れない。

初めは行政が資金を出すという形があってもいいかもしれない。要するに、ここは人口密度がかなり高い地域です。商店街の裏側には人がいっぱい住んでいます。このケースでは、お客を集めて商売しなければならぬということが違います。

150 万ぐらいすぐに集められるかもしれない。学生はタダです。すべて手弁当で行っています。みんな手作りですよ。お金なんてそんなにかける必要なんてないのですよ。

(雲南市大嶋)

西小山ミステリーツアーでの PR 活動、どこら辺のエリアにどのような形で、メディアをどこまで使用していたのか。

(細野)

お客様は埼玉県から来ました。というのはマスコミがほとんどタダで PR してくれました。

首都圏では約 300 万世帯が日経新聞を購読しています。大体学生たちがこういうイベントを行うとすると、日経新聞は記事にしました。しかも、今まで取り上げないような地域が取り上げられますから、メディアは珍しがって記事にします。それで効果があって、埼玉県から来られました。

(雲南市大嶋)

1,800 人のお客を集めたということですが、どんな参加者があったのか。内容を教えていただけますか。

(細野)

ファミリー、お年寄り夫婦、おばさんグループが多かったです。
あまり若いカップルはいませんでした。

(雲南市大嶋)

若い参加者は少なかったということですか。

(細野)

いましたが、割合としては少なかった。

(やんばる 3 村大山)

こちらの商店街で、会議に参加された方は、若い人から 50 代、お年寄りまで年齢層はさまざまだったと思いますが、リーダーを若い人にさせるというのは、本人が自ら行おうとしたのか、それとも会議の中で若い人にやらせようとしたのか、どちらでしょうか。

(細野)

若い人に仕事をさせるのが当初の目的でした。なぜなら、参加する人はお年寄りが多いからです。そしてその中に学生たちを混ぜます。そしてちょうど中間の人をリーダーとします。お年寄りがたというのは結構力を持っていますが、活力はないです。

(やんばる村大山)

私の地域では、そんなに若い人がいなくて、やらせたいと思っても、なかなか日々の生活に追われて、できないということになると、次の人を探さなければならなくなります。

今回の場合はうまくいったと思いますが、やはり田舎に行くと探さないといけないような状況になると思います。

(細野)

それはケースバイケースです。

たまたま西小山には、若手がいましたし、若手をバックアップしようとするお年寄りもいました。だから成功したと思います。彼がリーダーとして確立して、次の世代を見つけようとする時に、彼が成功するかどうかはわかりません。それは別の課題です。

しかし、そうした連盟を続けなければならないです。西小山は小さなまちですから、立川のような大きなまちでは、ボスというのがものすごく大事になります。けれども、小さなまちでは、若手にやらせましようというお年寄りがたくさんいますから、若手も出てきます。場所によって、どういうリーダーを担ぎ出すかということは大事です。

最適解はその場所で見つければなりません。最も望ましいリーダーは、その場所の状況によります。一般的な、方程式の解答はありません。だから目利きは大事です。

(笠岡市守屋)

年に一度のイベントということですが、その後の商店街活性化の効果はどうなったのでしょうか。

(細野)

今まで、商店街で何やってもだめだと思っていた商店街の人たちが、このイベントを経由して、お客におもてなしや、誠意を見せると、お客を呼ぶ、ということが大事だと気づく。

そうすると、イベントを日々行ってもしょうがないです。祭りと違いますから。

ああ、お客を呼ぶということがこんなに楽しいのかと思うようになります。では、こういうことを自分のところでも工夫してみようかということになります。ポスターに自分自身を貼って、遊び心で行っています。

(笠岡市守屋)

たとえば、一年間そこにいた人が、もう一回か二回来るかということが集客ですよね。そうすると、イベントがないと来ないという状況があるのではと思いますが。

やはり、地元の人がいかに来させるかということが重要ではと思います。

(細野)

その通りです。

先ほどの事例の西小山商店街の裏側というのは住宅が密集しています。そのニーズをどうやって掴むか。お客様を呼ぶということがこんなに楽しいことなのかと気づかせることができれば、毎日来て欲しいと思います。裏側にいっぱい私のお客がいるのだということがわかれば、パンをいろいろ工夫してみようかと考えたり、野菜についても何か命名してみようかと考えたり。どこにこだわりを持つかと考えると、努力しますよ。

(笠岡市守屋)

イベントの運営を考える協議会ではなくて、商店街全体の活動を考えるということですよ。

(細野)

もちろんその通りです。そのために、お客様が来るということがどんなに大事か、どんなに楽しいかということを気づかせるためにイベントを行ったわけです。

イベントを行うために、活性化協議会を発足したわけではないです。商店が活性化するための活性化協議会であって、そのためにはどういった気づきをさせるかというために、このイベントを行ったわけです。

(笠岡市守屋)

逆に、地方だと少ない中から、そういう人を出そうとするとかなり苦労がいますので、10年20年行ってもなかなかできないから、そのあたりが難しいなと思いました。

もう一点ですが、新しい団体を作ろうとして活動しようとする、既存や新興団体との軋轢が必ず出てくるとは思います、そのあたりはどのように活動したらいいでしょうか。

(細野)

先ほどの紹介で、ネットワーク多摩がありますが、大学は大学でナショナリズムがあります。自治体も同様に、ほかの地域にメリットとなるような税金の使い方をするなというナショナリズムがあり

ます。

立川の場合、このまま南北戦争をやっている、もちろん両者の面子もありますが、立ち行かなくなるという意識があったと思います。

それから西小山の場合、若手に商工会館を使わせたくないというお年寄りもいました。しかし、その時よかったのが、やはり駅前の大地主が東急だったということです。だから東急の意見は無視できなかった。

こうしたケースが皆様の地域で言えるかはわかりません。だから、新旧の交代をどうするかはとても難しいです。

皆様にひとつ提案があります。ホームページを作ってください。若手が作ります。商店街の若手が自主的に作ってください。

(笠岡市守屋)

我々だと、50代でも若手です。

(細野)

そうですね。青年部会といっても50代が中心ですよ。

東京でも同じです。東京の商店街振興会でも同じです。大体50代です。

しかし、ひとつ新旧の交代に、IT技術を導入することも重要かも知れません。

(笠岡市守屋)

ホームページを作っても、見る人がいないですよ。お年寄りが多いですから。

我々の商店街では明かりすらありません。日本一暗い商店街です。

(細野)

なぜ若手がいなかったのかという分析をしてみましたか。

(笠岡市守屋)

それは後継者、仕事が成り立たなくて跡取りがいなかったということではないでしょうか。

(細野)

それは、東京でも同じです。東京の商店街へアンケートを出し、最も問題は何ですかという問いに、後継者と答えています。

(笠岡市守屋)

東京だと、後継者となる人はいなくても、市場となる購買層はいますよね。

(細野)

商店街の裏側にどういった人が住んでいるかということがとても大切です。商店街に呉服屋さんや葬儀屋さんが残っていないという状況では、日用の需要が賄えることはできません。

(笠岡市守屋)

そうすると、郊外の大手スーパーに向かい、シャッター街になります。

(細野)

そうした空気を住まわせるのではなくて、そこに地域のコミュニティのニーズを充足するものを持って来れないか。

(笠岡市守屋)

昔の御用聞きのような…。

(細野)

そうすれば、御用聞きを使う場合でも、うちに呉服屋がいっぱいあります。どうでしょうかと御用聞きをしますよね。

(笠岡市守屋)

まちづくりの一環として物を売っているというよりは、地域の機能的な部分を持っていますよね。その辺をどう活かすかという人材育成が問題となるとと思いますが、商売だけでなくまち全体からどれだけのことができるかということを考えなければならぬと。

(細野)

商店街の問題を商店街で解決しようとしても無理です。だから、もっと目を広げて、信用金庫や行政の人を入れて、指導すればいいのですよ。人づくりというのはそういうことです。

(笠岡市守屋)

行政としても成果を出せないと、次がないので1年でも6ヶ月でも成果を挙げないといけない。この事業でもそうですよね。

(細野)

これは、きっかけですよ。

まちづくりは10年単位です。立川が多摩地域で拠点となったのは、10年かかりました。

ただし、10年かかるからといって、明日からはじめなければいけないです。

人口問題を考えてください。1970年代には人口が減少するとわかっていました。そこから40年たって、今底ですよ。このままではまだまだ下がります。

すべて問題の先送りです。まちづくりは10年単位です。10年かかります。その間、どうやってしんどいことをやっていけるか。

そして、東京一人勝ちと言っていますが、世界から見ると東京は負け組ですよ。なぜなら地方に元気がないからです。東京に人口を吸収されている。ブラックホールです。人口を呼んでも再生産できない。こんな人口移動は早くやめなければならない。それには、地方が頑張してほしい。

今日皆様にお話をしましたが、その危機感があるか。もう今からはじめなければなりません。日本全体が負け組です。地方に元気があるようにしなければいけない。

これで私の話は終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

第二部

ワークショップの部

(中村)

それでは、お時間になりましたので、引き続き第2部ワークショップを開始いたします。

このワークショップでは、人づくりをキーワードにして、地域同士の皆様に議論していただきたいと思います。課題の明確化や、解決策を図る際の方法など、少しでも議論していただければと思います。

皆様の手元には、質問状を配布しています。先ず、前半の議論を聞いていただいて、もっとこの地域の話を知りたいということ、この質問状の方に書いていただきたいと思います。そして、休憩時間に回収させていただきます。

前半後半入れ替わった後も、同様な形を取りまして、最後、前半後半終了した時に、その質問状をもとにもう一度時間の許す限り、議論、質疑応答をしていただきたいと思いますと考えています。

それでは、前半のワークショップを進行する担当者を紹介します。

愛知大学三遠南信地域連携センターの上席研究員でいらっしゃいます、黍嶋久好先生です。

(黍嶋)

宜しくお願ひ致します。

(中村)

先生は、大学では地域政策論、教育論を担当されていまして、国土交通省地域振興アドバイザーとしてもお勤めしておりまして、長野県の泰阜村や、静岡県得天龍村のアドバイザーもされていらっしゃいます。

またオブザーバーとしまして、引き続き細野先生にもご参加していただきます。

それでは、細野先生、黍嶋先生、宜しくお願ひいたします。

(黍嶋)

ご紹介していただきました、愛知大学の黍嶋と申します。どうぞ宜しくお願ひいたします。

私は、元々役場の職員でしたので、先ほどの先生とのやり取りをお聞きしましても、とても懐かしく、現場で自分たちが行ってきたことを振り返りながら、聞いておりました。

今日参加されている団体の名簿を見ますと、色々な組織から参加している方、それから役職の高い方がおられます。

次の三つをまとめて、お話ししていただければと思います。

先ず、一点目に、地域づくり、地域再生、地域活性化の中で、求められている人材育成について、なぜその人材育成に焦点を当てたのか、そのきっかけは何であったのかということです。

次に二点目ですが、皆様の計画書を拝見すると高い見識と見通しのもとで書かれていると思いますが、どのような人材を求めているのか、皆様自身が地域づくりのリーダーであるのかということを含

めて、発言していただきたいと思います。

最後に三つ目です。皆様の地域での活動または、立ち位置、つまり地域を自分たちがどういう風に見ているのかを含めて、今までに活動してきたことは何か、そして何ができて何ができなかったかを含めて地域の紹介をしていただきたいと思います。

各地域の紹介については、お手元の資料にあると思いますので、その説明をしていただいても結構です。この三点に絞って発言していただければと思います。それに基づいて討論、議論していくという形を取りたいと思います。そして、議論の途中で、細野先生にもアドバイスしていただくという形で進行してまいりたいと思います。お願いいたします。

それでは、花巻市さんから始めたいと思います。

(花巻市浅沼)

岩手県の花巻市から来ました、浅沼と申します。私は、花巻市役所の職員でありまして、業計画書は地区の皆様方と協議しながら、作成しました。

まず、人材育成というこの事業に参加したきっかけをお話いたします。花巻市は、農業を主体としています。そして、私どもがおります太田地区というのは、中心から外れておりまして、稲作を中心とした準農村地帯です。当然農家を営んでいる方が多いわけですが、最近は担い手農家の減少や農業就労者の高齢化、耕作放棄地の増加などの問題が出てきております。商店街の衰退と同じように、農村地帯の衰退というものも進行しています。

その中で、2つの大きな目標を立て、人材育成を推進していきたいと思いました。

一つは、グリーンツーリズムの推進です。現在も、修学旅行生を受け入れる形で、グリーンツーリズムを推進しています。しかし、受け入れ農家が急減少状態です。これを是非増やしていきたいと考えました。

もう一つは、地区の中心に古い民家を移築した、村の家というものがございまして。移築から20年経ちますが、この建物は花巻市の施設です。今は、集会所としてしか機能しておりません。移築当時、利用率は高かったのですが、今では利用者も減少して、宝の持ち腐れ状態です。これを、グリーンツーリズムと合わせて活性化できないかと考えました。

それからもう一つですが、地場産品を利用した加工食品の開発、販売をしております。現在、太田地区に道の駅構想があり、地区の中心部に県道がありまして、そのバイパスが今工事中です。平成26年に開通する予定ですが、バイパスができますと今の県道が旧道になり、交通量が減少すると考えています。今の県道沿いに産直施設がありまして、その産直施設のあり方が問題になっています。地元のお考えとしては、新しくできたバイパスに移動したいという機運があります。

この産直施設に、もちろんこの施設が道の駅になればいいと思いますが、食堂などの施設を建設して、開発した食品などを販売できればと考えています。

グリーンツーリズムと地場産品の開発とを合わせ、全体的に、観光も含めてコーディネートできる人材を育成したいと考え、今日はこの研修会に参加しました。

宜しくお願い致します。

(黍嶋)

ありがとうございます。ところで確認したいのですが、お話していただいた内容について、大きく2つの話があると思いますが、一つは太田地区の農村地帯のグリーンツーリズムを観光と捉えていいのでしょうか。

(花巻市浅沼)

今は、修学旅行生の受け入れが中心ですので、観光ではないです。

(黍嶋)

これは、またグリーンツーリズムは何かと合わせて、後ほどお聞きしたいと思います。それから地場産品の開発・加工・販売という1次、2次、3次産業をコンパクトにするということですが、そのための人材とグリーンツーリズムを担う人材とを育成したいということで、グリーンツーリズムの事業計画書にはアドバイザーという表現をしています。皆さんがアドバイザーを育成していくということですか。それとも、皆さんがアドバイザーであると捉えていいのでしょうか。

(花巻市浅沼)

アドバイザーとなる方を育成したいということです。

(黍嶋)

ありがとうございます。それでは次に、柏原市さん宜しくお願いします。

(柏原市石垣)

柏原市まちづくり部まちづくり課石垣でございます。今日は、ワインの会社を営んでいる社長を呼びました。それと歴史資源を活かしていきたいということで、歴史研究を行っている事務局の方を呼びました。地区のハード整備を行おうと考えておりますので、その関係で都市整備の方も呼びました。

人材育成のきっかけは、大阪府で橋本知事が、昨年から大阪ミュージアム構想を立ち上げております。これは大阪府の知られざる資源、地域資源、つまり建物、歴史、食文化といったものを全国的に発信していき、大阪を元気にしようではないかというのが始まりです。大阪府のホームページには、大阪ミュージアム構想について設けられておまして、大阪府から47市町村の歴史的な文化、建物の見所、食の文化を紹介しています。その中で、柏原市も応募しまして、ホームページに掲載させていただきました。

大阪ミュージアム構想の中で、特に大阪府の中で大阪府から補助金の2分の1を出していただいて、モデル地区を6地区作ろうということで、今年は選ばれることになりました。

柏原市は大阪市内から20分ぐらいのところでありまして、比較的便利なところにあります。しかしながら、都会的なところでもなく、自然がたくさんある田舎っぽいところです。市内の約3分の2が山です。大阪では珍しく、一級河川が市を分断するように流れております。

その中で、歴史的資源がたくさんあります。古墳や、在原業平が歩いたと言われる街道がありまして、それが物語として言い伝えられています。

そういった、歴史的資源が市にあります。ウォーキングで市に来られる人にここぞというところがありませんでした。

歴史的調査やミュージアムの補助金をきっかけに、どこかにこの歴史資源について拠点を設けようと思ひまして、地元の方々と協議をしてこの企画を計画しました。

太平寺地区というのは、在原業平が歩いた街道があります。また柏原市は大阪ブドウの発祥の地であり、名産地です。明治11年に、国から大阪にブドウを栽培して欲しいということを言われ、栽培に初めて成功したのが柏原市です。

このブドウを活かした大阪ワインを製造している会社が大阪に7社あり、その内の2社が柏原市にございます。この食文化そして歴史的なもの、在原業平や隣接する奈良県の東大寺の大仏のモデルが柏原市の智識寺にあったといわれており、これらを活かす形で、まちづくり、地域活性化をしていきたいと考えています。

どのような人材を求めるかについては、観光資源や太平寺地区を中心とした地域全体を活性化につなげられる、活動を広げられるような人材、リーダーを求めています。

(黍嶋)

ありがとうございました。賑わいのあるまちづくりが人づくりのテーマであるとおっしゃっていますが、その賑わいを作り出す人をつくるという意味でしょうか。食文化や歴史資源を太平寺地区で活用する人材は、そこにあるということでしょうか。

(柏原市石垣)

素材、歴史資源はありますが、資源を活かして、色々なイベントを行ったりするまとまりのある人材が無く、食や歴史の方々を集めてまとめるような協議会があればと考えています。

(黍嶋)

分かりました。ありがとうございます。それでは、黒滝村さんお願いします。

(黒滝村北村)

奈良県黒滝村から参りました、黒滝村総務課観光地域振興の北村と申します。それから、村の観光施設である森物語村の職員である福西との二人で進めたいと思います。

先ず黒滝村がどこにあるのかから説明します。吉野の桜をご存知だと思います。その南にある村ですけれども、近年世界遺産に登録された吉野の端をかするところに位置しています。その南には、洞川温泉という紅葉で有名な名所があります。

そういう名所に挟まれた隠れた村から今回参加しました。

何もない村として紹介された村で、林業で昔から栄えた、吉野杉で有名なところですが、村の全てが杉に囲まれていると考えていただいて結構です。

紅葉も無ければ名所も無い、緑の地域です。96%が山地で、平地も無いという場所で何ができるかということです。15年前から道の駅が出来、観光施設としてバンガローやコテージ、そしてホテルなど、バブルがはじける前に造られた建物がある状態です。こうした資源を活用して何ができるかということを考えています。

人口は、毎年5%程度いなくなります。昨日では950人でした。過去5年間、毎年40名出て行っています。しかし、ここには元気なおじいちゃんおばあちゃんがあります。これを何とかしなければということで、昨年からはグリーンツーリズム、林業ツーリズムとして、こんにやくを作る、草木染をするところから始めました。

今では、黒滝のこんにやくは、有名になっています。そんな中で、個々の体験イベントを行っていますが、おじいちゃんおばあちゃんなので、PR活動も出来ませんし、それに向け何かをすることも出来ず、村から言われて体験活動を行うかたちです。

それを村として、どうにかして活性化につなげ、おじいちゃんおばあちゃんに元気になってもらえるようなことが出来ればと、そして若い人が来て若い人の活力で活性化したい。イベントやPR活動

のほか、村全体として観光資源を通じたまちづくりを行うためにも、しっかりと組織をつくり、組織として受け入れ態勢を作らなければならないと考えています。

人材育成については、確かに村の何人かはガイドが出来ますが、きちんとしたガイドさんがいないので、村全体をガイドできる人材をこれから育成していきたいと考えています。

宮崎県ではありませんが、この村を何とかせなあかんといい、参加しました。

(黍嶋)

ありがとうございました。村で色々なプログラムを組んで地域再生を担う人材育成を行っていると思います。黒滝村では、元気なおじいちゃんおばあちゃんがいて、村全体の観光ガイドも出来るという捉え方で、人材を育成したいということでしょうか。

(黒滝村北村)

そうです。観光だけでなく、定住していただいて、人口維持を行っていききたいと考えています。

(黍嶋)

ありがとうございます。それでは、国頭村さん宜しくお願いします。

(やんばる 3村大城)

沖縄県国頭村の企画商工課から参りました大城と申します。それから、おおぎみまるごとツーリズムの地域協議会の事務局をしております大山と二人で参りました。宜しくお願いします。

先ず、今回地域の活動を推進する団体として、やんばる交流推進連絡協議会という、国頭村と東村と大宜味村の3村で観光を推進しています。協議会は昨年立ち上げました。

やんばるといのは、沖縄本島で北の端にある三角形、北には国頭村、西に大宜味村、東に東村の3つの村を言います。那覇から高速道路を使って車で2時間かかります。山しかない田舎村です。やんばるといのは、山の原と書いてやんばるといいます。

その中には、絶滅の危機にある飛べない鳥、ヤンバルクイナなど、世界中でも珍しい固有種が6種類あります。自然の豊富な地域です。

しかし、他の地域と同様な問題を抱えています。地理的な面から農業も栄えませんし、人口も流出し、それに伴う少子高齢化になっています。そうした問題を解決する為に、各村で交流人口を増やせないかということで、行っていました。しかし、本島中央の名護に人口を吸収され、やんばる3地域に人口が流入できない状態です。

そこで昨年、子供、小学生を田舎の農家に民泊させて、教育効果を高めようという事業を3村で取り組んで行うために結成されたのが、やんばる交流推進連絡協議会というものです。

その組織には、3村の村長を含めて、教育長、商工会議所、農協で構成されています。去年は、小学生の民泊を受け入れるための勉強会を行って参りました。

3つの行政が一体的な動きが出来ず、またそれぞれが持つ地域の資源や活動を他の村の住民にも知ってもらい、それを理解して、教育にも活かすことができればと考え、この事業を行っております。それぞれの村の資源について勉強会を行ったり、それを活かすためのプログラムを作成したりしています。それを3村一致してキャンペーンを行えるような活動を行っていききたいと思っております。

どのような人材を求めるかについては、細野先生のお話にもあった、お互い様効果を活かして、3村に来たお客様が一人でも、3村全体では3名のお客様が来たことになると考え、人材を育成でき

ばと考えております。

現在の状況は、結成して1年目ですので、これから体制作りを行っていかうというところでありま
す。また、他の地域も同様にあると思いますが、あきらめ感を改善しようと思ひまして、危機感を持
ち、行っていかうと思ひます。

(黍嶋)

ありがとうございました。

今までのお話で、それぞれの市町村さんに対してご質問などはありますか。

(会場質問)

三つの事業は、人口の減少に伴って、担い手が減少しているということですね。そしてもう一つ柏
原市さんは観光についてですよね。

(柏原市石垣)

我々の市も人口は減っています。ブドウが名産ですが、ブドウ栽培の従事者の高齢化が進んでいる
ということもあります。ワインも地元で作ったブドウを使用することに意味があるので、その辺も課
題です。

行政が主体となってまちづくりをするのではなく、市民が主体となってまちづくりをしたいなど考
えています。行政も今財政難ですから、いかに市民の力を借りてまちづくりをするかということ考
えています。

(会場質問)

皆さんのところには観光地がたくさんあるということでしたから、我々もお邪魔して、見させてい
ただきたいと思ひます。重要文化財や観光資源があるにもかかわらず、どうして人口が減少してい
るのかということに疑問を持ちました。

(細野)

近畿で人口が増えているのは、滋賀県だけです。その他の県は減っています。特に、大阪府は、あ
れだけの経済ポテンシャルがありながら、若手が減っている。

(黍嶋)

私の住んでいる村も人口が減少していて、将来は消えてなくなるのではといわれています。

では、その人口が減少している中で、何ができるかということをおひさんは考えていると思ひます。

この研修会に参加された方々には、色々な団体があつて、その団体の人たちが担い手となつて、人
材を育成する、合わせて自分たちが人材だと考えていると思ひます。

おひさんは、色々な協議会を作ろうとしてきたと思ひますが、実はその協議会の仕組みと合わせて、
おひさん自身が持つておられる組織の中でも、人材ですとか先を読むといった、おそらく言葉では言い
表せない深い悩みを抱えていると思ひます。

それを一言毎あらわしていただけませんか。人材育成のための課題は何かということをおひし
ます。

(花巻市安藤)

太田地区振興会の安藤と申します。

実は、太田地区で地域ビジョンを作りましょうという計画がありまして、人口については、極端に減少しているわけではありませんが、少しずつ減少して、高齢者が増えている現状となっております。地域に魅力が無いわけではないと思いますが、やはり一番の原因は働く場所がないということだと思います。

そして、地域ビジョンの作成にあたり、その辺りを問題にして踏まえていこうと考えています。

(細野)

花巻は、新幹線も止まる、飛行場もある、温泉もある、宮沢賢治もいる。財産を一杯持っているのに、なぜそれを活用しないのか。活用する人材づくりということですよ。

(花巻市安藤)

先生のおっしゃるとおりだと思います。それぞれ特徴はありますが、それらをどう連携していくかが見つからず問題となっております。

(花巻市戸来)

戸来と申します。花巻農協の理事をやっておりますが、地場産品を利用した加工食品について今回は、参加しました。平成8年に農家の女性たちと行政の補助金と農協のお金を出して、農産物観光所を立ち上げました。またその時に、宮沢賢治生誕100年祭がありまして、そこで花巻の生産物を使って盛り返ししようと思いました。

そして、花巻は雑穀の生産日本一で、雑穀を使ってメニューを開発中です。

(黍嶋)

ありがとうございます。では、伊藤さん宜しくお願いします。

(花巻市伊藤)

花巻農協に勤務しております、伊藤と申します。仕事は、グリーンツーリズムの確立ということで、首都圏からの修学旅行生を農家に民泊することを調整しています。

課題ということですが、農家民泊は農家がいなければ成立しないので、農家の後継者というのが一番の課題です。家族で受け入れるので、おじいちゃんおばあちゃんが受け入れたいといっても、お父さんお母さんは拒否することがあり、そうすれば受け入れが出来ないということになります。地域全体を通して、農家民泊を受け入れる体制または雰囲気作りをしていくことが課題です。また農家民泊だけでなく、その他の観光資源を通じた体験活動の掘り起こしなどが課題となっております。

点々を面として扱えるコーディネーターの育成、体験活動の掘り起こしが課題となっております。

(黍嶋)

その農家の掘り起こしは、具体的にはどういったことですか。

(花巻市伊藤)

昔から伝わるもの、例えば郷土料理を伝えるなどです。また田植えやそば打ちなど花巻にしかない

ものの中で、それを伝えることを考えながら、掘り起こしをしています。

(細野)

石川県に能都町というところがあります。そこと情報交換をしたらいいと思います。

(黍嶋)

それでは、佐々木さん宜しくお願いします。

(花巻市佐々木)

岩手県職員の佐々木賢一と申します。県単位県職員として地域振興で何ができるのだろうかと思っているところです。

(黍嶋)

県は何ができるのだろうかということも考えていただき、岩手県に帰っても、花巻の方にも向いて欲しいです。

それでは、次は泉さん宜しくお願いします。

(柏原市泉)

泉と申します。私は、まちづくりの仕事をしていまして事務局的な立場です。柏原市は大阪から近く、またブドウ栽培という農業もあり、そして歴史もあるところです。しかし住宅開発が進んでいて、ブドウ畑が潰れているところが課題ではないかと思えます。

ブドウ畑を守ることに他に歴史的なものや、地元が産業として成り立つことが重要ではないかと思えます。全体的な町並みを守るその大きな手法の一つとして、観光が大切ではないかと思えます。自分のまちを守りながら、外の人と交流できるという両方のバランスをもった人材を育成できればと考えています。

(黍嶋)

ありがとうございます。では、岡本さん。

(柏原市岡本)

私は、この中で最年長ということで、智識の会会長をしております。智識の会というのは、奈良の大仏のもととなったものを研究するところです。智識というのは、知識ではなく仏教用語で、仏教に対して私財を投げ打ってするということです。

我々は全て民衆の手で作ろうとしていまして、これは民営ではないかということで、実際行ってみると、行政からお金が出るということでした。ですが我々はこれからもそれを当てにせず、しかし、まちづくりを行った景観と合わせてやっていこうということでした。

今日は、そうした補助金に目がくらむのではなく、我々自身の手で行うものだと感じました。

(黍嶋)

ありがとうございました。それでは、高井さん。

(柏原市高井)

岡本さんからもお話があったように、住民主体で行わなければならないということです。自立した地域をつくることが重要で、それがいかに地域に貢献できるかということを考える必要があります。それによって相乗効果が上がって、盛り上がる人材を育成することが大切だと思います。

我々は、ワインを作っている会社ですが、一番の課題は、ブドウ農家の高齢化でこれを何とか活性化することだと考えています。今はワイン愛好家に、ブドウを作ってもらおうボランティアをしているところです。そして飲食店が、自分の畑を持てるような方向で行っています。

農家は、まだ自立しているところが残っています。残るということは、まだそこそこ金になるということです。ですから、こういう人たちが自分の畑だけではなく全体を見渡して全体で盛り上げていけたらと考えています。

要するに、全員参加のまちづくりを行わないといけないということです。その起爆剤として、行政があとからこれはいいではないかというものを、法律を使って後押しするのが理想です。

(細野)

智識の会というのはとっても大事だと思います。この会でどういう人材育成を行うのですか。

(柏原市岡本)

もっと骨格をはっきりさせていきたいと考えています。

(黍嶋)

それでは森本さん、先ほどの話から、行政もまちづくりのパートナーと考えれば、決して行政が主導するのではなく、一緒に生きるという考えもできると思います。

(柏原市森本)

そうですね。農村と行政が一体となってまちづくりを行うということが出来ると思います。特に、私は主に道路整備などハード面を担当しています。作ったら終わりでは無く、作ったものをどうやって維持していくか、そしていかに発展させるかが問題だと思います。まちづくり協議会を通じて、まちを将来にわたって発展できればと思っています。それに必要な人材育成の問題に直面しています。

(黍嶋)

ありがとうございます。次は、福西さんお願いします。

(黒滝村福西)

奈良県黒滝村から来ました福西と申します。財団法人黒滝村森物語村というのは、黒滝村には昔から林業しかなくて、観光というものは殆どありませんでした。そこでこの施設を通じて観光にも取り組みたいということで始めたものです。自然に触れ合っただくことを目的にしています。その為にも人材育成が必要であると考えて、今回参加しました。

(黍嶋)

次は、大山さん宜しくお願いします。

(やんばる 3 村大山)

おおぎみ・まるごとツーリズム地域協議会の事務局をさせていただいている、大山と申します。おおぎみ・まるごとツーリズムが何をやっているかと申しますと、グリーンツーリズムとエコツーリズムの協議会をまとめています。やんばる地区 3 村はツーリズム事業が遅れています。山や海といった資源は沢山ある中で、大宜味村は長寿の村として有名ですが、大宜味村だけツーリズム事業が遅れています。

いくつか事業はありましたが、事業が終わると全て解散してしまうということになり、行政に頼りっきりとなっていました。こうした考えから、住民主導としたまちづくりを行うことを目的としています。私は 40 代ではありますが、若手との意見調整が難しいところもあります。観光において若手と高齢者とのインタープリターとして、人材育成をしていきたいと考えています。今はどちらかという、PR 不足という面がありますので、その辺を含めて推進していきたいと考えています。

(黍嶋)

ありがとうございました。皆さんここまででご質問はありませんか。

(柏原市岡本)

篠山市さんの黒豆はブランド性を高めるために、解禁日を設けているのですか。

(丹波市・篠山市大路)

大路と申します。ブランド性を守るために行っています。解禁日前の黒豆はただの枝豆ですが、解禁日後の黒豆は、正月用に使用される黒豆として販売しております。また今年から、認証制を導入し、ルールを守るようにしています。

(柏原市岡本)

それを守るために、地元の方に協力をしていただいているということですね。

(丹波市・篠山市大路)

そうです。ほぼ守っていただいております。また黒豆として評価もいただいております。

(黍嶋)

今回のワークショップで、それぞれの地域が抱える問題は、それぞれの地域で解決しなければならないと思います。こうした機会は中々ないので、他の地域と交流していただければと思います。

私の現場にいた経験から、地域づくり、まちづくり、人づくりに答えはないと確信しています。私は一生がまちづくりだと思います。その中で大きなことは出来なくても、小さなことを積み重ねていくことが大切だと思います。行政だけが出来るわけでもないですし、民間だけで出来るわけでもないです。自分自身が変わらなければ、相手も変わらないだろうと考えています。地域づくりの醍醐味は、あるものが化けるということだと思いますから、そうした感じを実感して頂ければと思います。

それでは、前半の部を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(中村)

ありがとうございました。これから 5 分ほど休憩に入りたいと思います。

(中村)

それでは、お時間になりましたので、ワークショップの後半の部を始めさせていただきます。丹波市さん、篠山市さん、笠岡市さん、雲南市さんを中心に、ご議論していただきます。前半に引き続き、宜しくお願いいたします。

(黍嶋)

それでは、後半を始めさせていただきます。では、丹波市・篠山市さんから、宜しくお願いいたします。

(丹波市・篠山市森岡)

篠山チルドレンミュージアムの館長をしています、森岡と申します。

丹波市では恐竜を生かしたまちづくりという企画をしております、日本初の恐竜化石が発掘され、調査が進められています。そして今回は、その恐竜の化石を発掘された方が来られています。

篠山市と丹波市は隣同士の市で、兵庫県で丹波地域を構成している2市です。篠山市と丹波市との境に、掘れば化石が出てくるところがありまして、両市をまたぐ貴重な資源ということで、色々な取り組みをしている状況です。

人材育成のきっかけは、化石をまちづくりに活かして、まちづくりのシンボル資源として活動しようとしたことです。第一発見者の村上さんをはじめ地域の方々が活動をしています。また、観光協会では、化石を活かした商品開発をしています。

後を追うように、篠山市が発掘調査をしています。篠山市でも哺乳類の先祖の化石が発掘されました。これは学術的に価値が高いそうです。

この地域では、エリアマネジメントという言葉を使っています。地域全体を見渡して、地域の資源を組み合わせ、広域的に地域活性化をしていこうというものです。化石が発掘されたので、化石を中心にエリア全体を見渡せるプロデューサーやマネージャーが養成できないかと考えているところです。アプローチとしては、個々で頑張っている人を一同に介して、情報交換やトップコーディネートする人材育成のプログラムが、化石の発掘をはじめ、違うまちづくりに転換できるようにしたいと考えています。

ここでは、化石を使った商品開発や、ツアープログラムがありますが、これを地域の資源に読み替えて作っていただけるように、商品開発や食農プログラム、地域を巡るツアーや環境教育というものにつなげていきたいと考えています。化石だけでなく、地域全体を見渡せる人材を育成していきたいと思っています。

(黍嶋)

ありがとうございます。それでは、笠岡市さん宜しくお願いいたします。

(笠岡市守屋)

笠岡市の協働まちづくり課の守屋と申します。笠岡市では行政主導のまちづくりを行っています。なぜなら、民間主導ではできないことが多々ありまして、たとえば、人間関係ですとか、組織のあり方については、行政がその一端を担わなければならないと考えています。

笠岡市は、カブトガニの生息地であります。また瀬戸内海の真ん中に位置しておりまして、山もあります。笠岡干拓もあります。私は協働まちづくり課では、島を担当しておりまして、島全体をまと

めてNPO法人かさおか島づくり海社という団体を立ち上げて、行政からお金をもらって、行政がNPOの顔をして地域づくりを行っている現状です。金がないとはいいますが、それはあり方しだいで変えられると考えています。

去年からこの事業を行っています。去年は、商店街と山間地と海とを連携をして、活動の場を商店街に設けて行ってきました。

福井さんは商店街で呉服屋さんを営んでいましたが、今年は島で、クイック福岡という株式会社をつくり、その社員となりました。島と商店街が一体となって活動をし、商店街に店舗を設けて、島で作ったものを商店街で売るということをしています。企業のワークシェアリングで7月から12月まで笠岡に来ていただいて、この事業に参画して、広告会社である経験を活かして、人材などを取り込んで地域に住みながら仕事をしていただくという作戦であります。

何かのために、まちづくりをするのかではなく、地域連携と言っていますが、それぞれの地域が一番だと思っていると考えています。個々での長けている部分を活かしながら、ほかの地域と連携しながら、それらを補完することが重要と考えています。情報の交流を人材育成のキーワードとしてまとめようとしています。商店街を歩いて、店主に自分の商品を紹介していただくということをしていました。これを通して、地域の食であるとか地域で何をしているのかということについて、インターネットを通じて配信しています。

これが今回の事業内容です。この事業のための人材育成ではなくて、笠岡市全体を通して自分の損得に関わらないという人材を求めています。

(黍嶋)

ありがとうございました。それでは、雲南市さん、宜しくお願いします。

(雲南市高木)

宜しくお願いします。島根県雲南市吉田村の鉄の歴史地域再生協議会の事務局を行っています、高木と申します。

吉田町というのは、雲南市と合併しました。それまでは、吉田村でして、黍嶋先生にもいろいろご指導していただきました。昭和58年から事業を行ってまいり、昭和61年に鉄の歴史村宣言をしました。日本に一箇所しかないたたら製鉄がありまして、この歴史的文化をもとに鉄の歴史村を立ち上げ、これを中心にまちづくりを行おうと考えています。

鉄の歴史村宣言をしてから、博物館で鉄の技術を伝承し、文化についてもさまざまな先生を呼びシンポジウムを行いました。昔から製鉄技術を復元させようと学術文化という財団法人を作り、事業を進めています。一方、産業という面では、第三セクターで吉田ふるさと村という会社を立ち上げました。さまざま加工事業を行い、経営をしているところです。ほかに、温泉施設の管理など、産業面を担う第三セクターがあります。その後平成16年に市町村合併をしまして、行政に代わり民間主導でまちづくりを行おうとし、株式会社鉄の歴史村を設立しました。

同時に農業という面でも、エコファーマーを中心に木村有機農園という農業法人をつくり、農業を支えていこうと考えています。住民活動については、NPO法人を通じてさまざまな組織を作ってきたところです。

合併時、最大の問題は、商業、農業の衰退ということでした。田舎で、商店街は行政あつてのものという面がありますので、地域を見渡しても消費人口がなかなかないという状況です。個性を活かして、外から消費者を取り込み、商業を支えていこうとしました。そこで、鉄の歴史村の設立は、交流

型商業を作ろうとした経緯がありました。

こうした背景には、先人たちが何十年にも渡ってまちづくりの基礎を作ってきたことがあります。この先人たちが基礎を作ったもの、個性や特性を今活かしているかということ、まだまだ問題点があります。

やはり、そこにはコーディネートをし、プロデュースそしてうまく宣伝する能力がある人材が必要だと考えています。具体的には、交流を促進するツーリズムを担う人材を求めています。プロモーションをする人、ボランティアガイドさんたちをコーディネートする人、またものづくりからは、今ある製品をブラッシュアップして売れる商品にできる人、それを営業して販売していく人、そういった人材を育成していきたいと考え、この事業を行いました。

(黍嶋)

前半と同様に、各組織の視点から人材育成についての現実的な課題は何かということを発表していただきたいと思います。それでは、丹波市からお願いします。

(丹波市・篠山市吉武)

兵庫県丹波市市役所の恐竜を活かしたまちづくり課の吉武と申します。宜しくお願いします。

行政には他にもまちづくり課はありますが、恐竜を活かしたまちづくり課は、恐竜に特化したまちづくりをしています。恐竜が発掘された翌年から、この課が発足しました。現在3年目ですが、漠然としたまちづくりの事業を進行しています。

まちづくりの計画は、参加されている観光協会や教育界など個々で取り組んでいます。それぞれの団体がリーダーを発揮していますが、それぞれをまとめるリーダーというのは育成できていません。

現在、年一度特定の期間のみで、発掘作業は続いています。今年も冬から発掘調査が開始される予定で、それに伴い、全国から観光客も訪れる見込みで、ツーリズムなどを今後展開していきます。

そうした中で、将来を見据えた人材発掘をしていきたいと考えており、それが今後の課題です。

(黍嶋)

ありがとうございます。では、村上さん宜しくお願いします。

(丹波市・篠山市村上)

村上と申します。上久下恐竜の里づくり協議会であるとともに、恐竜の化石の発見者です。2006年に化石を発見しましたが、それ以前は会社を定年退職し、田舎にUターンしたものです。Uターンしたとき、まちづくり、特に私の集落では里づくりというものを何とかしなければならないと感じました。私が田舎にいた時は高校生で、周りのおじさんおばさんにも活気がありました。

しかし、37年たって戻ると、活気がなくなっていました。私のいるところは、360度見渡しても山間部でして、商業、産業が発展する余地がないような状況です。何かを訴えたとしたら、やはり自然、自然資源かなと思いました。

地域を散策しているとき、3年前に化石の肋骨の部分を発見して、国内最大級の草食恐竜、全体の約30%の化石を発掘しました。

寂れた集落の中で、将来に向けたまちの活性化をはかるというのは困難なことでしたが、化石が発掘されてから、この集落を知らなかった人も訪れるようになり、1,500人の集落に70,000人の人が訪れるようになりました。しかし、訪れた人たちをもてなす土壌がなく、ただ来て、ありがとうございます

ますというだけでは、経済的な効果も何もない。私たちは、一からまちづくりを手掛けて、3年になりました。

市から補助金などをいただきながら、こうした事業を行い、滞在時間が5分10分だったのが、30分1時間と滞在時間が増え、お金を落としていただける機会が増えたかなと感じます。少しずつ効果は出てきたかなと感じています。

こうした中で、今後の課題として、今回のテーマでもある、人材育成であると考えています。

ただ、人づくりの前に、人がいないのですよね。高齢化率も30%を超えている地域です。

しかし、運動会をすると多くの若い人がいるのです。どこから来ているか調べると、私の集落から来ていることがわかりました。子供も、若い夫婦もいる。しかし、この若い人を昼間に見ることはないです。なぜなら、この若い人たちは、お金を稼ぐため昼間は市外または県外へ出るという人口の流出が始まっています。そうすると、昼間は高齢者しかいなくなり、そうした中で、どうやって人材育成を行っていくかが課題となっています。

人材を発掘し、人が人材育成をすることと、その人が持っている能力や自らが努力して他人に期待される人材となるという、二つのケースがあると思いますが、われわれは、後者の人材育成に取り組んでいます。なぜなら、私もUターンをして田舎に戻った時は、たとえ元地元民であっても、どうしても地元の方とは折り合いが付きませんでした。

しかし、恐竜の化石を発掘したときには、地元の方に応援していただきまして、地域の中に溶け込んで地元の方と交流しながら、できるだけ地域の方々の役に立ちたいと思ひまして、期待される人材になろうと努力しているからです。

(細野)

化石を発見されたきっかけは、そうした専門家だったから、発掘をしたということですか。

(丹波市・篠山市村上)

いいえ、違います。私は、37年間ただのサラリーマンをしていまして、知識も興味も全くありませんでした。ただ、自然環境の中でまちづくりにいいものを発見しようとしていたときに、たまたま私の集落が、1億4千年前に中国大陸とくっついていて、大陸から流れてきた土石流の堆積からできた貴重な地層であるということが分かり、ある程度期待はしましたが、まさか恐竜の化石と出会うとは思っていませんでした。

(黍嶋)

では、続いて岸本さんお願いします。

(丹波市・篠山市岸本)

地元の観光協会の事務局をしております、岸本と申します。それまでは、会社に勤めておりましたが、恐竜の化石が発掘されてからは、私の人生が変わってしまい、現在に至っています。

昔は丹波篠山を田舎の代名詞として表現されるほどで、そのような何もない地域の中で、恐竜の化石が発見されました。恐竜化石というものは地味ですし、不確かなものばかりですので、まず丹波市の住民に知らせることが一番重要だと思ひました。

1月に発見の発表がされて、3月に種を撒く時期でしたので、わくわく体験でこれを何とかしようというメンバーが、お金をかけず、自分たちで何かできないかということから始めました。小さい子供

たちにも意識してもらおうと、マスコットなどを作りました。

この観光協会は、まず目で見えるものからそれを感じていただくという取り組みをしたいと、市から補助金などを取り入れて、始めました。それから、バラバラであった観光資源を一つに集めようとしています。丹波と篠山との間で化石が出てきましたので、一緒に活動していこうとし、これからは、篠山を回って、丹波を回ろうと考えています。

そして、丹波市をとにかく知っていただくことが大切という中で、さまざまな手を使いながら、食欲に活動していきたいと思っています。

観光協会には、女性が多いので女性の視点から、かわいいをキーワードに商品を開発していこうと思います。このマスコット、タンバリンを起爆剤として販売していきたいと考えています。それから、ツーリズムを頑張っていきたいと思っています。

(黍嶋)

ありがとうございます。次は、大路さんお願いします。

(丹波市・篠山市大路)

篠山市企画課の大路です。まずは、丹波市で恐竜の全身骨格が発見され、篠山市でも追従して哺乳類の先祖の化石が発掘されました。学術的には非常に価値のあるものでしたが、インパクトとしては小さかったです。

篠山市と丹波市との両市にかかっている、篠山市でもこれから丹波市と同程度の化石が出てくることを期待して、まちづくりをしていきたいと考えています。岸本さんも申された通り、篠山市だけ丹波市だけでなく、丹波地域という広域でまちづくりをしていきたいと考えています。

人材育成についてですが、この恐竜の化石を通じた事業とは若干異なりますが、小学校区で19区、自治会地区で261地区あります。どこをターゲットにして、人材育成を行っていくのが今後の課題となっています。261地区それぞれにリーダーいればいいと思いますが、なかなか行政としてそこまで目が届かないという現状がありまして、これからは小学校区の19区をもとにしていこうとは考えています。その中でも、その中心部と周辺部とで、生み出す資源も考え方も異なります。

これまでの発言から、恐竜の化石をそれぞれの地域資源と置き換えて、地域ごとのまちづくりに活かしていかなければと考えています。その中で、私は行政という立場でまちづくりを考えていますが、地域の方々が考えるまちづくりも非常に面白いですし、逆に行政の縦割り介入で邪魔をしている面もあるように感じます。行政が補助金を出して主導するよりも、地域のアイデアを活かして後追いつることの方が良いのではと感じています。

また、地域によっても、どんどんリーダー性を発揮しているところや、お金も人もいなくて、どうしたらいいのだろうという地域もあり、成功した地域をほかの地域にどうやって波及させていくかが今後の課題です。

(黍嶋)

ありがとうございます。両市の発言を聞いていて両市に共通する点、つまり、外の経験がある方と中の経験がある方がおられますが、村上さんは外も中も経験しておられるので、これはすごい強みとなるのではと考えることと、人の回し方、または地域の回し方において両市が交互に作用するという発想はすごいと思いました。

(丹波市・篠山市岸本)

観光協会は、外へ出ましたが、行政では外へ出られません。観光協会は行政でも民間でもないですが、観光協会同士がうまいこと繋げていけば、さまざまな商品開発ができるのではと考えました。

(黍嶋)

それでは、坂井さんお願いします。

(笠岡市坂井)

株式会社クイック福岡の坂井と申します。先ほど紹介がありましたが、私は笠岡に住んでいるわけではなく、典型的なよそ者です。よそ者ならではの、地元の人が気付かないようなことを言及していければと考えています。

クイック福岡は広告代理店として、私自身はもともとリクルートで雑誌、じゃらんですとか、Hot Pepperなどの制作関係の仕事をしていました。今は、求人広告が多いですが、新卒や中途採用といった広告を通じて企業さんの人材面でのお手伝い、コンサルティング的なことをしています。地域ごとにいろいろな雑誌を扱っています。

先ほども言いましたが、当たり前すぎて笠岡の魅力になかなか気づいてもらえない。そういったところなど、情報を収集して磨いていかに伝えるかということを考えて、お手伝いすることとなりました。

具体例では、笠岡は海があるので、魚がとてもおいしいです。魚がおいしいというのは当たり前ですが、漁師の方や島で旅館を営んでいる方に調査を行ったところ、旅館に何時にチェックインするから何時までに魚を仕入れて捌いておくということをしていました。まずこうしたことしてくれるところは都会ではないですし、魚好きのひとなら何時にしめた魚が食べられるということで十分な魅力になります。

私が調査するまで、その島では当たり前すぎて、誰も何も言わなかったのですね。外から見ると、おいしい魚が食べられるというハード面もありますし、そこまでお客様にもてなす心がある地域というソフト面もあります。こうした魅力となる材料がいっぱいあります。ヒアリングをしてそれを発信するという、これはよそ者だからできることだと思います。

(黍嶋)

それでは、福井さんお願いします。

(笠岡市福井)

昨年からは元笠岡推進協議会の事務局長しております福井と申します。この協議会では、三地域連携ということを行っていきまして、笠岡の半分が瀬戸内海の東照宮です。そして陸は狭くて、入ると丘があって、山があるという場所です。そこで、笠岡の山間部三つが連携をして、何か事業を行えば、それぞれの知らないところを補え、勉強できるということから、三地区連携を行いました。

まずは商店街活性化を行いました。商店主一人一人を紹介するというところから、村の人や島の人が自身の体験を通じて、村の紹介をする先生となるという計画をしました。

最後になり、人材とはなにかという疑問を感じました。人材とは、参加した人のことではと感じました。なぜなら、この計画を行っている時さまざまな課題や問題が発生しましたが、参加者は、笠岡の活性化のために行っているのだから、我々はそれで楽しめますよ、という風に積極的に参加してい

ただきました。メディアを通して広告し、人を集めたことよりも、我々の身近な方が事業に参加したことが一番重要ではと考えたからです。

今年はこの経験を活かして、笠岡にいろんな人たちがいますが、その人たちが本気で何をしているのかを、またはお互いに連携できる部分はあるのではないかと、笠岡で起きていることを認識しながら、自分はこのことができ、ここに協力できるという人材の底辺からの持ち上げをできるのではないかと、その中でいろいろな人たちが勉強をしていただいて地域をまとめていただいたり、地域を活かしていく方々が生まれてくるのではと考えました。

そういった背景から、元気笠岡の情報ハブとして活動しています。これは本当に核になるのではと興奮しています。ここのギャップを我々は問題点として埋めながら、地域の中で本当に参加してくれる人、情報を集めてくれる人、そういう人を掘り起こしながら、我々ではなく地域がリーダーを育てていくと信じています。

(細野)

情報ハブを作成されているということですが、いろいろな島や地域から活動の内容が出てきます。それをまとめるときに二つあると思います。ひとつは、発信する情報をどういう風に情報ハブに載せるか、それをどういう仕組み作りにするかというものです。二つは、いろいろな人がそのホームページを訪れますが、その時のエチケットが問題となると思います。そのあたりはどういう仕組み作りをしようとしていますか。

(笠岡市福井)

島と陸地をつなぐには情報が一番重要であると考えています。10年前から、守屋さんと一緒に、島をIT化しようと活動しました。そこで、各島々にはそういう講習を受けた人たちがいます。

それで今回は、去年からインターネットが繋がるようになり、NPO 法人笠岡しまづくり海社がブログ選手権を行いました。その中で、さまざま問題があると、そこで指摘指導をしながら、下地を作り地道に活動してまいりました。

またもう一つ、私は笠岡Iネットワーククラブというものを行っています。これは商店街のIT化ということで十数年活動しています。その中で、会員さんが育てて、記事を発信していこうとしています。

ITの教育を含めながら、今まで行ってきたことをここで利用しながら、まとめていこうと考えています。

(黍嶋)

ありがとうございます。大嶋さんお願いします。

(雲南市大嶋)

私の出身は、島根県飯石郡吉田村というところで、当時人口は3,000人、そこで生まれ地元の高校を卒業するまで過ごしました。それから東京の大学に行きまして、広告代理店に勤めました。その後制作の部分でディレクションをしまして、グループで会社を立ち上げました。制作に特化した部門でした。制作や人事を行って、それから田舎に帰りました。

クリエイティブな仕事ですと、50歳になると、経験はありますが、新たな発想というものはなかなか生まれてこないもので、どんどん錆びて来ます。しかし、田舎に帰ると若い人という扱いになりま

す。田舎では70歳でも若者扱いですから、この会社に声をかけていただきました。

この会社は歴史のある事業ですし、鉄というコンテンツやそれにまつわるツーリズムなどコンセプトをしっかりと持っていますので、順調にしっかりと根付いて、住民の参加意識もある程度固まってきました。

5つの地区が合併し、それぞれ独自の活動を行っていると思いますが、表に出ているのは、鉄の歴史村だけだと思います。

そういう視点を置きながら、地域づくりを考えたときに、それを担う人材を育てることが急務ではないかと考えました。どんな人材がふさわしいかと考えた時に、アイデアを取りまとめたり、それを発展させたり、私の言葉ではそうした人材はクリエイターでなければならないと思います。あるものを作ることを楽しむ心を持っている人、故郷をしっかりと見つめて、愛せる人、そういう人間が必ず必要になると考えます。

しかし、現実的には募集をかけても人は集まりません。いろいろ方法はあるとは思いますが、しっかりと活動を理解して、楽しんで仕事してくれる人が前提だと思います。

それから、行政のプレゼンテーションですが、これもしっかりとできる人材を育てなければと考えます。プランニング、ツーリズム、サービス、イベント、ものづくり、これらにより一層厚みを増していきたい。それを担うリーダーを作っていきたいと考えています。そのリーダーによって、行政に強くアピールしていきたい。そして新しい広い意味でのまちづくりをしていかなければならないと思います。今、少しずつですが、具体策を練っているところです。

目標は、鳥取県の境港市さんはなんでも鬼太郎さんで人も集まる。目玉おやじジュースといった商品といったものを追い越せるようにしたいと思います。

(黍嶋)

ありがとうございました。

(細野)

私は本日とても勉強させていただきました。日本計画行政学会という学会がありまして、そこで地方で優れた計画に対して2年に一度計画賞を差し上げています。計画賞は、学会の総会時から実施しており、13年目となります。

皆さんの計画も熟度がとても高く、教科書にかけるぐらいです。ありがとうございます。

(黍嶋)

ありがとうございます。前半後半を通して、問いかけていたのは、地域づくりで人材育成とは何かというものでした。それぞれの地域が人材について問題点、課題点を発言していただき、それから解決策に至るまでのシナリオをしっかりと認識しておられるということですが、後半でとても印象に残ったことは、地域づくりの人材をどこに置くかという、たとえば、地区であったり、集落であったり、小学校であったり、こうした視点をしっかりと認識しているということが一点目に上げられます。

二点目に、地域連携と言いつつ、自治体さんとの連携であったり、他の地域との連携であったり、といったことを発言していましたので、これは新しい視点であるなど、これは古くて新しいのかわかりませんが、多分繰り返されることだと思います。

私自身、地域づくりというのは、何かと問われてもわかりません。しかし、普通の人は、それになんとか気づいて、なんとなく玄人になっていくのかなど。先ほど生活者が参加することによって、

地域づくりが出来上がると発言された方がいましたが、そのようにとらえると地域づくりとは我々の身近なところから、素人でも私ならこんなことができるということが初めの一歩ではないかなと思います。

もう一つに、世代交代を通じて、活動を続けていくことではないかなと思います。

ぜひこの研修会で出た事例を地域に持ち帰って、皆さんの地域で実行してみてください。それを通して、人を育てるという難しさ、楽しさ、苦しさ、絶望感、達成感があるのではと思います。ぜひ頑張ってくださいと思います。

どうもありがとうございました。

(中村)

どうもありがとうございました。以上をもちまして、本日のプログラムは終了となります。

これからのまちづくり ひとづくり

中央大学大学院公共政策研究科
委員長・教授
細野助博

1

ここにある危機

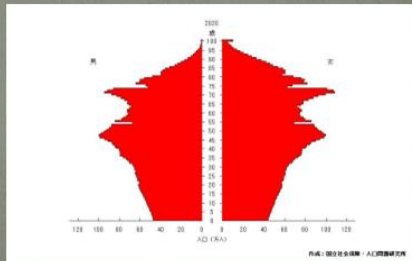
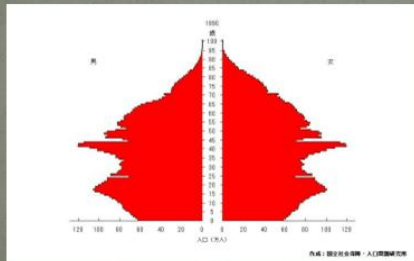
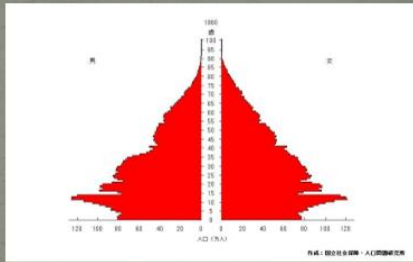
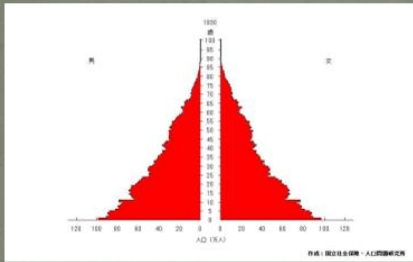
市街地の空洞化
少子高齢化と人口減少

2



3

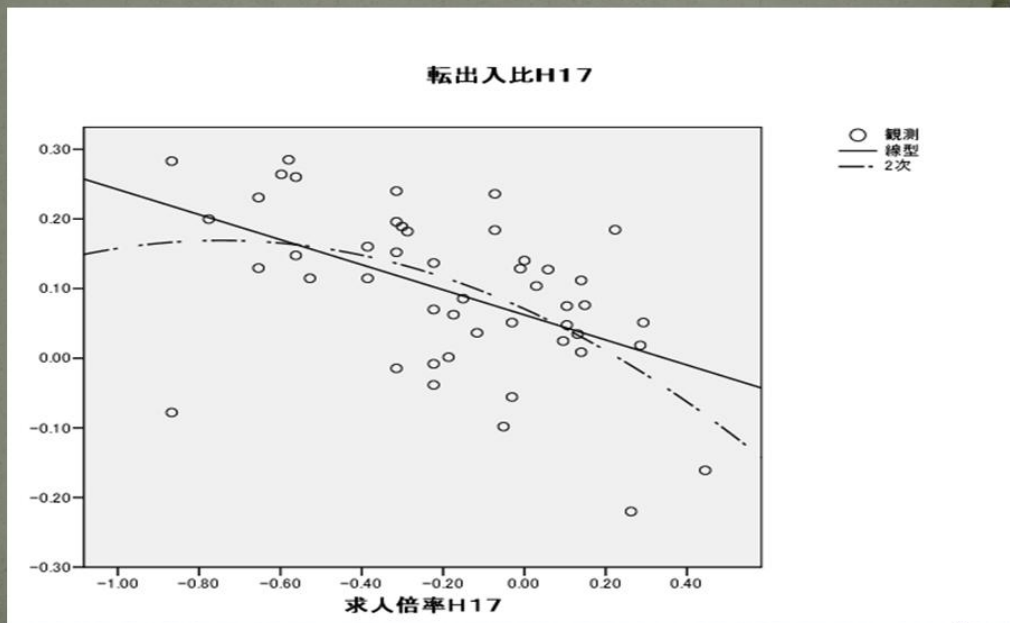
ゆがむピラミッド

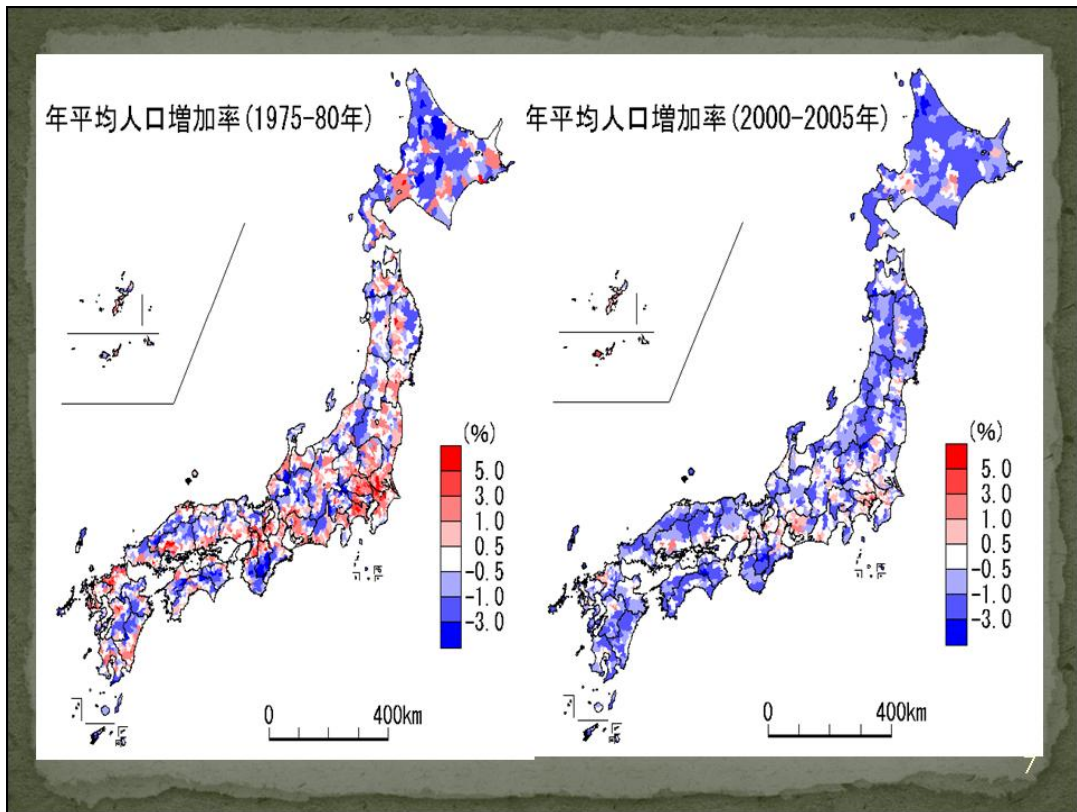


4



人口は職を求めて移動



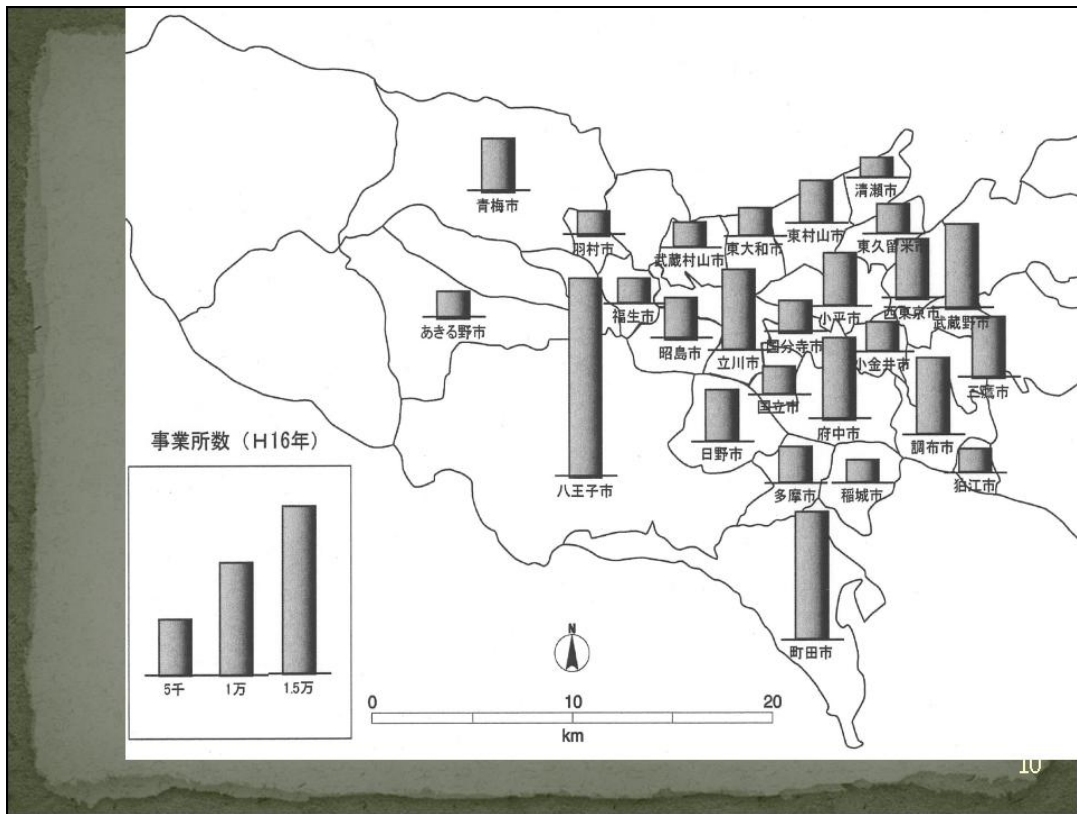


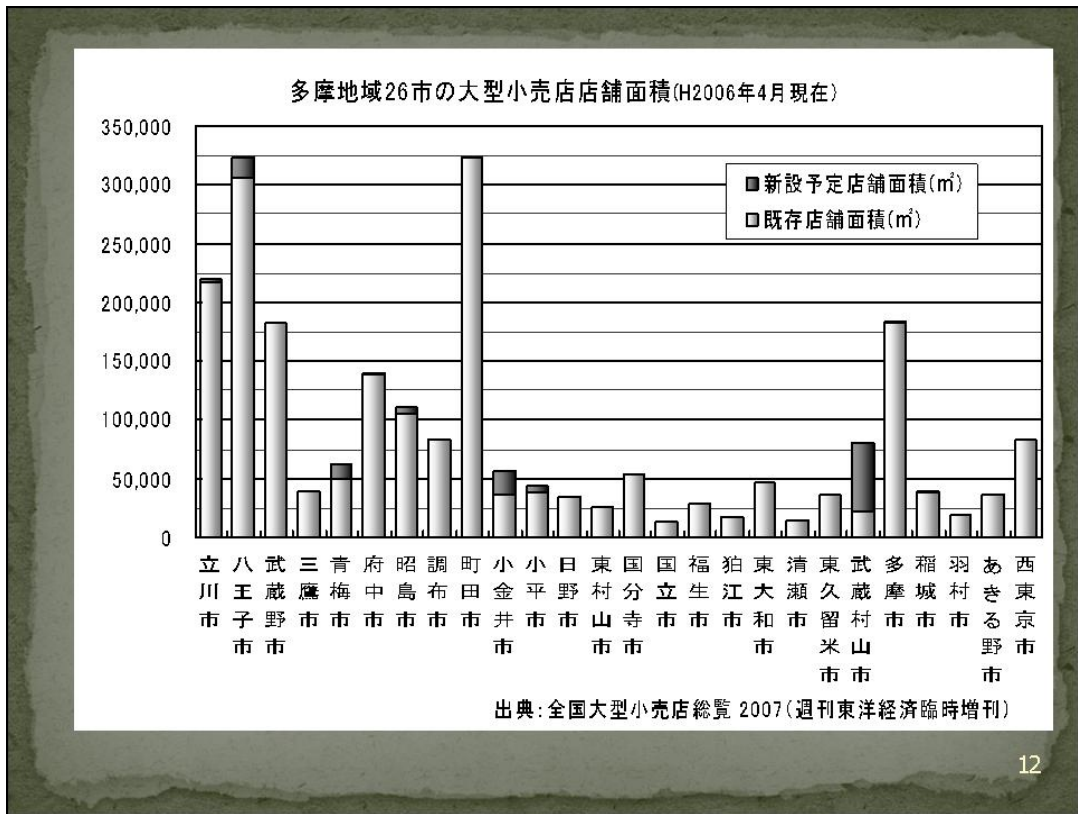
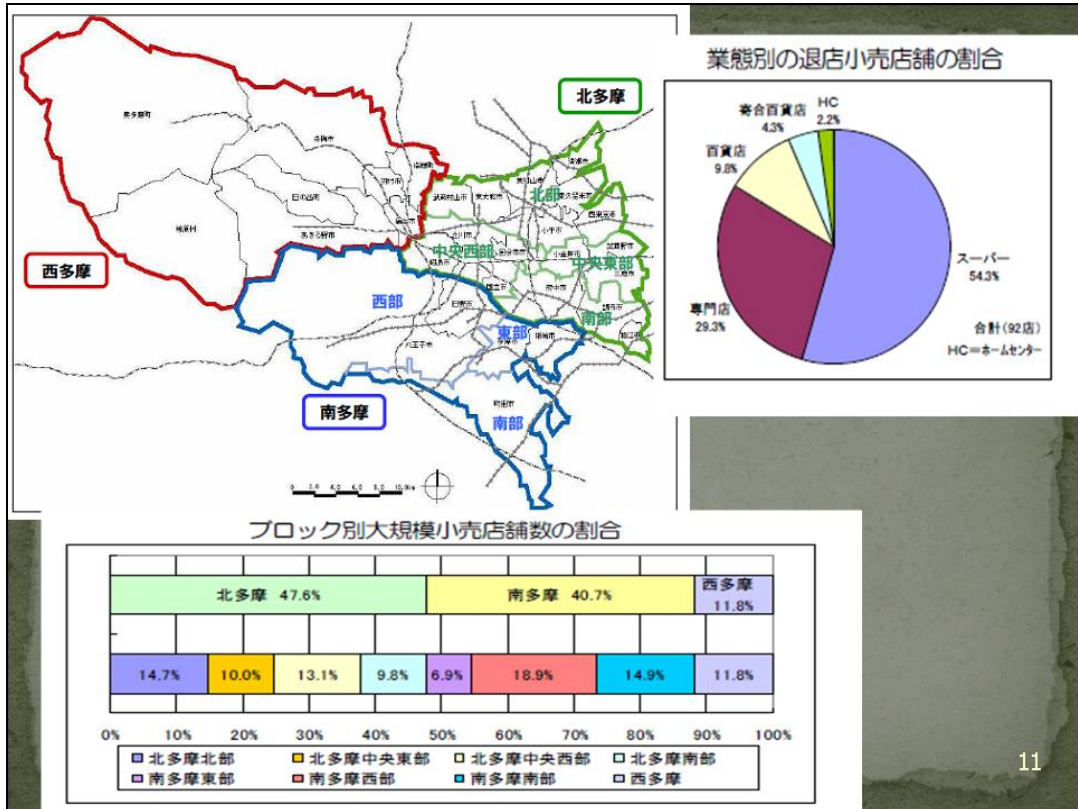
事例で見るまちづくりリーダー

回遊性高めるハード
活性化のきっかけイベント

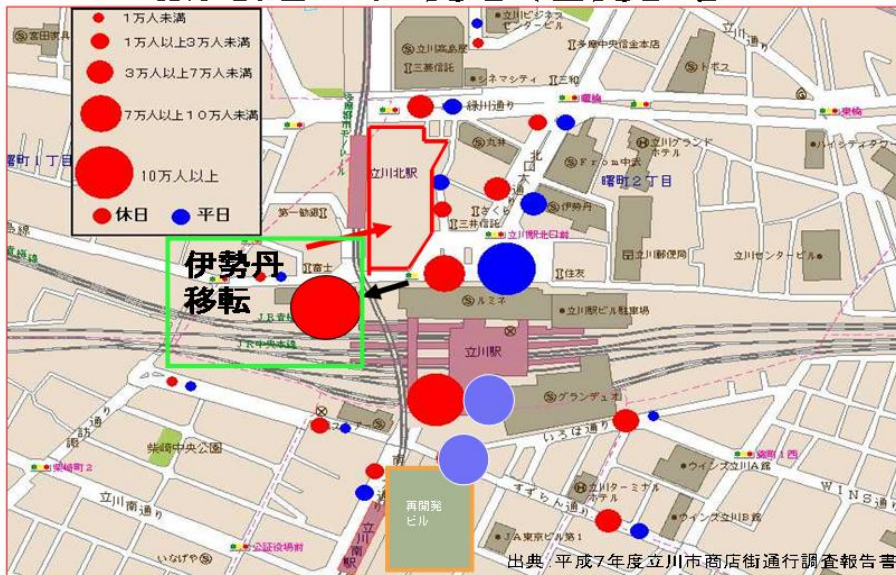
事例1:多摩のへそに

南北戦争の果て





駅周辺の歩行者通行量図

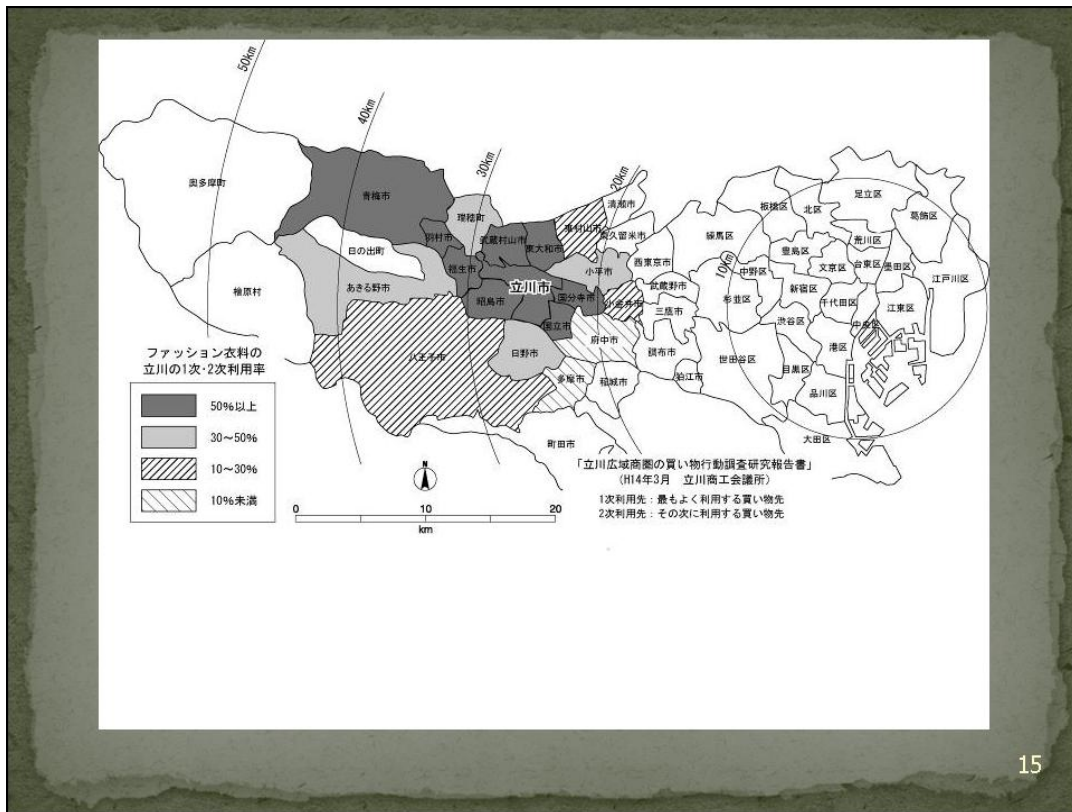


13

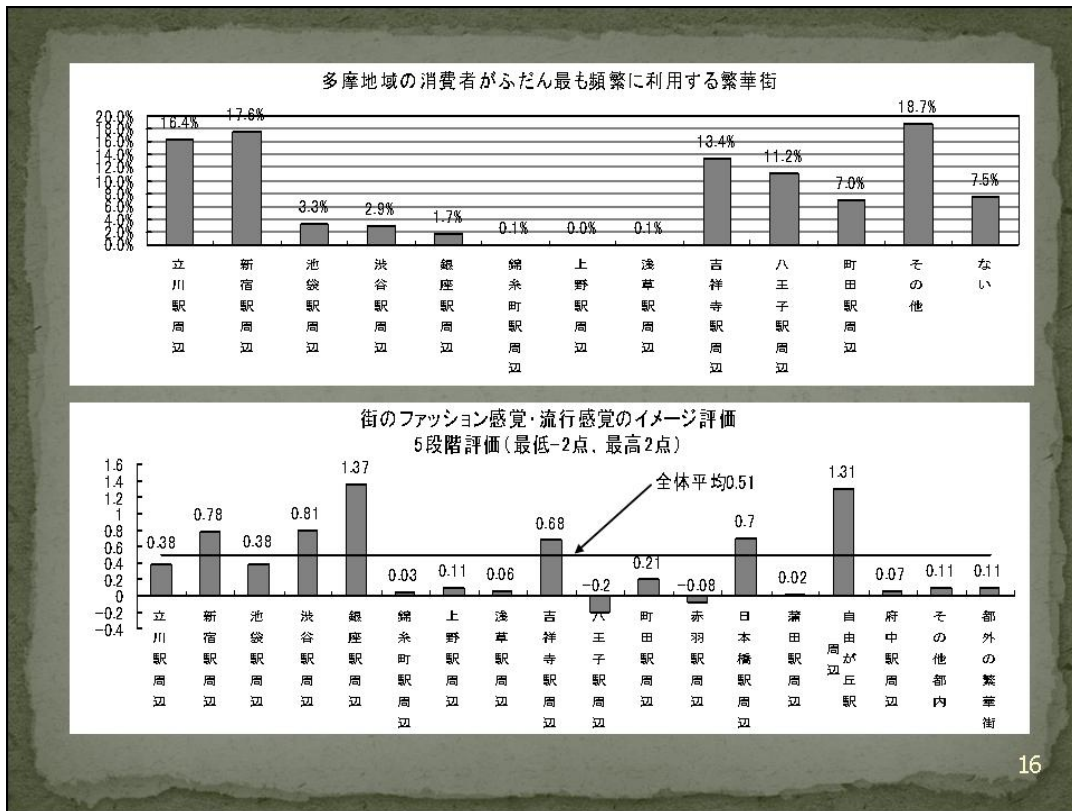
何が明暗を？車を分離



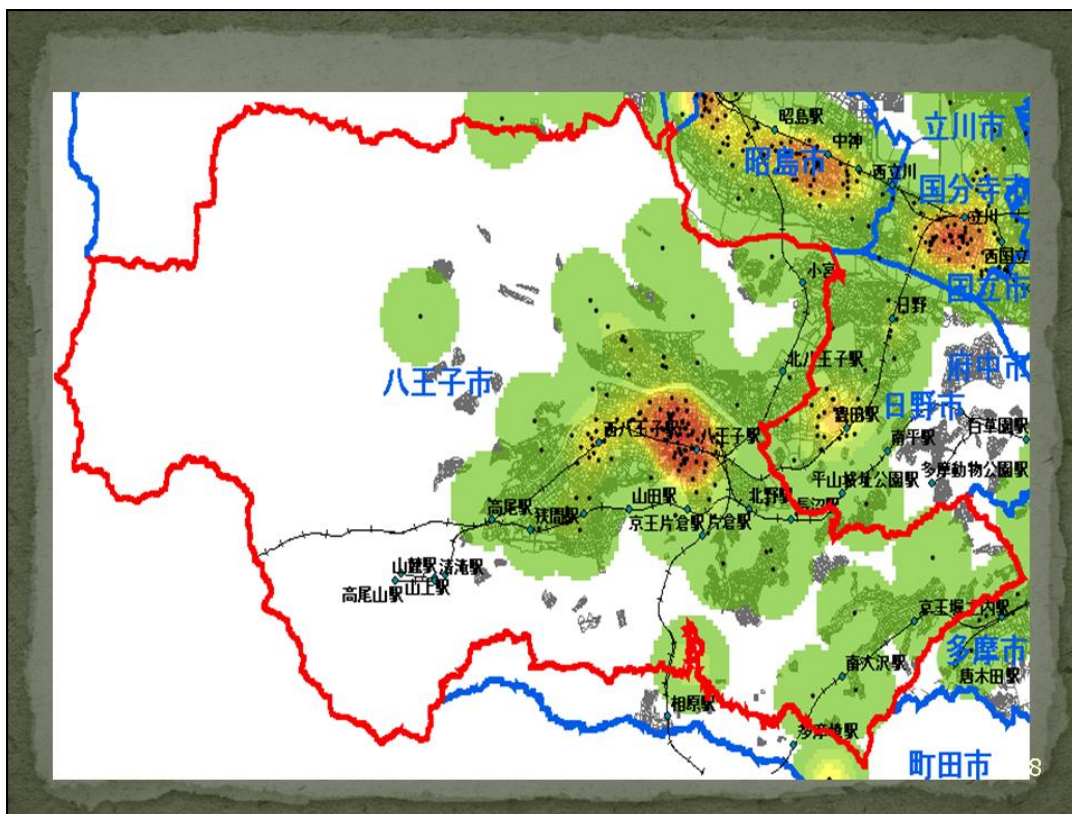
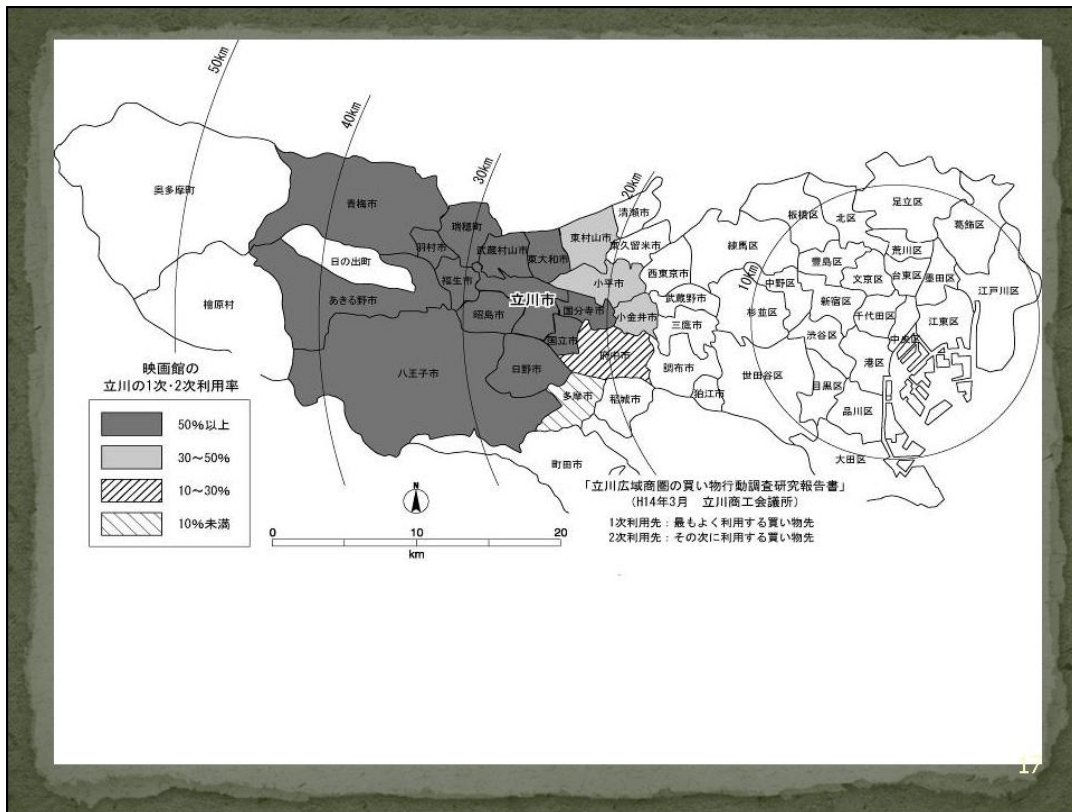
14



15



16



事例1からの教訓

- 街の実力者の合意
- 街の実力者の行政への影響力
- よそ者の馬鹿力
- 外部環境の明確な改善

事例2：武蔵小山 今昔物語



02.

やや不満
どちらでもな
い 3.6%

不満 0.1%

無回答 1.5%

大変満足 46.9%

まあ満足 46.6%

05.

知らなかった 12.2%

無回答 2.1%

良くない 0.1%

普通 6.2%

良い 27.5%

とても良い 51.8%

**西小山
ミステリー
ツアー'09**

2009
6月5日(FRI) 6月6日(SAT) 6月7日(SUN)

所要時間：約2時間

日 時：2009年6月5日(金) 12:00～17:00
6日(土) 11:00～17:00
7日(日) 11:00～17:00

参加費 無料

場 所：日東神奈川小山駅前店

受付場所：西小山駅前広場(予定)

参 加 費：無料(服装などの交通費・食費などは各自のご負担となります。)

募集人数：1,500名(定員になり次第締め切り)

募集期間：2009年5月7日(木)～6月1日(月)

◎参加者の中から抽選で素敵な賞品が当たる!

このイベントのために書き上げられたオリジナル
ミステリーとマップをもとにヒントが隠まれている
ミステリーポイントを通じて謎を解く探検系イベントです。

主催：西小山商店街賑わい再生プロジェクト研究会 共 催：東京急行電鉄株式会社
協 賛：西小山商店街振興会 日東神奈川小山駅前店 日東神奈川小山駅前店 西小山駅前広場 日東神奈川小山駅前店
協 賛：日本流通センター協会 (JCN) 伊豆 伊豆流通センター 伊豆流通センター 伊豆流通センター 伊豆流通センター
協 賛：日東区 日東区商店街振興会 日東区商店街振興会 / しんがた観光協会

ミステリーツアーに満足しましたか？

学生が参加していたことをどう思いますか？

「西小山ミステリーツアー'09」

百景区長ご挨拶

スタート時間前に行列

ミステリーツアースタート。
廣川さんが、
チェックポイントで説明をしています。

探偵が「おもてなし」

子供も参加

謎の探偵

ここにこ通身でも
お水のサービス

会館前で、
お休み 処でおもてなし。
冷たいドリンクと館のサービス。

さまざま企画でお出迎え



「ココにこ通り」では、オリジナルポスターを制作し、各店で独自のサービスを展開



「ココま通り」では、先着400名にリフトクリームをサービス！！



ミステリーナス！（三金）



「ココにこ通り」では、買い物したレシートを見せると抽選できます！

新たな自信とやる気



- ◎ 次回は自力で計画・執行・資金集め！
- ◎ 東急と中大は後ろへ



参加することの存在感



事例2からの教訓

- 電鉄会社のイニシアティブ
- 電鉄会社のネットワーク
- 街の実力者の合意
- 街の実力者の行政への影響力
- よそ者の馬鹿力
- 外部環境の明確な改善

条件A：よそ者とのコラボ

- よそ者のパワー
- よそ者の気軽さ
- よそ者のヒント
- よそ者の広報
- よそ者の「ゆるい」ネットワーク

条件B：うちものの強み

- 自分の城
- 自分の情報
- 仲間との「固い」ネットワーク

条件C： 専門家と素人のコラボ

- 専門化の深い知識
- 専門家の狭い視野
- 専門家の面子

- 素人の当たる八卦
- 素人の直観力
- 素人の常識

条件D： リーダーは作り育てる

- リーダーは発見できない
- 作るためのきっかけ作り
- リーダーは生まれる
- リーダーは育てる
- リーダーは信頼が重要
- リーダーは鈍感力が重要
- リーダーの芽を目利きできる人
- リーダーを支える人

おわりに

まちの資源の棚卸を
うちの人と外の人のコラボで。

地域再生を担う人づくり第2回研修会

議事録

■研修会開催内容

第一部

基調講演の部:『「学習」と「交流」 小国町・星野村での実践』

基調講演の部:『NPO 法人 結まーるプラス活動事例』

第二部

ワークショップの部

前半:「岩手県花巻市」、「大阪府柏原市」、「島根県雲南市」

後半:「兵庫県丹波市・篠山市」、「奈良県黒滝村」、「岡山県笠岡市」

「沖縄県やんばる3村」

■研修会日時・場所

日時 平成 21 年 12 月 15 日(火) 13:00~18:10

会場 東京都千代田区 スクワール麹町

第一部

基調講演の部:『「学習」と「交流」』

小国町・星野村での実践』

(中村)

皆さんこんにちは。定刻となりなりましたので、第二回地域再生を担う人づくり研修会を開催します。

本日の構成は、第一部基調講演の部と第二部ワークショップの部としました。第一部基調講演の部では、地方のことは地方で頑張るという動きが活発ですけれども、以前から地域活性化に取り組んでいた実践者、二人の講師をお招きして、その活動を通じた経験・知見をご紹介していただきたいと思っています。

第二部のワークショップでは、皆様と討論する場で皆様が抱えている問題点を明確にした上で、また他の参加者の活動を参考にしながら、今後の課題に対する解決などを議論していただきたいと思っています。

それでは、研修会をはじめにあたって、我々事務局が全般にわたってご助言・ご指導をいただいています細野助博先生より、ご挨拶のお言葉を頂戴したいと思います。

細野先生宜しくお願ひいたします。

(細野)

地域を担う人づくりをいった人とは、物・金の中で一番大事です。皆様も活動をしていると色々なところから圧力を受けるなどして大変だと思います。

今日は、福岡の星野村の江藤さんと、石見の桜江町からかわべさんをお迎えして、事例を紹介したいと思います。それから、7箇所の団体がいらっしゃいました。ワークショップで前半後半に分かれて、それぞれの取り組みをご紹介していただきたいと思っています。

私ぐらい老いてくると、耳学問というのが一番大事です。老人になると耳から知識を取り入れて、頭で考えることが重要です。そういう時間を今日も作りたいと思います。宜しくお願ひいたします。

(中村)

それでは、第一部基調講演の部に入ります。

一人目の講師は、福岡県星野村役場、副村長であります、江藤訓重先生です。江藤先生は、故郷である小国町にUターンののち、長年にわたって官民の立場から、故郷小国町のまちづくり尽力してまいりました。また九州ツーリズム大学の運営にも携わってまいりました。こうした実績から、2008年から実践の場を福岡県星野村に移し、ご活動されております。それでは、江藤先生宜しくお願ひいたします。

(江藤)

皆さんこんにちは。

今私は、渡り鳥のような生活をしています。私がおります、福岡県星野村は2月1日に合併をする予定ですので、次にお会いする時にはどうなるか分かりません。

私の出身は、熊本県小国町で、九州の真真中で生まれました。私の夢は、学校を作りたいということでした。田舎に帰り、農林業で資金を集めていました。しかし、資金と言うのはなかなか集まらないものでした。あるきっかけで、建物の管理運営をしないかという話が上がりました。もともと私は反対していました。

反対の理由は、進めていた観光施設だけではなくて、地元の人も参加して交流できる施設なら賛成ということだからでした。ならば、お前がやってみろということで、計画に携わりはじめました。小国町も星野村も棚田だらけです。人口は3,000人ほどです。非常に美しい村ですけども、合併するということが少し残念です。

熊本では、ツーリズムコンソーシアムを活動して、福岡県では、星野村副村長という役職で頑張っています。今から14年前に九州ツーリズム大学を開講しました。これは、ツーリズムという考え方が入ってきたばかりでした。九州で活躍できる人材育成をしていく場と、ツーリズムについて勉強しようと、たまに情報を交換しようという目的でした。

熊本県に早稲田大学の後藤さんがおられまして、これからは学生がたくさん来る方がいいよと言われて、首都圏の学生たちに集まっていたいただきました。今は、大学の先生になったり、逆に私は教えられる側になりました。

こうした活動は、提案しても、翌日には誰が中心に活動するかもめめます。結局自分がしなければならなくなって、農村の研究をしている若者を中心にカリキュラムを作り、こうした会議を九州で作ろうとしました。

はじめは、ネットワークづくりからはじまり、それから人づくりを行おうということになりました。当時は、講師の先生も居ませんでした。地域づくりについて勉強したり、その参加者を中心に勉強会を行ったり、様々な交流を図ってきました。

その上で、特にグリーンツーリズムで、農家民泊という体験を一番喜ぶのは子供たちで、教育的価値を高めるといった活動を始めました。農家民宿・レストランは地域の人には、なかなか取り組み難い、受け入れ難いという現状がありましたが、現在ではそうした活動はどこでも行っています。2005年から1,500人ぐらい子供たちが増えています。ただ受け入れるだけでなく、儲けなければいけないので、九州ツーリズム大学の運営資金から受け入れることにしました。

観光ではなく、人材育成が一番地域を豊かにすると考えています。私の家から100メートル内に、北里柴三郎という偉人がおりました。一般に偉人とよばれる方は、家族を連れて東京に移住しますが、北里は子供たちの育成に力を入れていました。そこで学んだ人たちが、地域の中で活動しているということは、外の目を持って、地域を見ることができるといい点だと思います。

こうした偉人の活動の上で、私も学習と交流によるまちづくりという活動をしてまいりました。役所の方や由布院の観光の方と、人がいて、そこに仕組みができるこうした中で、色々な人を巻き込むといった活動です。人と仕組みを作ることで、色々な人と交流もできます。これは、他の地域でも同じだと思います。

九州ツーリズム大学はこうした人材を作って、仕組みを作ろうというかたちではじめました。そこから、徐々に進化してきました。1,500人を超える大きなネットワークを構築してきました。九州でツーリズムの実践者たちの多くは、この九州ツーリズム大学の出身者です。卒業生たちが、触媒で運営を計画したり、活動をしています。

何か仕組みを作るにも人材が必要で、人材は小さな地域だけでなく、他の地域でも活躍できるよう

な人材を作ろうとしました。卒業生の多くは、様々な大学の講師となって、そこからさらにネットワークをつなぎ、農山村をどのようにすれば良いかという勉強会をしています。価値総研さんとも関わり、大学生を地域に誘い込むという、地域づくりインターンシップを行ってまいりました。

こうした活動は、ツーリズム大学から生まれてきたものです。皆、かなり観光産業に就職していき、リクルートさんやJTBさん、また地域の観光協会の事務局長さんなどを輩出しています。

九州ツーリズム大学は小さな組織でしたが、活動を継続し、様々な人材が生まれてきました。またこれをきっかけに移住をしてくる人もいます。地域の資源を見直し、そうした中で新たな交流をしながら人材を作って、新しい人材が新たな仕組みを作っていき核になっています。

私も、村長がツーリズム大学の一期生だったので、誘いを受けて現在に至ります。また地域再生業議会の会長さんや、星野村にも卒業生が多くいます。そのため、次の就職先もツーリズム大学の中にあるのではないかと考えています。私の人生は、九州ツーリズム大学のネットワークの中で動いているのです。合併する星野村で、こうしたネットワークを活用して基盤を作ろうとしています。

それから、熊本ツーリズムコンソーシアムというものがあります。これは、農家民宿でも人が来ないという大きな悩みがあります。踏まえて、皆のレベルを上げていこうと活動しています。またこれから活動していこうとする人の教育機関でも、共同体でもあります。こうした形で、九州ツーリズム大学という学びを中心とした熊本ツーリズムコンソーシアムというものができました。観光体感熊本ツーリズムは、大きく広がろうとしています。

また13年目を迎えると人も変わりますし、実践者も育ちます。それぞれの実践者が自分の仕組みを、それぞれの資源で作ってきました。蔵でカフェを運営する、また民宿を運営する事例もあります。

ツーリズム大学で学んだ知恵を活かして、実践しています。利用者は、学んだ人たち全員が利用するわけではありませんが、多くは学んだ人たちが利用しています。そこで、問題点や改善策などアドバイスをしていきます。

星野村のツーリズムでは、3つの柱で活動しています。一つは人材の育成です。地域を他人の目、視点で見ることと、ネットワークを作ろう、情報を得ようということです。

先生もお話しされた通り、農山村にこれから住む人たちが増えるという時代がくるということを農山村の人たちに知ってもらうことも重要となります。そうした時代を見据えて、今から村の人たちに何をしてもらうか、何を知ってもらうかという活動を昨年から2年間行っています。

やはり村の人たちの資質、魅力を高めることが、地域の魅力につながっていきます。外の人材を活用します。地域同士や住民同士の調整というものは、村の役人のほうが詳しいので、任せています。私は集める側ではなく、村民それぞれを活かした一芸村づくり講座を実行しています。子どもたちを受け入れる仕組みを設定しています。

星野村で直売所を作成する際も、誰がリスクを負うかという話になりましたが、最後はツーリズム大学の卒業生である、大野さんという女性が負うことになりました。

これからは農村に住む時代が来るということで、フランスではパリよりも地方で住むということが、一種のステータスとなっていて、欧州諸国やアメリカといったその他の国でも同様だと聞いています。今後日本も同様な方向になるということを知ってもらう講座も開いています。

九州では、福岡や北九州から移住が多いですが、観光の流れもこれと同じです。八女地域も昔から、豊かな地域です。他の地域と違って、八女地域は観光地ではありません。人が住むということではとてもいい地域です。二極地居住を行っている人もいます。

星野村に移住していただくために、何か特徴となるものが必要となります。美しい村を特徴としています。旅でも目的を持った旅もあると思います。フランスでも美しい村をめぐるツアーに人気があ

ると聞いています。日本でも、世界的にもこうした流れになっていると思います。美しい村の星野村を残していけば、そこに移住する人もいると思います。将来的には、観光から定住の地域にしていきたいと考えています。

星野村だけでなく、八女市全体とすこし範囲を広げて、まちづくり、観光振興で人材育成を行っていますが、人材を中心にして持続可能な事務局を作ることが課題となっています。様々な事務局が、ツーリズムを担っていますが、事務局がしっかりしていると観光もツーリズムも成功しています。九州ツーリズム大学でも、こうした核となる人材を育成しようとしています。様々な卒業生が、事務局や研究所を担っています。

ポイントとして、ツーリズムからどういう調整をしたのか、どうやって解決策を出したかについては、人材と仕組みを作り上げればよいのではないかと考えます。核となる人材を育成するために、日本中から講師陣を招いて、現場を実践としながら人材を育成してきました。またネットワークをフル活用しました。例えば、星野村でここが弱いと思ったら、ネットワークを使って交流をしながら、改善策を出してきました。

私は副村長で、村の中でも権限が大きかったので困難ではありませんでしたが、村の人たちは調整が困難でした。やはり、権限があるとないとは違ったと思います。それと、卒業生等理解者が多いということが、とても役に立ちました。以上です。

(細野)

多彩な方がおられる九州ツーリズム大学というものにとっても興味がありますが、これはどれぐらいの期間で活動されていましたか。

(江藤)

いろいろあります。13年間行ってきたこともありますし、1年間だけの計画もありました。農閑期の7ヶ月間もあります。

(細野)

開講期間はどうなっていますか。

(江藤)

学生は、夏休み等を利用します。

多くの学生が、講座の先生も含めて大学の先生となって、殆んど来れなくなっていますが、彼らの時間が有るときに講座を行っています。

(中村)

江藤先生ありがとうございました。

第一部

基調講演の部:『NPO 法人 結まーるプラス活動事例』

(中村)

続きまして、島根県江津市からお越しいただきました、NPO 法人結まーるプラス理事長、いまゐネット株式会社専務取締役のかわべまゆみ先生です。かわべ先生は、10 年前に現在の江津市桜江町に I ターンし、地域情報の発信や地域資源の活用のプロデュース、コミュニティビジネスの創出を行ってまいりました。このように、まちづくりの実践を精力的に実施してきた方です。

それではかわべ先生宜しくお願いたします。

(かわべ)

こんにちは。島根県から参りましたかわべと申します。宜しくお願いたします。

私は、もともと東京でキャリアウーマンをしていました。10 年前に島根に参りました。今私は地域活動家的な紹介を受けますが、島根で地域活動や地域おこしをしようと思う気持ちは全く無く、人口 3,500 人のまちってどんなものかなという思いで参りました。典型的な地方都市で育ち、長い間東京にいましたので、非常に過疎地には興味があり、憧れていました。

取り組みのきっかけは、島根県石見地方は、なんて素敵なまちなのだろうか。自然も、文化も、人の心も豊か。まさに極上の田舎と思いました。そう、島根と鳥取の違いも分からない都会の人に教えてあげよう。皆さん、山陰は、島根は、石見は、最高よ、という熱い呼びかけを行うことになりました。

具体的に何をしているかは、簡単にまとめると 3 つです。みんな住みませんかという定住促進活動になりました。いろいろなところに行って、勧誘やおいしいものを食べたり、農業体験や神楽を行ったりすると楽しいですよ。みんな遊びに来ませんかという活動をしたら、交流促進になりました。

そうすると、住む人も増えてきて、交流も多くなりました。そうすると、私以外の人からも、これおいしいや、これ都会には無いよという話が入ってきました。これは、もったいないということで、コミュニティビジネスにしよう地域資源をマネーに変えようという活動をしてきました。

今 NPO を活動していますが、活動は 3~4 年で、最初の 5~6 年は法人もなく、ほぼ個人で活動していました。何かがあるときに、適当な会を作って活動していました。活動を行っていた 3~4 年前に、桜江町という 3,500 人のまちと、江津市という 23,000 人のまちで合併がありました。合わせても、30,000 人にも満たない市です。

そこで、江津市の女性職員が、私のところに来て、集落の中でどんどん空家が増えているという状況を話しました。みんなで仲間を集めて、話をしようということで、行政サービスの代行を行うことも視野に入れて NPO 法人を立ち上げました。

1 つは、石見という括りをベースに、石見は最高です、という攻めのスタンスです。もう 1 つは、石見地域内で桜江という地域限定での問題をどうするか。また空家が増えて、地域のネットワークも希薄になり、地域に住む高齢者を狙った悪徳商法に対応するといった、自警ネット「チーム桜江」です。

それから、私たちは、無人駅で活動しております。これは、都会ではとにかく家賃が高いので、無人駅の空いているスペース、建物、店はもったいないと思ったからです。地域の自治体に問い合わせると、町長と JR 西日本で交渉していただいて、今私たちの事務局にして、家賃がタダとなり、7~8年になりました。という風に、田舎には使えるものがたくさんあります。

一つ一つを簡単に説明すると、一つ目に、定住促進から始めました。島根と鳥取の区別もつかなかった私自身が住んで、こんないいところはないと思いました。実際、島根県にあるふるさと島根定住財団の事業を活用して、田舎暮らしに関心のある方々を、地元の方と交流しながら、地域の雰囲気を感じてもらおう企画を行いました。もともと企画が仕事であったので、ツアーの企画やイベントの企画というものは、次々出てきました。自分がやりたいこと、自分がやって楽しいことだったからです。例えば、実際に住もうかなという人が対象なので、農業体験や単なる観光といった交流のツーリズムだけでなく、実際に住んでいる人に会って、お宅を拝見していただきます。田舎暮らしの先輩の家に行って、どんな暮らしをしているか見てもらうことが、自分が田舎暮らしを行う上で、イメージしやすいからです。

それから、地元の伝統文化、石見神楽や、江の川という素晴らしい景色の川があって、カヌーをしたり、地元のおばちゃんと田舎暮らし体験等を行います。

今回は、人づくりや人との交流がメインテーマですが、はじめからうまくは出来ていません。そこで私がとった戦略は、チラシ一枚です。チラシはタダのチラシではないです。地域の情報が詰まっています。同じフォームで、他の地域でもこうした情報は有ります。こうした情報を地域の人たちに呼びかけます。

裏面は、先ほど自警ネットというものがあると言いましたが、自警ネットを立ち上げる際、このチラシを使って地域の人々に呼びかけました。人口 30,000 人の地域ですが、特に説得もなく、自主的に 100 人以上が集まりました。現在、自警ネット「チーム桜江」ができました。これは違う事業費で行いましたが、節約するために表と裏で印刷しました。これで、紙やそのほかの費用を節約しました。

続いてのチラシは、コミュニティビジネスの開発、支援です。地域の資源をマネーに変えようということです。

様々なことをこれまで行いましたが、今は石見問屋です。地域の人というものが重要と思ったからです。石見に行って、自然も文化も色々感動しましたが、一番感動したのが人でした。石見問屋は一見すると通販サイトですが、ものを買わなくて良いです。私が何故これを行っているかということ、ここに登場する石見の素晴らしい人たちを知ってもらいたいという気持ちからサイトを運営しています。

もちろん私たちが愛するものしか売りません。例えば、これはさば寿司のおばあちゃんですけれども、さば寿司をたくさん作っています。お金を出して食べますが、その中で一番おいしいと思うものを、また都市にいたときは食のマーケットターでしたので、都会受けするものは大体分かります。これだ、と思ったら、このおばあちゃんの所に行って、さば寿司を紹介させてくださいと説得しました。

例え、他の人たちがさば寿司を売りたいと言っても、私たちが愛するものしか売らないということで、どれだけこのさば寿司をつくるおばあちゃんが好きかをサイトで延々と紹介しています。私はうそを書けないのですが、いい事はかなり良く書ける才能は有りますので、そうした方々を紹介しているというのが、このサイトの役割です。

私の名刺にも書いていますが、マーケティングはこれから重要ではないかと考えています。マーケティングというと、物を売る技術のように思われますが、あるいは広告宣伝・あるいは調査といったようなものと考えられがちですが、企業がマーケティングというものを行っている理由は、企業は売上を挙げ続けなければ、破産してしまうからです。だから、しっかりとした製品を作って、プロモー

ションやコミュニケーションを作らなければなりません。

今自治体さんも、市場にあった形で対応していかないと、自治体すら倒産するのではないかという時代になりつつあります。まさに自治体は住民のニーズですとか、自分達の地域を他の地域に売り込むのであれば、ターゲットのニーズであるとか、そうしたものを把握しなければならないと考えました。

そこで、石見をマーケティングしようと、石見の認知・促進を進めようとなりました。石見銀山が世界遺産になる前でしたので、島根全体すら知られていないわけです。知ってもらおう、知ってもらうなら良いイメージで、実態も良く知ってもらおうと、そして商品力をアップしようとなりました。そして、販売を拡大して、石見ブランドの構築、石見の発展をしようと考えました。ある社会経済学の先生が、石見は消滅するといっていました、こんな素晴らしい石見を消滅させてたまるかと思いました。私は、公務員でも市長に頼まれているわけでもないのですが、勝手にマーケティングをしているわけです。

例えば、都市の人たちがいます。一方、石見には農水産物や、工芸品、グリーンツーリズム、観光商品、定住の商品といったいろいろな商品があります。行政に任せるとこれらがバラバラに存在してしまいます。ブランドイメージというものは、商品がバラバラではないです。鎌倉や箱根、博多といった、行政区域単位ではないです。

先ず、人があります。先ほどのサイトに、半田さんというごぼうを作っている人がいます。この有機ごぼうは大変おいしいです。しかし、私のごぼうは日本一おいしいといったら、否私の方がと、たくさん出てくると思います。

確かにその味の評価はでききれません。しかし半田さんは世界に一人しかいません。半田さんの生き方は一つしかない。彼の生き方やこだわりを紹介して、彼を好きになる人が彼の商品を買ってくれば良いのです。人が先ずあり、人プラス商品プラスサービスと貴重な資源と、地域力は人間力、人間力は田舎力です。

但し、今作っているものをそのまま出すのではなく、マーケティングですのでリサーチ機能があります。時代のトレンドはどうなのか、顧客のニーズはどうなのか、現状は、市場はどうなのかといった調査をします。そしてある物をリサーチした結果と比較して、色々な商品で、味は良いけど、パッケージがダサいとか、少し容量が少ないといったニーズに対応するため、内容、ネーミング、パッケージ等について商品化計画、マーチャンダイジングを行っていきます。こうした方がいいですよとったり、大体私が行うことは、その人に負担を掛けずに、良いと思ったものは私で一旦買い取って、勝手にパッケージングして、それが実際に売れて、そこで物だけ横断します。そうすると、作った人は私のパッケージはダメだなと思って、こういう風に変えようと独自に変えます。

それで、商社機能とは大げさですけれども、こうした商品を例えば流通や外食産業なら、デパ地下が良いのではないかと、高級レストランが良いのではないかとといった、将来的には販路開拓や営業活動を行っていきたくと思っています。IT活用機能、都市住民とダイレクトな交流、サイト運営、通販機能代行ということです。これが石見問屋です。

今は、ほぼネット上で行って、もちろんリサーチや商品開発を行っています。将来的には、プロモーションやPR機能を、特に広告とかはお金がないので、プロモーションといっても殆んどが、広報やパブリッシュシートになりますが、メディアに対しては、様々な形で発信していきます。

これをもっと単純化すると、それではマーケティングとは何か。マーケティングを行っている方は、皆さんそれぞれのマーケティング観を持っていると思います。私は、現場でオーダーを頂戴して、調査をして、そこでプランニングして、プロモーション計画を立てて、こういう風なことをご提案する、といったことをします。

私が考えるマーケティングとは、目的を達成するための合理的・効率的な手法と思っています。この目的は、例えば企業であれば、キャンペーンをいくら上げるかといった、もっと大きな視点からは、新規事業を立ち上げる時にどれだけ売上を上げるかといった、そういう企業が継続していくための目的・目標があります。

目的を達成するために、リサーチが必要です。リサーチは相手ばかりを知っていてもダメです。食用商品を作っている企業が、エコカーが流行っているからエコカーを作ろうとしても無理です。だから、自分達の資源を知らなければなりません。また各エリアに分けて当てはめると、エリアごと風土が異なります。内的要因、自分達もっている宝物は何か、そしてそれを他の地域に売り込むとき、ターゲットは私たちにない魅力を感じるだろうかということのリサーチして、独自の戦略を構築して、コンセプトを設計して、ターゲットを設定して、プランニングをして、そしてそれをコミュニケーションして、プロモーションしていくことです。そこで、マネージメントして、ぐるぐる回していくことがマーケティングではないかと考えます。

マーケティングの大家と呼ばれる、フィリップス・コトラー先生がおられます。私も、この先生の本を読んで勉強しました。もともとはビジネスよりのマーケティング論でしたが、昨年、マーケティング in パブリックセクターという、公共機関もマーケティングを活用しようという趣旨の本を出版しました。あのコトラー先生が言われているので、私も自治体経営・運営する際も、活用する方がお得ですよ、と呼びかけています。

さらに言えば、読み書きソロバンという言葉がありますが、今では読み書きソロバンに加えて、IT やパソコンの活用も当たり前です。10 年前では、行政の分野でも、IT やパソコンを机において活用するということはありませんでした。当時は、専門の IT 関係の人のみの専門分野だったのが、今ではパソコンは当たり前になりました。これは、基礎自治体でも同様です。

そこで私は、読み書きソロバン、IT、パソコン、マーケティングが当たり前だと言っています。マーケティングも特別の分野ではなく、物事を解決する大切な手段であると考えています。私は、特に行政の方々には、これから専門知識だけではなく、基礎知識としてマーケティングも活用していただきたいです。

続きまして、人材育成についてです。地域の人たちの知見や能力を活かすポイントを私なりのアレンジで話します。先ほど申し上げたことは、ごく一部ですけれども、地域の方々とは色々な交流をして、事業を行って来ました。

よく人材発掘、人材発掘といわれますが、一つの例を申し上げますが、石見問屋のチラシの下に写っていらっしゃる方は、現在 88 歳です。

8 年前から、インターネットを活用して地域おこしを行う人やグループに、1,000 万円をつけましようという事業がありました。これは良いと思い、しかし浸透したとはいっても、8 年前ですから、普通に皆が使っていたわけでは有りませんでした。これからは、IT の時代が来ると感じて、特にこんな田舎こそ、パソコンやインターネットを自由に使うべきだと考えはありました。

これはブログ、当時はブログという言葉もありませんでしたが、誰でも簡単に自分のホームページを持って、しかも自由に更新できて、しかも物を売りたいときにネット通販もできるものを作りたいと思っていました。

今は、Web2.0 というツールがたくさんありますから良いのですが、当時ではオーダーメイドで作りました。オーダーメイドで作るには、300 万円かかりました。それから、IT 育成、講座を開いたり、かなりのお金がかかります。この時に 1,000 万円というのは、良い事業と思い、申請をして、あるサイトを立ち上げました。

そのとき、そのおじいさんが聞きつけて、私たちは、定住を促進するために、定住者を集めて月一で交流会を開いていました。その中で、おじいさんとお話をする、おじいさんが横笛を作っていることがわかりました。

石見神楽が盛んなところなので、そうすると、横笛を誰でも吹けるようにしなければいけない。しかし、横笛を吹く技術は大変です。そこで、その地域では、縦笛のリコーダーを使って、横にして吹けば、鳴るといふ笛があります。その笛を、このおじいさんが作っていました。

このおじいさんは、作った横笛を日本中、さらには世界中の人に使っていただくことはできるかと聞いてきました。そこで、インターネットという便利なものがありますよとお話すると、80歳ですが、やってみよう、ということではじめました。今、石見問屋の中で、この笛は一番売れています。そのおじいさんの笛は一ヶ月に数万円売れています。

しかし、売れておじいさんがリッチになったということではありません。88歳のおじいさんが、ネットビジネスを行っているということです。そうすると、私が何を言えるかということですが、60代でインターネットを行っていないのですか、70代でパソコンを使っていないのですか、あのおじいさんを見てください、パソコンとインターネットを使って毎月数十万稼いでいますよと言います。

そういう効果もあってか、私たちの地域では、比較的高齢の方でも、パソコンとかインターネットに対して敷居が低いです。地域のIT化に貢献しています。私が、パソコンが、インターネットが重要ですよといっても全く説得力がありませんが、そのおじいさんを例にすると説得力があります。

そのおじいさんは素晴らしい方で、その笛は日本全国から注文が入り、お礼の手紙がたくさん届きます。お礼には、私たちの地域では太鼓は叩けても、笛を吹ける人はいなく、今年は祭りができないと思っていたら、この笛に巡り合って、祭りを継続できたというものです。他の地域のお祭りまで、このおじいさんの笛は地域の活性化にも活躍しています。

先日は、ヨサコイの祭りの地元から自費で数十人来て、ヨサコイで笛をどのように使っているのかを披露するために、おじいさん一人に見せるために20~30人で踊っていただきました。

結果的に、このおじいさんを発掘したように思われますが、私は発掘をしていません。人探しをしたことはありません。発掘なんておこがましいです。これは、おじいさんと交流していく内に、横笛を作っているのですか、インターネットはこうですよといった交流を通じて、こうした形になりました。

次に、人材育成ですが、私が島根に行って、特に違和感を覚えたのが、行政が民間や地元の地域住民に対して、人材育成という言葉を使うことです。これは私の感性ですが、育成するということは、少なくとも育成するものに関して、プロフェッショナルでなければなりません。そうでもない人が育成という言葉を使う、もちろん他から偉い先生を呼んでくることもあります。専門的なガイドマンの育成や専門的な具体的なスキルを身につけるのであれば、育成かも知れません。しかし、地域リーダーというものは、育成するものであるのか。世の中で、私は地域リーダーと呼ばれていますが、私は島根県さんや江津市さんに育成されたわけではありません。

おそらく地域で活躍している様々な人を見ても、余り育成された人はいないのではと思います。それでは何かと一つ例を挙げますと、先ほど紹介した女性行政職員の方は、私より10歳若いのですが、かわべさんを見て女性でも自分が思ったことを言ったり行ったりして良いのだということを知りました、と言いました。

それで、行政の中で、どんどん活動していきました。今では、桜江町という小さなまちで江津市役所というところにいますが、江津市女性職員の若手の中でも一番だと思えます。省庁を相手に様々な事業を取ってきたり、色々な形で民間の企業を回って、新しい事業を一緒に起こしたりしています。

それによって、その彼女に続く若手女性職員が、これは言うて良いのだと良いサンプルとなりました。

結果、彼女は私と出会ってから変わりました。けれども、私は彼女を育成した覚えはありません。ただ私は私であって、それで彼女は私に触発されたわけです。

あと、総意ではなく、この指とまれです。これも一つの例として、先ほどの自警ネットがありました。これは江津市役所と県警の方々と行いました。活動し始めたときに、地域に色々な民生委員さんなどがいますが、地域の安全に関わるセクションがありますから、そこに一軒一軒行って、皆さんの意見を聞いて、皆さんの総意に基づいたものを作りなさいといわれました。私がそこで思ったのは、皆さんの総意と言っていたら、それぞれの利害がありますから、今までと同じもの又はそれ以下のもの、皆が納得するものしか出来ません。

実際には、私がプランニングを行いました。それで私が、やりませんかと呼びかけました。これはこの指とまれですね。これに100人以上の方が止まっていただきました。この指に止まった人は、賛成者です。賛成者が止まっていたということは、反対者がいないということです。ですから、私の場合は、総意ではなく、この指とまれです。

あと、啓蒙ではなく、成功事例です。啓蒙も例を挙げると、先ほど空家の話をしました。空家を貸してくれない、売ってくれないという人は、何を言っても貸してはくれませんし、売ってもくれません。そこで説得しても無駄です。地域が衰退して、これからはこうですよと啓蒙活動をしなくてもだめです。

とにかく成功事例を丁寧に作ることです。必ず一軒は良いと言ってくれる人はいます。そこに熱意と誠意を持って、成功事例にします。そうすると、先ほどの例に有りましたが、家はそのままにしておけば、朽ちてしまい、そのまま放置していれば、地域の巨大な産業廃棄物となるものを、良くなって、よりきれいに蘇って、そこに人が住んで、地域社会の為に働いていただいて、いい事尽くしとなります。それを横で見ると、それなら私の家も貸そうかなという雰囲気になります。私たちは、現在、空家に関しては貸したり、売ったりしていません。貸します、売りますということをやコーディネートするだけです。まさに啓蒙ではなく、成功事例です。

最後に一点だけ、熱さの熱の分だけしか、熱意は伝わりません。これは私自身の経験ですが、私は国土交通省の地域振興アドバイザーを行っていますが、鹿児島県の大口市というところが現在合併して伊佐市となりました。そこに数年前に行きました。それで、国土交通省のアドバイザーというのは、年三回ぐらい、他の先生二人と三人セットで行きます。私はそこで、地域の人たちが、自分達はこれが良いと思って作っておられたものがありました。

私はお酒が好きですが、伊佐美というプレミアム焼酎がありました。当時は、一本2,000円の焼酎が20,000円になっていました。

それから、黒豚です。特に鹿児島の黒豚には、黒豚の神様と呼ばれる人たちがいます。

こんなに素晴らしい地域資源があるから、これを活かしましょうよということで、焼酎豚というものを開発してはどうでしょうかと提案しました。パッケージはこうで、焼酎の焼と焼き豚ですごくおいしいイメージかなと思いますという提案をしました。

私は、その後、公務員の方に、交通費も何も要りませんので、これをプランニングしたいのです。これをしないと気持ち悪いですということを言いました。その公務員の方も熱血公務員で、分かりました何とかしましょうと言いました。今度は、地域の人の中で、やる気のある人を探して、何人か集めました。それで私も交通費も何も要らないということで、行ったり来たりしていましたが、他の人たちが色々な事業からかき集めて、私の交通費やギャラを出していただきました。そうすると私は、思った以上に頑張りますよと活動しました。東京で焼酎バーを経営している友達がいる、試食を作っ

て、島根に送って、私でアドバイスをして、また東京に送るといったことをしていました。焼酎が鹿児島、東京、島根を3～4周したころに、いい物が出来ました。結果、出来たものを熱血公務員はすぐに幕張メッセに出しました。そしたら、いきなりグランプリをとりました。

その回りで色々な商品を考えていた人が、それなら私も出来るかも知れないということで、地域全体が盛り上がる。大口というところも、部署を縮小しているところで、その公務員は当時、特に役職も無かったのですが、いきなりフードビジネス係という部署を作ってその係長になりました。

まさに私が熱い熱を持っていたので、彼に熱が伝わって、その彼も私の熱に打たれて、彼も熱くなり、住民の人たちもその熱に打たれたという形で、熱さの分しか、熱意は伝わらないのだと思いました。熱くないのに、熱が伝わるわけが無いということです。ということ考えた次第でございます。

ありがとうございました。

(中村)

ありがとうございました。

それでは、かわべ先生へのただいまの講演に関連してお聞きしたいことはないでしょうか。

(柏原市石垣)

空家バンクについてですが、この登録は、売買契約で、借主と売主の間の価格というのはどうなっているのでしょうか。

(かわべ)

私たちは、活動を通じて色々なシステムを編み出しましたが、一つには行政と宅建を持っている人と私たち NPO の3者は、役割分担を行っています。まず、行政は信頼性がありますから、行政が基本的には売り買いの窓口となって、出てきた物件に関しては宅建を持っている人が対応します、ということで不動産屋は無いです。宅建を持っている人と私たちが一緒に行って、この建物なら売るならいくら、買うならいくら、貸すならいくら、リフォームするならいくらということを事務的に査定します。査定した額を、売主さんや買主さん、貸主さんや借主さんに提示します。そこで両者の調整を行います。私たちはコーディネータ的な役割、宅建は専門的な役割、行政が信頼の役割、という3者で行っているという形です。

(柏原市石垣)

登録された方が、査定を受けて、私ならこの値段で登録します、またはこの値段なら登録しませんということもありうるということですか。

(かわべ)

貸します、売りますという気持ちがある人は、値段を見たから、やめますということにはなりませんね。費用としては普通に発生しますので、具体的な数字は忘れましたが、結果的に宅建と建設会社と NPO が折半という形で、NPO がアドバイス料をいただくことになります。

(柏原市石垣)

ありがとうございました。

(笠岡市守屋)

空家が少ないと、空家バンクで順番に入れていくという形になり、なかなかうまく行かない場面もあると思いますが、そこで選ぶ基準はありますか。

(かわべ)

私たちにとって、空家の貸借や売買が目的ではなく、手段であるということです。目的は、その地域に住んでいる人が、50年、100年にわたって豊かな暮らしができることです。空家に人が埋まることが目的ではないです。

例えば、ろくでもない人が一人でも入ると、田舎は人が少ないので、大変な迷惑となります。地域が良くなることが一番なので、相手様によって、ケースバイケースで対応しています。

(黒滝村上北)

空家の件ですが、売買の契約に畑やそのほかの付随物がありますか。

(かわべ)

付いているものと付いていないものがあります。

(花巻市笹間)

貸家バンクに入居した方ですけれども、その方々と地域との関係といった、コミュニケーションはどのように活かさせているのか、どのような関係となっていますか。

(かわべ)

私たちがいる桜江町というのは、大きく分けて5集落あります。この5集落でも、地域関係が濃いところと薄いところがあります。ですから物件を紹介する際も、この方は地元の方との交流を望んでいるとか、この方は余り望んでいないといったことを考慮して、A地区の物件が在ったとしても、その方がA地区風土に合わなければ、新築物件を紹介するなど、地域の風土をアドバイスします。地域集落によっては、濃厚なところもありますので、そうした地域が望みであれば、その地区の物件を紹介することになります。なので、私が紹介した物件はよい感じで継続しています。

田舎に来るとのんびり出来るなといった感じで来る方には、山の中の一軒屋を紹介し、周辺にはこここの集落があるので十分ですよと教えます。またどうしても一人で住みたい人には、都会のマンションに住まれるのが一番ですよと申し上げます。

(花巻市笹間)

やはり、一番は人間関係ですよ。ただ田舎に憧れるというだけで、家を買ってそこに住むということは、その地域に来ることですから、隣近所との関係もありますので。

(かわべ)

そうですね。私がいま石見と言うところは昔から出稼ぎが多くて、人との交流が多くて、よそ者を受け入れやすい土壌があります。自分達の風土がその定住する地域の土壌にあっているのかどうかは、その土地ごとです。

(雲南市高木)

移住をされる方は、都会からいらっしゃるときに、どうやって生活の糧を得るかが問題となりますが、そうした支援はどのようにされていますか。

(かわべ)

田舎では表に出ない求人があります。ハローワークには出していないけれども、こんな人がいるなら、雇ってみようかなというケースもあります。

私は、定住促進は、数ではなく質であるといつも言っています。だから、行政が行うと今年度何人や何パーセントという話になりますが、数ではなく、いい人が入って、これまで地元で迷惑だった負の遺産であった荒れた荘園を年間数億稼ぐプラスの荘園へと変えて、人を雇っているのですから、定住促進につながって、U・Iターンにつながっています。

数ではなく質で、いい人が来れば地域も良くなります。いい人とは地域を愛する人です。愛するとは、例えば子どもを愛せば、子どもの悪いところを直したいと、良い所は伸ばしたいと思います。翻って地域を愛せば、地域の悪いところは守って、地域の良いところは伸ばしたいと思う人のことです。まさに、攻めと守りの活動そのものになると思います。

(中村)

かわべ先生、ありがとうございました。

第二部

ワークショップの部

(中村)

第2部のワークショップの部をはじめさせていただきます。出来るだけ多くの皆様にご意見を述べていただく会として、ワークショップの部です。前半90分、メンバーを入れ替えて後半90分、後討論をしていただく形にしたいと思います。前半は、岩手県花巻市と大阪府の柏原市と島根県の雲南市の皆様が中心となって議論していただく形となっています。

前半のワークショップは、黍嶋先生にコーディネートしていただき、そしてオブザーバーとして江藤先生にも参加していただきます。それでは、ここからの進行は、黍嶋先生にお願いいたします。

(黍嶋)

皆様、どうぞ宜しくお願いいたします。

第1回の研修会で各団体から人材をつくることへの課題が出されたと思います。それで、現在どのように展開しているかということから、10月以降から最近の動きを含めて、お伺いしたいと思います。

先ず、第1周として前回の現状からどんな問題があって、解決されたのか否かをお話していただきたいと思います。浅沼さんからお願いいたします。

(花巻市浅沼)

花巻市の浅沼です。先ほど先生方々の講演を拝聴いたしまして、非常に素晴らしい活動、事例であると感心しております。いずれ活動の先進事例として、少しお邪魔をして勉強させていただきたいと考えています。

前回10月からの花巻市の活動ですが、先ず太田地区では人口が2,700人で、11集落がございます。11集落を回りまして、人づくりをテーマにした座談会を開催しました。先ず地域に入って、その方々がどういう考えを持っているのかを把握するため行いました。11集落の公民館で意見交換をしました。

それぞれの集落で問題点が出されました。この先どうするのかということテーマに劇を交えた講演会を開催したいと予定しています。講演会を踏まえた上で、年度内には太田地域の地域づくりのビジョンを策定したいと考えています。現在は、12月20日の講演会に向けて準備を進めているところです。

(黍嶋)

ありがとうございます。11集落を回って、課題点や問題点が洗い出されたということですが、どのような課題点がありましたでしょうか。

(花巻市浅沼)

私たちの地域は稲作を中心とした準農村地帯という現状があり、就労者の高齢化が進み、耕作放棄地も増加している点です。そうした問題点をどのように解決するのかという点が共通しておりました。

(黍嶋)

わかりました。柏原市の石垣さん宜しく願いいたします。

(柏原市石垣)

大阪府の柏原市の石垣です。橋本知事が提案した大阪府の知られざる光るところを全国発信しようとする大阪ミュージアム構想という施策にのりながら、柏原市のまちづくりを全国的に発信しています。モデル 6 地区があり、大阪ミュージアム構想に応募して、2 年越しで通りました。柏原市の太平寺地区のまちづくりを行っていこうという計画です。

太平寺では、ぶどう畑と、万葉集で歌った在原業平といった歴史資源があります。ブドウ畑の近くにはワイン工場があります。食と歴史を活かしたまちづくりを行っています。

事務局に、ハートビートプランという企業がありまして、そちらのご協力を得ながら、まずは地区内で、まちづくりを自発的に行いたいという、各団体の代表の方にヒアリングを行いました。

地区内に寺がありまして、奈良の大仏の見本となった大仏があります。

その大仏を研究されている歴史団体と、柏原市内に様々な歴史資源がありますのでウォーキングでガイドされているガイドさんの方々と、ぶどうを作っておられる研究会の方々と、JA さんと、地元の自治会と、ワインフードの社長さん、という 6 団体に、まちづくりにどんな問題があるかについてヒアリングを行いました。

踏まえて、まちづくり協議会の設立を前提にした、柏原太平寺まちづくり集会という集まりを 10 月 20 日に、地区内の自治会に協力していただき、作りました。まちづくりの年間スケジュールを立てて、色々ご意見をいただきながら、今は柏原太平寺まちづくり集会という形ですが、22 年度には評議会を設立して、継続的なこの地区のまちづくり、情報発信を行い、柏原市太平寺地区からまちづくりを行っていくという意識を持って、会議をしました。

どういったものを活かしたら良いのかということで、もう一度皆で地区内を歩こうということになりました。当日雨が降っていましたが、参加者が 30 人ぐらいで驚きました。地区内を、地区内の人と地区外の人とで、いいところと悪いところを歩きながら見つけていくということを行いました。

歴史団体智識の会の会長が、よそ者の私にもものを言わせてくれと発言され、非常に発展的な意識の改革がありました。そこでいいところ悪いところを洗い出しました。

洗い出した内容から、道幅を広げるのではなく、余りいじらない程度で、来訪者の方々が訪れやすい、例えば、道路標識や案内表示の中身をみんな決めていこうということになりました。そうしたハード整備をみんなで行い、それを今後活かしながら、市役所の整備課の方にたたき台を作ってください、今後この集会の中で提示し、ご意見をいただきながら、みんなで作る地域まちづくりを進めようと考えております。

歴史を語るボランティアのガイドの方々は、隣の市町村ともボランティア活動の連携をとってしまっていて、その方々は外のことも見られています。しかし、地元自治会の方々ですとか、その他参加していただいた団体は、まちづくりの事例を知らず、地区内で収まっているは分からないところもありますので、事務局に頼んで、醤油でまちづくりを行っている東かがわ市へ、視察に行きました。

その中の地域を歩いていると、道路標識を作るにも、ハード整備をするにしても、古い板に地元の方が墨を用いて手書きで「ここから古い町並みですよ」と書いているだけでした。私達はそれをみて、「金をかけずに自分達で作れば良いのだ」、「余ったお金は他に使えば良いのだ」というアイディアに気がきました。

今後、この視察などを活かしながら、継続的にどうするかと、ハード整備をどうするか、という会議を年明けに行う予定です。それから、2月に継続するにはどうすれば良いのかということも議論します。希望としては、新年度に継続的なまちづくりの団体を、まちづくり評議会を設立したいと考えています。

私は、4月から色々始めていますが、皆が支えてくれるという形になってきました。しかし、柏原市も田舎ですので、地域を急に触ることが出来ないということです。来られていない方々を代表の方々は非常に意識しています。私たちだけでは決められないと、思っておられます。しかし、そんなことは関係ないですよと、個人で参加していただければと言いましたが、なかなかその辺りが堅苦しいところがまだあります。

本日は、そのような対応をどうされて来たのか参加されている皆様にお聞きしたいと思い、参加しました。講師の方々の事例も参考になりましたので、そのような内容を皆様からご教授していただきたいと思います。

(黍嶋)

ありがとうございました。それでは、山本さんにお聞きしたいのですが、山本さんは、行政の立場ではなく、民間の立場だと思います。先ほど石垣さんからは行政側から引っ張ってまちづくりを行うということをお話されましたが、山本さんはここではどういった立場でしょうか。

(柏原市山本)

弊社は都市計画のコンサルタントの会社ですけれども、市役所さんと連携をとりつつ、地元の方に入ってきて、最初は地域の方を紹介していただき、ヒアリングも弊社で行っています。地元の方だけだと、なかなか人間関係がうまくいかないところもあるので、こちらで地域の集会を作る際も、調整をして進めています。

(黍嶋)

では、雲南市さん宜しく願いいたします。

(雲南市高木)

はい。雲南市吉田町鉄の歴史村の事務局をしています、高木と申します。

前回からの課題ですが、前回では事業の背景と取り組み方などをテーマにお話しました。20年以上前から鉄の歴史村は、村づくりを行ってきました。今後は、どのように地域で豊かに暮らし、活動をどのように転換するか、何より人が重要ということで、この事業に参加しました。

事業は二つの柱を立てていまして、一つはツーリズム事業、もう一つはものづくりの事業として、それぞれに関わっていただく人たちを何とか盛り上げていきたいと活動しています。主な事業としては、10月以前に終わった事業がありまして、9月末に、私たちは中山間地域にありますが、一番近い都市で、島根県の県庁所在地である松江市に、地域の和菓子屋さんですとか、加工製造業者ですとか、わらじですとかそういったものを持っていきまして、都市の人たちに吉田村をPR活動、物産販売のイベントの機会をいただき、参加しました。3日間行い、1,000人ぐらいの来場者が来られました。松江市も観光地として知られるようになってきて、松江市以外にも、東京からおいでになった方ですとか、そのほかの地域からの参加者が来られ、知っていただく機会がありました。

地元の人にとっては、ある程度の自信にも繋がりましたし、これからネットを活用していかなけれ

ばと考えています。

この事業を行うにあたって、一つの企業ではなく、企業が二つと、社会福祉協議会や、自営業の方に参加していただき、実行委員会として進めてきました。実行委員長には、市役所職員の定年前の方をお願いしました。退職をされた方にも地域の活動に取り組んでいただける機会づくりにもなったと思います。以上は、ものづくり事業として、ものづくり OJT の一環として紹介しました。

もう一つは、ツーリズムということで、11月にツーリズムイベントを行いました。これまで、鉄は硬いイメージで、しかもアカデミックな形で紹介してきましたが、少し軟らかい形でツーリズムを計画できないかと考えています。

鉄を運んだ船として北前船がありまして、鉄は出雲の港から全国に出荷されます。次は出荷した各地から、九谷焼や、お米や、漆器などを積んで帰ったりすることがあります。そこの文化も一緒に持って帰ったというストーリーを組み立てて、全国の北前船とゆかりのある地域とを結んで、何かツーリズムイベントが出来ないかと、ごつつおさん祭りというイベントを実施しました。これに松江から山下さんという方をアドバイザーとして入れ、実行委員会に参加していただきました。今回は、評議会に市の方も県の方も含まれています。市役所の担当の方と県の担当の方とで、実行委員に加わって、準備を行って来ました。

今回のイベントの大きな成果は、地元には料理人さんが多くおりますが、今回のイベントがきっかけとなって、一つの料理を作ろうということになったことです。

(雲南市大嶋)

大嶋と申します。ごつつおさん祭りとは、お相撲さんがごつつあんですといいますが、それと同じ意味で、出雲でもご馳走様を「ごつつおさん」と言います。

今回のミソは、北前船は出雲から北海道まで色々な都市を訪れますが、その都市の名産品・郷土料理を、例えば北海道のホタテおこわや、秋田県のきりたんぼ入り稲庭うどん、山形の芋煮、京都のさば寿司を、地元の料理人同士と一緒に手伝って、調理販売しました。5時間のイベントで、1時間半で200食が完売しました。様々な商品開発を考えていると思いますが、逆に他所のものに対してどんなものに興味を持っているかを知ること大事だと感じました。

特産品フェアとして、これはインターネットで全て取り寄せましたが、石川県の大学芋を始め 50個毎販売し、これもすぐに完売しました。地元の方の出展物も、勢いよく売れました。

何故こんなに良く売れたか考えました。それは、これまで賑わいがなかった所に、たまに賑わいがあると、行列ができ、その行列にまた参加するといったようにどんどん人が集まっていき、何か購買力が高くなるのかなと思いました。

同時開催として、先ほどのフォーラムを開催しました。お祭りとしては、非常にうまく行ったかなと考えます。

(黍嶋)

ありがとうございました。

先ほど、花巻の方から、11集落の会議を行ったということですが、そこで描いた人とはどんなものでしょうか。

かなりの人たちが徒党を組まれているということですので、何かを狙って打ち出そうということだと思います。その辺はいかがでしょうか。戸来さん宜しく願いいたします。

(花巻市戸来)

戸来と申します。私は、農協の理事もしていますが、観光を農家のお母さんと一緒に、手掛けています。先ほどセンター長が申し上げたとおり、20日に演劇を行う予定で、準備を進めています。昔は芝居を見るときに、何か食べながら芝居を見ていたと言うことがあったので、この演劇を見る観覧者に、何かを作って、皆様に食べてもらって、そしてゆったりとした気持ちで、演劇を見ながら、自分達の地域をどうするのかということ参考にするように、聞いてみたいと考えています。

(黍嶋)

PTAの方からは何かありますでしょうか。

(花巻市笹間)

笹間と申します。

今、戸来さんが申された通りですけれども、やはり、地域の子どもたちから大人まで、そしておじいさん、おばあさんの方々に全員で意識改革をしなければならないということです。地元を守り、いかに活性化しなければならないか、地域の子どもたちに地元に残ってもらうか、この土地を守って文化を継承していく、たくさんの事業を通して子どもたちを地元に残していきたいという考えが、一番の目的です。

ですので、地域再生ということと、地域の担い手作りということも同時に行っています。この辺りを強く考え、今回の芝居で、意識改革をしていこうと思います。

(花巻市安藤)

安藤と申します。今回これに携わった理由は、今後地元をどうしたら良いのかということが出発点にあります。初めに行ったことは、地区を皆様はどのように思っているのか、良いのか悪いのか、又この地区で良い所は何であるのか、地区をどのように考えているのか、ということについてアンケートをとりました。

アンケート結果を元に、11集落ごとにどのようなニーズがあるかを探りました。同じ太田と言う地域でも11集落あります。まとまりのある地域があったり、通勤通学で安全を求める地域もあります。そこから、未来の太田をどうしたいのか、どうなりたいのかということを集約しながら、現状はどうであるのか、どうすれば皆のニーズにあう方法があるのかという、ビジョン作りに取り掛かったところです。3月までにまとめたと考えています。そのきっかけを作るために、次の12月20日に演劇を見ながら、行いたいと考えています。

(黍嶋)

12月の演劇というのは、どういった冠で表現されますか。

(花巻市浅沼)

チラシを作って、全国配布を行いました。演劇のタイトルが、「なんじょするおらほのちいき」で、サブタイトルが「太田地区活性化の物語」です。

講演をする講師が一人いらっしゃいますが、その方の講演の内容を劇で表現しながら、講演と演劇を混ぜた形で、皆さんに分かりやすく表現するという内容です。演劇の出演者たちは、花巻市内にある、アマチュアの劇団です。講演者は全国的に有名な志村さんという方です。

(黍嶋)

わかりました。続いて、柏原市さんです。行政が引っ張りながら、太平寺地区まちづくり集会を作って、協議会につなげていくということですが、集会と住民の方々との関係、接点というのはどうなっていますか。

(柏原市石垣)

接点は、6団体の中に自治会会長、3地区ありますが、その代表の方々です。その方々に出席していただきまして、町内の寄り合いの時に、こういうまちづくりをしていきたいという話し合いがありました。またハード整備も必要に応じて行いますので、オブザーバーとして市の方にも出向いていただき、話し合いを行いました。

(黍嶋)

先ほど石垣さんが地域に入ることが難しいと表現されましたが、具体的にはどういったことでしょうか。

(柏原市石垣)

行政側が仕掛けていますが、基本的に担い手づくりということは地元を中心に行っていきたいと考えているので、そこに行政が入ることが難しいということです。行政として、地区の道路を整備することや、ブドウ畑をどうするか、景観に配慮した整備といったハード面を整備することは可能ですが、担い手づくりや今後の地区を良くしていくことには、行政として入ることが難しいです。

(黍嶋)

まちづくりがこうであるということが、理解しにくい、定義しづらいと思います。やはり、その地域で考えることが、まちづくり、地域づくりだと思います。事例があって、それに沿っていくということではないと思います。

雲南市さんでは、ここ20年の実績があって、これから新しい活動に転換していくということだと思いますが、行政側はどういった見方、支援や関わり方を行うかご紹介していただけませんか。

(雲南市石田)

雲南市から参りました石田と申します。雲南市は旧6町村が合併し一つの市になりました。人口は44,000人と少ないですが、旧6町村のいいところを活かしながら、新しいまちづくりを進めているところです。吉田村では鉄ということで、同じ市にある加茂町では、日本最大の銅鐸が発掘したところです。加茂岩倉銅鐸遺跡があります。木次町は非常に桜がきれいな町で、市の花にもなっています。それぞれ各町村が引き継いできたものを残しながら、地域資源を活かしながら、まちづくりを行おうと取り組んでいます。

合併してから、3,000人人口が減ってしまっていて、少子高齢化、地域の担い手といった課題に何とかしなければということで、雲南市そのものをブランドとして進めていければと行政側も考えています。

ただ、雲南市では各6町村ありますが、行政におんぶに抱っこというところがありました。今の行政のマンパワーでは、全てまかなうことは出来ません。地域の住民と一緒に協働していきましょうというのが、雲南市の新たなスタイルとなっております。

そうした中で、吉田村では、鉄を活かしながら地域の住民を巻き込んで、まちを盛り上げていこうと活動されています。雲南市は、行政の立場でどうこうということではなく、一緒にまちづくりを行う仲間という関わりを持っていければと考えております。

(黍嶋)

川合さん、宜しくお願いいたします。

(雲南市川合)

島根県地域生活課の川合と申します。私は、今回、鉄の歴史村の協議会に参加しまして、事前の準備やお手伝い、当日のスタッフとして参加しています。島根県は、現在人口が720,000人を切るようで、この15年間で人口が50,000人減っています。過疎地域という部分が大半で、県という立場では、人口を一人でも多くという考えに重点を置いていました。

しかし、かわべ講師の講演を拝聴して、数ではなく質が重要だということ、そして一度には人を増やすことは出来なく、人づくりの積み重ねによって、地域が良くなっていくということを感じさせられました。やはり、物事を行政的な視点から考えていたなど反省しています。

今回、花巻さんと柏原さんのお話を聞いて、両地域の意見と同感で、次世代を担う子どもに、地域を愛するという気持ちを育てていくことが大切だと思いました。皆様が地域づくりで中心となっておられるのは、40代～60代が中心と思いますが、どうやって子どもたちに地域を愛する気持ちを育てるかということに関心があるところです。

(黍嶋)

ありがとうございました。伊藤さん、お願いします。

(花巻市伊藤)

花巻農協でグリーンツーリズムを担当しております、伊藤と申します。農協を離れても、この太田をどうしようかということを考えて、参加させていただきました。

現在太田は、市からの助成もあって、先ずお金をどうするかということから始まりましたが、アンケートをとったり、部門ごとに分かれて、多くの太田の地区民が話し合う場が出来ました。それを一つにまとめようとする段階ですので、今まで知らなかった人も出てきていると思いますが、それをいかに表に出すかということだと思います。

私も仕事柄、グリーンツーリズムを行ってまして、都市と農村の交流ということで、修学旅行生を受け入れて、農家の方々に民泊を行うという仕事をしています。その中で、都会の修学旅行生が訪れて、太田地区での農作業をしている場面がちらほらと見られます。そこで農家側でも、今年は来ているかなという気持ちになってきています。

自分たちの住んでいる地域の方々も頑張らなければ、他の子どもたちに任せるのではなく、自分たちの住んでいる子どもたちから元気にさせなければという意識に変わってきているということを感じています。都市と農村の交流を通して、子どもたちから大人へ、自分たち太田だけを考えるのではなく、見せる又は見られているということを話しながら、グリーンツーリズムを進めていきたいと考えています。

(黍嶋)

ありがとうございました。

花巻市の場合では地元の子どもから大人まで意識を変えていくことが、目標を作っていく第一歩で、それが学校であり農協であり行政であり地区の自治会であり、一つにまとめることが、10月以降の活動内容であると思います。それから演劇、イベントを通してそうした場を作っていくということだと思います。

それから柏原市の場合では、地区の人たちの気づきを上手く引き出すために、行政が指導しながら、外部から人を取り入れて、活動していくということだと思います。その時に、課題を出していると思いますが、そこはこれからの活動であるのかなと思います。

最後に、雲南市さんの場合は、具体的に、グリーンツーリズムを行う、物を作っていくといった一通りのイメージが出されていますので、それをいかに地域に落とししていくかが、課題であると思います。それからもう一つは、先ほど合併されたという話から、雲南市の地域ブランドと言ったときに、実はまだ表に出てきていないものがあるのではないかと感じます。合併した中での、吉田村と他の地域とのせめぎ間があるのかなと感じております。

そのことを含めて、江藤さんから何かご意見はありますでしょうか。

(江藤)

花巻市さんが演劇を行うということですが、やはりなかなか言葉だけでは伝えきれないところがあると思いますので、演劇を行うという形で表現することは重要だと思います。私も90年代では、皆が関心を持つものは何かと考えたことがあります。

飯豊町が土地利用計画を自分たちで作るという話が立ち上がった時、話を聞きに行きました。地元の人たちは、自分たちの土地がどのように使われるかということに関心があって、他所様の土地に夢を描こうと色々行いました。その中で、各地域の人たちが、芝居を行えばよい、模型を作ればよい、と言って盛り上がりました。

そのとき、いつの地域であるのかということが大きな問題となり、20年後の話にすることになりました。5年後であれば、どの年代でも話し合えることが可能と思いますが、20年後であれば、60、70代ではもう現役を退いておられるかも知れないので、20代～30代を中心に話し合いを進めました。2010年の村のあり方がどうなっているかについて、皆で芝居や模型作りを行いました。

ですから、演劇を行う場合も、将来を考えると、違う世代も入ってくるのではないかと考えます。また、そのときの芝居が将来から見てどうであったかという検証を行わなければならないので、責任もあります。責任感を持たせるためにも、時期を決めた方が良かったのではないかと感じます。

それから、柏原市さんですが、行政の立場もなかなか難しいと思いますが、太平寺地区のまちづくり集会では事務局は市が行っていますか。

(柏原市石垣)

現在は市と各地区が行っております。いずれどのようにしようか考えております。

(江藤)

なかなか地元では私たちは出来ないと言われ、行政の方に戻されがちです。事務局という中心的な核を作っておかないと、行政だけになると行政頼みになって、育たないうちにダメになってしまうので、バランスが大切になってくると思います。恐らくやりたいという方もおられるかと思いますが、その人を中心に行ってはどうかと思います。

また、事務局も食えるようにしなければ、なかなか続きません。もちろん工夫をしなければならぬと思いますが、今都会では若い人が余って、田舎に関心を持っていますので、その人を活用してはどうかと思います。事務局をどうするかが、これからの大きな課題であると思います。

それから雲南市の場合ですが、今の八女市や星野村でもまちづくりという取り組みはないです。

観光関連も行ってはいますが、自主的に行っているのは星野村だけで、まだまだ十分ではありません。一村だけではなく全ての地域が活動していないと、大きな地域に基準が置かれてしまうので、それでは星野村がこれまで活動してきた内容が無駄になってしまうということになりかねないです。

また子どもたちというテーマがありまして、私は、自分の地域の子供をどうやって引き戻すかということが一番考えています。合併の際、住民投票を行ったところ、合併賛成の地域はあまり担い手がない地域です。子どもが多い地域では、合併に反対して子どもを残そうとしました。

この事業は、都会の子どもではなく、自分たちの地域の子どもたちにこそ見せなければならぬと思います。私の地元でも自然体験を行ったり、農家の家に泊めるといった自然学校に来る子どもは都会の子どもではなく、地元の子どもの優先させて受け入れております。地域内で、農村漁村の子どもプロジェクトを行わなければならないということです。

やはり誰が行うかということを決めておかなければと思います。なかなか他所から来る人は、帰ってしまう場合が多いので、10年かかってようやく地元でそういったことを行える一人の青年が出てきたことで、すごく変わってくるのではと思います。他所の地域ではなく、自分たちの地域でどうするかを考えなければならないと思います。

(黍嶋)

ありがとうございました。皆様の中で、相互に質問はないでしょうか。

(花巻市笹間)

我々はこちらに来て、リーダーになって、色々な事業を立ち上げていかなければなりません。今日は、お二方の講師の事業を聞いて、大変参考になりました。その中で、狙いを主催者側に聞きたいと思います。

(細野)

皆様は今ネットワークを作ったのですから、皆さんがその地域に実際に行ってみれば良いのです。ネットワーク作りが一番重要です。皆さんここにきて、自分たちの事業を紹介しているのだから、次はこれを聞いてみようとか、自分たちの事業はここでつまづいているといった話をさせていただきたいと思います。それが狙いです。

(黍嶋)

皆さん手を上げて事業を取られてきたと思います。自分たちの地域は何を行うのか、ということは皆さんのところで考えていただくことで、この場では議論をすれば良いと思います。

それぞれを上手く繋げる、情報を交換するということもありますし、またそれをもって帰ったときに、自分の地域で何が出来るかということ悩めば良いと思います。それを避けて通ると、ただの傍観者となってしまいます。

地域づくりといったときに何かやらなければならないという義務感を持ってしまうと、大変だと思います。ここは行政、ここは団体、ここは民間、ここは住民、といったように分けて考えてしまうと、非常に

辛くなってしまいます。笹間さんもここで議論したことを自分たちの地域に持って帰って、花巻の皆さんに問いかけていただけませんか。

恐らく、こうした活動を行っておられる皆様は、役所でも、団体でも、意識が非常に高く何とかしようと考えておられると思います。皆さんが既に担い手となって、地域を作っていく、お世話役的なことを思っておられると思いますので、一つ考えていただきたいと思います。

皆さんの中で、相互にご質問はありますか。せっかくの機会ですから、こんなことに悩んでいるとか、これは違うのだなど、それがネットワークにも繋がると思います。

(花巻市笹間)

皆様の事業は素晴らしいと思いますので、個人的には他の地域の事業を見に行きたいと思っています。そこで、逆にアドバイスをいただければと思っています。

(笠岡市福井)

我々は、民間の立場から、笠岡市が行っている情報ネットワークハブというものがあります。まさしく、そういったことをやろうとしています。もし、皆様の中でそういった要望があれば、我々も少しはお力になれるのではないかと思います。ご検討ください。

(黍嶋)

皆さんせっかくこうして実際に活動しておられる方が集まっておられるので、今ご提案があった通り、どこかに行けば、そこに流しこんで、そこでネットワークをつなぐことも出来ると思います。この研修会が終れば、連絡が切れてしまうのではなく、是非それをつなぐということを考えていただければと思います。

(雲南市高木)

副産物的に出会いがあって、去年笠岡の事業報告を聞かせていただきまして、笠岡だけにとどまるのではなくて、藤村望洋先生という全国で北前船ルート蔵屋敷ネットワークを活用しているということを知って、それで私たちも一緒になって何か出来ないかと発展したような経過があります。

私たちが今回、11月22日に「ごっつおさん祭り」というイベントをさせていただいて、どんなメリットがあったかという、来年も行いたいという声が上がってきたことです。

人づくりの事業と一言で言っても、まだまだ交流が軌道に乗ったわけでもなく、なにかものづくりということで特産物が完成したわけでも、販路が開けたことでもありません。

今回のこの事業にきっかけが出来たということです。こうした事業を行わなければならないということになると、色々な人に、笠岡の人にも、県庁の人にも、市役所の人にも、来ていただくという話に繋がると思います。雲南市の中でも、近くのお店の方たちに色々出店をしていただきました。この事業があることで、初めて会う人に声を掛けることが出来ました。今後、そうした人たちと、私たちの活動しだいでもっと発展させていくことが出来ると思います。

事業の成果とは、事業が終わったときが終わりではなく、この事業がきっかけとしてたまたまお金をいただいて、たまたまこうした人たちに出会うきっかけになるのではと思います。

花巻という場所も、すごく魅力的なところという印象がありますので、是非機会があれば参りたいと思います。

(細野)

参加された方の中には、行政の方もおられますし、色々な方がおられます。これは異業種交流でもあります。折角これだけ集まっていたのだから、それを活用しない手は無いです。私も同様に、皆様から一生懸命学ぼうとしています。毎回、ものすごいアイデアをいただいています。鈍感ではダメです。貪欲になって欲しいです。

今度は自分の地域で行ってみようと、そうでなければなりません。今は人口減少時代です。魅力が無ければ、若者は流出していきます。こうした時代に、どうやって魅力のあるまちにして、自分たちのまちを保全していくのか。

先ほどの質問はとても良かったです。根本的な質問を出していただき、ありがとうございます。

(黍嶋)

江藤さんから、何か一言ありますでしょうか。

(江藤)

これで終わってしまったのは勿体ないので、何か交流をすることも良い事だと思います。ネットワークも車検を掛けていないと壊れてしまいますので、いつも補修をしたりすることが重要ではないかと思っています。

(黍嶋)

他の方で何かありますでしょうか。伊藤さん、いかがでしょうか。

(花巻市伊藤)

今回参加して、私はずっと地元に住みましたので、地元の人たちでどうにかしようかと考えていましたが、やはり外から来られたコーディネーターの方ですとか、太田でも今回公演者を外からコーディネーターと呼んでおりますが、やはり外からの風は重要だなと思いました。

(黍嶋)

私は山の中に住んでいます。外と中を見れるということはある意味ラッキーだなと思っています。見れるだけでなく、繋げることが出来て、なおかつ自分の足は地元にあるということが出来ればと前から考えていました。しかし、地域づくりにはゴールがないと思っていますので、自分が倒れるまで行うしかないかと考えています。

また江藤さんも仰った通り、2代目3代目に続くか、私は分かりません。分からないのであれば、自分がやってみて、わからないことは、次に引き継ぐという形で良いと思ったときに楽になりまして、山の中でも楽しく出来るような仕掛けを行おうという気持ちになりました。

ワークショップの前半では、この事業の根本である、皆さんが考えておられた、この地域を担う人づくりの事業の狙いは何であるかということ、これはまさに皆様自身のことですので、皆さんそれぞれの立場があって、その立場を私は分かりません。いずれにしても地元から見れば、皆様は一步はみ出た方々だと思いますが、そのはみ出たところを、自信を持っていただいて、是非議論していただいて、活動を進めていただければと考えております。

人を作っていくために自分も作られていく、育てられていくということを考えれば、肩の荷が少し下りると思います。頑張れという言い方は失礼だと思いますが、頑張っていたきたいと思います。

出来れば、ネットでも繋がるような環境を作り、私たちも仲間に入れてくださいということをお願いして、前半のワークショップを終らせていただきます。

(江藤)

帰られたら、子どもさんか奥さんか、おじいさんかおばあさんにこのことを話していただければと思います。そこからネットワークが繋がるかもしれません。

(黍嶋)

長時間どうもありがとうございました。これで前半のワークショップを終らせていただきます。ありがとうございました。

(中村)

どうもありがとうございました。

(細野)

後半のワークショップです。この事業は、ただ漫然と集まっているのではなくて、それぞれに問題意識を持って、この際これを活用していこうという姿勢が、皆さんに問われるのだと思います。

ワークショップの後半は、兵庫県丹波市・篠山市と、奈良県黒滝村と、岡山県笠岡市と、沖縄県やんばる3村と、4つの地域で議論していただきます。先ほど熟度という話をしましたが、笠岡市と国頭村は、2年目ですので、かなり成果もあろうかと思しますので、その辺りの話をさせていただくと共に、丹波市・篠山市と黒滝村は1年目ですので、1年先輩から色々なことを聞いて欲しいです。

皆さんには、是非思い切って出過ぎる杭になって欲しいです。そのためにこの事業があります。そして一生懸命皆様のノウハウを公開しあいましょうと、これがこのプロジェクトの大目的です。それでは、笠岡市の福井さんから、お願いいたします。

(笠岡市福井)

先ず、我々今回の活動内容は、基本的には各セクションの連携を作り出し、有効利用していこうというアイデアの下で、情報ネットワークハブというものを考えて事業を進めました。当面のシステムは、システムの専門家の助力を得て、ドナーとパワーポイントのデータ、インデックスとを連動させて、簡単に公開できるシステムを我々が使わせていただけることが出来るようになりました。その事業を進めております。

かわべさんにお聞きしたいことがあります。活動を行っていると、事業が二つに分かれてしまいました。一つは、人材育成という観点から、情報を発信するためのコンテンツを作る側の人材は、比較的希望者がおります。一方、コンテンツを利用する側の人間が、まだコンテンツが出来上がっていないということもありますが、どういう風に使っていただいて良いのか分からない、という問題が浮き彫りになってきました。

そこで我々が考えたことは、コンテンツを利用する側の人間と作成する人間をコーディネートする人材がいるのではないかということです。この問題が難航しております。そこで今回お聞きしたいことは、トータルでコーディネートするそういった人たちを、私たちは人と人とのつながりで活動して行こうと考えておりますが、トータルに運営していくコツですとか、それが分からない状態では人材も育たないのではないかという、この事業の肝となる部分が欠落しております。

それで、かわべさんがこれまで活動してきた中で、情熱を持ってコーディネートしていく役目というものをどのように考えておられるか、何かご経験からお話していただければと思います。

(かわべ)

人材の発掘や人材育成を否定する立場ではなく、私自身の方針としては発掘をしよう、育成しようというものではなくて、結果こうなりましたということでございます。皆さん、誤解の無いようお願いいたします。

今のご質問ですが、先ずコンテンツを作る人はいるということ、又は出来つつあるということだと思います。要するにそれを見る人が、利用する人が、いないし、それをどうすれば良いか、そのためには作るだけではなく、利用する側にどのように呼びかけるかという全てをコーディネートできる人がいるのではないかというご質問の趣旨だと思います。逆に質問させていただきますが、利用する側のイメージはどうなっていますか。地域の方々であるのか、地域外であるのかということです。

(笠岡市福井)

はい。地域の中で、我々が出そうとしている情報は、例えば笠岡の行事があるとします、それを調べても検索に引っ掛からないということがあります。

(かわべ)

ローカルな内容ということですね。

(笠岡市福井)

そうです。ローカルな情報を出すことによって、地域の中で、他のまちづくりを行っている仲間ですとか、そうした人たちが結びついて、その情報を活かしていけるようなものを作っていけないかと考えております。

実際に、こうした団体の人がいるので、団体の情報を発信する。発信するという事は、情報を学ぶものとイコールなのですよという考え方をもって、それをベースにしようとしています。実は、何か情報が欲しくても、団体からの情報が無いという壁が一つあります。

(かわべ)

先ず、利用する人が少ないということは、そのサイトのコンテンツそのものを知らないということと、知っていても魅力が無いということが在ると思います。魅力があり、それが役に立つことを知っていれば、それは自ずと広がっていくことになると思います。

インターネットをPR、認知するには、一つの媒体ではなく、様々な媒体をミックスするという事だと思います。簡単に言えば、新聞記事になるとか、テレビで紹介されるとか、特に日本人は海外で何とか賞をもらったという、逆輸入ですごい評価になりますよね。私は、国の委員をさせていただいていますが、国が評価したことで県が評価してくれ、県が評価したことで市が評価する、市が評価したことでまちが評価していただけるという、逆輸入的なパターンで来ています。

ですから、サイト、コンテンツを魅力的にすることと、パブリシティを得ていくことに力を入れていきます。初めて、私が今こんなことを行おうとどうですか、と言うと何にも起こりませんが、新聞に出るとすごいとなります。

あと、トータルにコーディネートする人材ですが、育成をするということは、育成することについてプロ級でなければなりません。トータルコーディネートする人を育成することは、トータルコーディネートできない人には、出来ないと思います。

それで、もしそうであれば、それを出来る人を呼んでくるとか。

ただ注意することは、例えば、私は東京でマーケティングプランナーをしていましたが、私のようなプランナーなんてたくさんいます。けれども、私のまちにはプランナーが一人もいません。だから私がプランをしていただけるということがあるかと思います。

けれども、何故私がこうした活動を行っているかという、好きだから行わなければならない、好きだから、お金とは関係なくやりたくなってしまうのです。

スキルがあって、地域を愛する、この2点をクリアしている人が、やはりこういうものになると思います。それを言うのであれば、笠岡にもっと田舎暮らしをする人を、定住促進をする人を、このコーディネートに合う人を呼んで、大きく発信していくことが必要だと思います。地域に無いスキルは、地域で育成できないと思います。

(細野)

コーディネートする人材って、かなり得難いかも知れませんね。藤沢が藤沢江ノ島サイトというものを持っています。そのコンテンツは、市民が作ります。コンテンツを作るために、そうした人材づくりをコーディネーターの人たちが行っています。そういうものもありますから、先ほどかわべさんが述べられた通り一段上に立ったプロがいけないので、コンテンツを作る、あるいは利用すると、そういう人たちのための人材づくりの様なスクールを自分達で立ち上げたりしますから、そうしたことも仕組みの一つとしてあるかも知れません。次は、加藤さん、お願いします。

(笠岡市加藤)

元気笠岡推進協議会の会長の加藤と申します。

我々の商店街も、年々後継者不足ということで、シャッターが閉まったお店が増えてきています。商店街を何とかしなければいけないということは、常々考えておりました。

昨年この事業実施をきっかけに、島と商部と中山間地との3地域の連携が出来ないかと探り、昨年9月に事務局、元気笠岡推進協議会というものを発足しました。7島合わせて2,500人ぐらい住んでいます。そして、3地域が連携しながら、昨年は10月から3月まで、色々な事業を商店街の中で、実施されたということで商店街の中を紹介して歩いたり、子どもたちによります、子ども商人(あきんど)選手権を行いました。雲南市さんとも言われておられましたが、また、北前船の暮らしネットワークと協賛いたしまして、防災朝市といった、様々な事業を行ってまいりました。

伯耆大山という流れを汲むお寺で、大仙院というお寺が近くにあります。このお寺では、旧暦の24日に縁日がありまして、その日にあわせておかげいちというものを商店街で開催しております。商店街の店主が七福神に扮して、パレードを行ったり、それぞれワゴンセールを行ったり、といった活動をしました。おかげいちの素となっている大仙院さんというお寺を、我々はどれだけ理解しているのか、ということをおもひまして、11月30日に店主などが集まり、ご住職から大仙院の350年の歴史と、参拝するための作法、そうしたものを約2時間勉強させていただきました。これは、地域資源を発掘する勉強会ということで、それを分かりやすくまとめました。

12月10日が今年最後のおかげいちでしたが、第2回目の北前船の防災朝市を開催させていただきました。北は山形の酒田の芋煮、南は鹿児島島の黒豚の豚汁など各地から色々な物産を持ち寄っていただきました。防災時の炊き出しということで、芋煮や豚汁を作りました。料理の鉄人にも出演されていた古塩先生にも来ていただいて、100人前だけの限定シチューを作っていただきました。

その後、知っているつもり笠岡ツアーということで、笠岡市の商店街、大仙院を通りまして、干拓地の方に乳牛を400頭ぐらい飼っています希望園というところにて搾乳の施設の見学、そしてJFEの瀬戸内海ゴルフ場でツアー参加者にパターでゴルフの練習をしていただくなどして、地域の資源を見直していきました。地域に携わっているプロの方にお話を聞かせていただいて、交流の場を持つことによって、まちづくりに参加していただけるというようなツアーをさせていただきました。

私も、かわべ先生が仰った人材育成という考えに疑問を持ちました。自分が出来ていないのに、どうやって人材育成を行うのか、先ず自分が育成されなければいけないということで、1年間経って、自分がどれだけ育成されたのかということをおもひたときに、かわべ先生はやはりその熱い思いがそのパワーを生み出しているかなと思いました。

(細野)

守屋さん、お願いします。

(笠岡市守屋)

今、事業を大体3人で行っています。頑張るというのは、辛い事を頑張るという意味があるように思います。あっという間に時間が過ぎて、楽しく活動しているというのが現状です。私の場合は、行政の仕事でこうしたことを行える喜びをすごく感じています。

(細野)

東村さん、お願いします。

(やんばる3村港川)

沖縄県東村から来ました観光推進協議会の港川と申します。

観光推進協議会というのは、グリーンツーリズム、エコツーリズム、ブルーツーリズムという3つで成り立っています。それでは、観光推進協議会で、なぜ活動しているかと申しますと、3つがバラバラになると、皆様にしっかりとしたサービスを提供できますかということで、やはり束ねる必要があるのではないかと考えました。そうして、平成17年度に、観光推進協議会ができました。

私たち会では、こだわりを2つ持っています、グリーンツーリズム、もちろんグリーンツーリズムというのは、修学旅行生を受け入れていますが、私たちの村で農泊をするときには、農業体験とセットにしています。農家に宿泊するけれども、カヤックや海釣りを体験したいといったことはお断りしています。なぜなら、私たちの基幹産業は、農業です。本職をおろそかにすることは出来ないということで、私たちはセットにしています。もちろん子どもたちを受け入れた場合は、副収入が入ります。

私たちの当面の目標は、5,000人という目標を掲げています。今年は、もう4,000人をクリアしています。10月17~18日には、今年最後の修学旅行が入っています。来年には、5,000人の目標を達成するでしょう。そのときは、会員全員で、会員には、グリーンが64名、ブルーが10名、エコツアーが20名ほどいますので、100名近い主体で、また自分達の報酬を決めましょうという話になるのではないかと思います。

私たちはそのような活動をしていますけれども、子ども交流プロジェクトということで、3村で子どもたちを受け入れることになりました。

私たちの地域というのは山原(ヤンバル)と表現されていますから、良い意味では自然がいっぱい、悪い意味では海川山以外余り何も無いということで、山原と称されています。

3村で協力して、子どもたちを預かりましょうということで、ワークショップや検討委員会を繰り返しながら、3村が協力体制を整え、その事業に当たろうとしています。

第1回の子ども交流プロジェクトというのは、私たち東村で受け入れましたが、先生方から非常に高評価を得ております。そこで、3村で今何ができるかということのを重要課題としてあげております。

折角だから、3村各村の特徴を活かしましょうということで、特長を活かして、例えば3泊するのであれば、東村、大宜味村、国頭村を一つ二つ回るといったプログラムも考えられるのではないかとことです。

またその反面、共通認識を持ちましょうということです。何かと申しますと、やはり安全管理です。私たち東村の考えと、隣村の考え方が違えば、大切な子どもたちに怪我をさせたら、何ものな

りません。ですから危機管理意識をしっかりと持ちましょう、共有しましょうということです。

もう一点は、体験をした料金です。各村で別々に行ってしまうとどうなるのかという問題があります。その辺は、3村で同じ料金で、皆さんが安心安全に、3村に来られるように考えましようとなりました。3村でしっかりと協定を結んでやっていきましようということです。

私たちやんばるの地域では、環境省でも言われています照葉樹というものがあります。将来は、国定公園に、あるいは世界遺産に、そういった目標を置いています。

私は会長も行ってありますが、直接自分の家に子どもたちの受け入れも行ってあります。

その体験をしながら、一つ感じることはありますが、土というのは、人を非常に素直にさせる力があると思います。私は一度に5人の子どもを受け入れました。5人のうち一人だけ、仲間外れという状況でした。しかし体験中、いつも外れた子どもが笑いました。4人の子どもたちは、同じクラスになって半年になるけれども、こいつが笑ったのは初めて見たと言いました。土には人の心を開く力があるのではないかと思いました。

それから、もう一つは、山彦がありますよね。山から大きな声を出せば、当然返ってきますが、子どもたちは感動していました。

ですから、私は観光推進協議会の会長としても活動しておりますが、直接子どもたちを受け入れる体験をしながら、私自身色々勉強を積んでいるということです。

3村でこの事業を行う際に、ワークショップを行いました。おじいさんおばあさんから色々話がありました。とりあえず悩むよりも舟を漕ぎましよう、そしたら私たちも出来るだけバックアップしますので、ということで、今3村が協力体制を整えて、事業を進めているところです。

かわべ先生にご質問ですけれども、3つのツーリズムを束ねる事務局というものがありますが、かわべ先生が社員にしたい人材とは、どういう人材ですか。

(かわべ)

どういう会社かで違うと思いますが、私が活動している地域のNPOでしたら、現実問題として給料が安いわけですね。給料が安いけれども、地域を愛してくれて、あと根性がある、愛と根性がある人です。愛と心ですね。

(やんばる3村比嘉)

実は、私の協会の役員が無報酬という問題があります。私も事務局を行っていますが、当然安いです。私の村だけではなくて、3村を束ねていくという中で、大宜味村、国頭村、事務局がありますが、本来ならもう一人事務局がいるべき状態です。3村を束ねるわけですから。人材という形になると、どうして探してくるのだろうかという話になりました。他の地域から連れてくるのか、それとも3村の地元で、地元を愛してくれて給料が安くても働こうとする人たちを探すのかという、狭間に現在おります。今日は、色々な情報を得て、勉強をしたいと思って参加しました。

(かわべ)

給料が安いということは、本当は良くない事だと思います。私たちのNPOも無報酬ですけれども、結局NPOとは何かと考えたとき、公の部分と民間の部分の狭間で、より公に近いところを民間のように自立して活動しなければならないと、非常に厳しい立場にあると思いますが、これから必ず変わ

っていくと思います。

ヤンバルクイナという名称は、私みたいに動植物に詳しくない人でも、誰でも知っていると思います。だから、今のお話を聞いて、やんばる 3 村というのは、分かりやすいと思いました。東村のホームページや、東村がどこにあるのか、やんばるの認知度を調べていましたが、やんばる 3 村は、ネット上であまり認識されていないので、やんばる 3 村というのをもっと表に出して、各村一つ一つをブランドとして有名にするよりも、3 つ一緒に行って、やんばる 3 村というところで、3 は無くても良いかも知れませんが、そのような形で、ブランド戦略を組み立てていった方が効率的だと思います。

各村の状況は分かりませんが、それぞれに協議会があったり、それぞれに事務局があるのは、少し効率がよくないのではと感じました。

(やんばる 3 村比嘉)

本来なら 3 村があって、まとめ役のコーディネーターが必要なはずなのですが、現状では、そこまでいっていないので、東村というところで、就学旅行生を年間 350 校ぐらい受け入れております。農泊だけでも 50 校ぐらい入ってきます。それが今右肩上がりです。これが東村の柱となっております。ということで、ノウハウがここに蓄積されているということもあって、大宜味村と国頭村という形でお互い連携をとりたいです。

(やんばる 3 村港川)

私は人材というのは、もちろん地域の雇用を考えて、地域で生まれた子を交流して、子どもも考えています。やはり外からの目ということも大切だと思います。

私たち事務局の中には、大阪出身の 23 歳の若者がいます。彼の生活ぶり、日常の活動を TBS さんが 12 月 23 日に放映することになりましたので、ご覧いただければと思います。

(細野)

それだけ修学旅行生を受け入れているノウハウというのは、何ですか。

(やんばる 3 村比嘉)

東村では、エコツーリズム協会というものがあまして、今年 10 年目を迎えました。実は、10 年前というのは、エコツーリズム協会が走りとなって、現在の観光推進協議会まで立ち上がりました。

東村にはマングローブという国に指定されたところがあります。その場所を中心として、地域おこしを行おうとしました。その地域おこしが、たまたま環境問題が取り上げられていた時代でしたので、口伝で広がっていきました。1 年目は 1 校、2 年目は 3~4 校、3 年目には何十校となっていました。おそらく、それが引き金になっていると思います。ただ、そこで自分達が行ったことは、先ず地域のガイドを育てなければならないということで、1 年目は自分達の仲間で喧々諤々と勉強しました。全くの素人でしたので、植物も分からなければ、動物も分からない状態でした。地元でありながら全く分からない状態でしたけれども、それでも十数名という仲間が集まって、地域おこしを行ってこうという話になって、お互いでガイドをしつつ、自分達の集落は 6 つありますので、6 つの集落の歴史とか植物などをグループに分かれて調べ上げました。そして勉強会を行いました。勉強会を行ううちに、今度はガイドをしてみようということで、この地域は私がガイドするので、他の人たちはお客さんになってくださいと、そのやり取りを行いながら、モニターツアーも行いながら、力を付けてきたという状況です。

その上で、先ほどの環境問題が取り上げられた中でのエコという言葉が引っ掛かって、どんどん入るようになりました。

ただ本当に、偶然だったと思います。PRしたわけでもなくて、たまたま耳に入って、どんどん口伝えに伝わって、ここはいいよという形になって、それが5年間過ぎたころには、インターネットが既にありましたので、インターネットで配信すれば、学生が入ってくるという状況でした。

そうした状況の中で、ノウハウというのもおかしな話で、それを蓄積するだけですので、後は安全管理や、そう言ったものをしっかり運営した中で、東村に来ると安全だという気持ちがそこに芽生えます。修学旅行というものは、一度来るとなかなか変えないため、変えたら終わりです。一度来た学校は、何度でも来るリピーターになりますので、そこで何かが無い限りは、動くはずは無いです。

他所に負けない魅力が充実していることがあるので、現在でも350校といった右肩上がりが増えていくという状況です。

(やんばる3村港川)

私たちの合言葉には、真心で接しようという言葉あります。それから、ありのままの暮らしを紹介しよう。飾らない、私たちの本来暮らしている状況を子どもたちに体験させてあげようと、暮らしをそのまま紹介しようという、そういう心の問題ではないかと考えます。

(細野)

旅行会社の介在はありますか。

(やんばる3村比嘉)

はい、ありました。

今港川が言ったことは、農泊の部分です。エコはエコで、全然違う部分での体験の仕方をします。

基本的には、迎え入れるという状況は一緒です。ただ、そこに何があるかという地元の間人がすべてガイドしています。9割地元の20代の青年がガイドを務めています。先ほど雇用の話をしましたが、実は若者は東村では残っています。

ガイドにあこがれて、ガイドになりたいと、勉強をします。外にでなくて、地元に残って母親・父親の面倒を見ながら、自分は、地元ですから、みんな分かりますよね。地元の言葉を使って、いろんな説明をしていく。あとは、ノウハウを先輩たちから習えば、ついてくるものなので、一番有利になっていることは、地元の人間がほとんど9割ガイドしているということです。

(細野)

それでは、森岡さん、宜しくお願いいたします。

(丹波市・篠山市森岡)

はい。この事業を始めたきっかけは、まさしく人材を育成したいという思いです。

丹波地域には、丹波市と篠山市とがありますが、両市にまたがって恐竜や哺乳類の化石がどんどん出てきております。実は、行政はそれに追われており、時間が取れないという状況です。掘ったら出てくる地域でして、今盗掘も含めて、行政が管理に追われている状況です。

丹波地域というのは、積極的にまちづくりをする兵庫県の中でも、先進地域でしたが、世界的な発見を契機にしてまちづくりに活かしたいという動きがある中で、民間主導で様々な商品が出てきまし

た。恐竜うどんや恐竜最中や恐竜ケーキといったものが出てきましたが、何せ思いつきで商品を作るだけで、先生の仰ったマーケティングなどを行っていない状況で、売れていません。地域主導でまちづくりが始まりますが、コンセプトがないので、活性化しません。行き着く先が行政批判となり、うまく行かないのは行政が協力しないからだという道筋を通っていき、でもその横では世界的な発掘がどんどん出ているということで、これはどうにかしなければという話になりました。

私が、なぜこの子どもミュージアムに関わっているかという、文化庁から文化ボランティアを束ねるコーディネーターを育成するという事業をとってまいりまして、文化庁からこのミュージアムをいただきました。人材育成のプログラムをしているときに、同じ事業があるのでご協力していただけませんかという話になったので、今、両市と兵庫県とミュージアムと、個人的に関わって人材育成を行っています。

行政が行っている協議会で、恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会というものが先日始まりまして、それは、恐竜をきっかけにしっかりとしたまちづくりの人材育成を行おうということで、背後で色々仕掛けをしています。エリアマネジメントという言葉は丹波地域では使用しております。丹波市で恐竜が発掘された途端、篠山市から肉食恐竜の歯が出てきましたので、折角なら両市で一つのことをしませんかということで、人材を育成しようということになりました。

具体的に化石をテーマに、地域を超えたアクションを誘発するような仕掛けを打っていこうと、年明けから4つの講座が始まります。それは答えを教えるのではなく、皆で考えたり、物を作ったりします。

先ほどの先生の講演がヒントになりましたが、一つは丹波地域の田舎のイメージを売らなければならないと言っているデザイナーに、地域の戦略を講演していただこうと考えております。

また、大阪に、都市から田舎にお客様を送り込む若い企業家がおありまして、そう言った方を地域にお呼びして、マーケットやニーズの話をして、都会の人がどういったプログラムに反応して田舎に来るか、という話をしていただこうと考えております。

あと食で、商品数はどんどん出てきています。しかし、失敗して学ぶといいのですが、学びません。そこに問題意識を持って、みんなでまちづくりはどうやって動くのか、しっかりとかわべ先生の取り組まれているプロセスを踏んで、成功した人達はこうしたプロセスを踏んでいるよという4回講座を行おうとしています。

食も二つテーマがあって、獣害で、鹿で悩んでいます。恐竜と絡めてということではないですが、鹿を食べようという話が盛り上がり、商品開発といった取り組みは行っていますが、全然売れるものが出来ません。神戸北野のシェフに鹿肉を持って行ったら、とんでもないおいしいカレーが出来てしまって、そうした人に頼むと良いものが出来ると確認が出来ました。

鹿とスイーツという、2種類の食の開発を進めようとなりました。プロの方に来ていただいて、これは恐竜とは全く関係ないだろうと怒られますが、恐竜でまちづくりを興すためのプロセスの一つのアクションの誘発剤になる講座を行いましょうということで準備を進めています。

行政がつくる組織の下に、地域をトータルにマネジメントする組織を作ろうということで年明けに参画フォーラムというものを行います。市民に、骨が出てきていない地域を調べていただいて、まちづくりを行っている人達を一同に介して、恐竜の情報をみんなで共有しようというフォーラムです。

そこで、恐竜をきっかけに両地域をつなぐネットワーク会議が出来て、横でそうした講座を行いつつながら、試験的に物が出来ないかと考えています。

今回残念ながら、社会実験に使うお金が捻出できないという話があり、それでは費用を捻出しようということで、地域の方々に声かけをしていただいたり、ミュージアムで発信したり、鹿にお困りの

地域の方をお願いしようとしています。お金が集まり、実際にアクションをしたいという話が盛り上がれば、一度失敗しても良いので、アクションを試みようという、手続き論を行っています。

本日、お二人の講師の方に来ていただいて、とても参考になりましたので、しっかりとプロセスを踏んで、今このお金を使おうとしています。ここから何人の人が育ちあがってくるのかということとはわかっていないですが、やっと船を漕ぎ出したという状況です。

かわべさんが、地域からいなくなったら、今どうなりますか。という話をお聞きしたいと思います。

(かわべ)

さらに良くなると思います。

空家も私たちが始めたときは、少なかったですけれども、私は今 NPO の空家事業にほとんど関わっていません。企画者なので、企画してシステムを作って、最初のシステムが回り始めれば、あとは独りで動きます。私は島根にも、石見にも、必要でない人間ではないのかなと思っています。逆に、かわべがいなくなったから自分達が頑張らなければという形で、過去に同じような経験で、私がいなくなって、地域のグループが発展したというケースを経験しているので、私が地域にいなくなるということは、地域にとってもものすごくいい事だと思っています。

(細野)

それは、そろそろ人材が揃いだしたところですか。

(かわべ)

そうですね。私の役割は要らなくなってきたということで、人材ももちろん揃ってきているということです。

(細野)

先ほど、人材について色々話していただきましたが、後継者を作っていかなければいけないと思いますが、その辺りの仕掛け作りというのはどのようにされていますか。

(かわべ)

後継者というのは、私が存在することによって、江津市役所の職員が変わったことです。ですから、それは触発ですね。職員が変わったことで、その職員をみて、次に続く若手が、女性がまた回って増殖していくわけです。だから、私は最初の一歩のボタンを押す人間で、地域おこしの点でイノベーター的な存在だったと思います。最初、私に関心があった人は少なかったです。しかし、仮に初め 10 人が関心があっても、その 10 人が変わったことでその人の回りが又変わっていくという感じがします。

(細野)

はい。ありがとうございました。黒滝村の中井さん、お願いします。

(黒滝村中井)

奈良県黒滝村から参りました、中井と申します。

先ほど、東村の港川さんや比嘉さんのお話を聞いて、同じグリーンツーリズムを目指すものとして、本当にすごいなと感じました。そしてツーリズムで、若者が流出していくことを防いでくれるという

ことに、ガイドに憧れを持って、誇りを持ってその職業に就いて、その地域にこれからも生きていこうという流れになっていることに、本当にうらやましく思って、出来ればこれから我々もこれからの活動の中で、それを目標に頑張りたいと思っています。

協議会が発足して、先月の 26 日に第二回の協議会を行って、そこで会長に任命されました。私が、黒滝村にグリーンツーリズムが必要であると思う理由の前に、少し村の紹介、説明を行います。

黒滝村は吉野林業地帯の一角にありまして、村の面積の 95、6%が杉、ヒノキの人工林ということで、林業地帯ですけれども、70 年代から構造不況業種といわれるようになって、林業が衰退していく、人口が流出していく、そうした流れで 80 年代頃から、ホテルを作ったり、バンガローやコテージ村を作ったりしました。

初めは、観光客も物珍しさでたくさん来ていただきましたが、そのうちに観光客もどんどん減っていく、人口流出は相変わらず止まらない、ということで観光施設も危機的な状況にあります。

隣には吉野山や修験道で有名な泥川というところがあり、ここは 2~300 年前からの歴史的な資源遺産がありまして、それほど苦勞しなくてもお客さんが来られているということです。

その中で、黒滝村と言うところは、観光客を、お客さんを呼んでくるということには、そういった資源が無いので、体験型観光でなんとかもう一度観光客を、お客さんを呼ぼうとしています。

吉野材と言う吉野杉や、吉野ヒノキに、別の付加価値を付ける形で、私はグリーンツーリズムから考えていきたいと思っています。何とか林業を一つの体験として、人に来てもらうということが出来ないかなと考えています。

今回この協議会が発足して、林業や森林関係で、炭焼きを行ったり、野草体験を行っていただくと言った方々に来ていただいて、協議会を行っています。

今は行政主導でこの協議会が運営されていて、私たちは行政に乗って活動していますが、3 月以降私たちが、自分達で運営し、出来れば東村のように事業も出来る採算も取れると言う形にしたいと思っています。

かわべ先生にご質問ですけれども、私は、子育てからする村づくりという NPO 法人の理事にも携わっております。移住定住の委託を村から受けていますが、もちろん空家バンクと言うものも行っています。先ほど宅建業者の方が入っていただいて、行政と NPO の方が入って、一応査定をすると言う話を聞きましたが、やはり専門業者が入っていただくことが必要なのでしょうか。

(かわべ)

一つは、査定を行っていただくということと、もう一つはしっかりと法に則った契約書を書いていただくということ。そういう意味でも、専門家は確実に、この場合は必要だと思います。

(黒滝村中井)

その場合、プロの方と言うのは宅建業者と言ったものでしょうか。

(かわべ)

宅建の方です。私の地域には不動産屋がありません。しかし、建設会社が、仕事の関係上、宅建を持っている業者が 2 社あります。その 2 社と私たちと市と、一緒に連携して行っています。

(細野)

法令順守はとっても大事です。次に、NPO 法人和（なごみ）の木村さん、宜しくお願いします。

(黒滝村木村)

黒滝村で NPO 法人和をさせていただいております、木村と申します。私たち NPO 法人和は、子育て支援からの活性化を目的としていまして、今黒滝村には、中学校 25 人、小学校 25 人、幼稚園 6 人という状態で、三年保育の一番下の桃組では 0 という状態です。子どもが少ないから支援しなくても良いのかということではなく、やはり支援が必要であろうと、そこから孤立している親御さんを支援と言うところと、個人的に介護タクシーを行っていますが、路線バスの無い黒滝村です。村外の病院に行くにしても、村内での銀行や郵便局や役場に行くにも、不便を感じる人もいます。

そうした人と触れ合うことで、色々な話を聞かせていただいています。もし行政が出来ないのであれば、和で行おうという勢いで活動しております。資金的なものから、山のように問題はあります。ただ私を信用して、また私の活動に賛同して、支えていただいている方と一緒に、とにかく村を良くしようと、村の子どもたちを守っていきたくて。自分達の子どもは、絶対帰ってきて欲しいのです。それをとにかくしたいという思いで活動しています。

今回のグリーンツーリズムでも、和としても、何かしなければという話があったので、村の方にお願ひして、移住定住の委託などを行っています。私は、丁度真ん中の年齢になってくるので、自分達が担っていかねばいけないということもあります。

(細野)

それでは、前田さん、宜しくお願いします。

(黒滝村前田)

黒滝村で観光ガイドを行っています前田と申します。個人で開いている野草園があり、趣味の会の会員として手伝って下さいということで、半ボランティア的な活動を行っています。

私は黒滝村の出身者でもないですし、現在住んでいるところも、隣の下市町というところなんです。

ところが、黒滝の野草園に行きまして、黒滝と言う地域や住民のみなさんとは気が合うような気がしまして、自分が住んでいるところよりも黒滝がいいなと感じています。今日も、黒滝で何か出来ればという思いで、参加しました。

皆様のお話を聞くと、人づくりを通り越して、次の段階に入っておられる地域の方々と思いました。

私たちの地域では、高校になればまちに出て行きます。若者は一度都会に出ると、なかなか帰ってきません。帰ろうと思っても、仕事がないと言うことが現状だと思います。

先ほど触発と言う話を聞きまして、私は野草には興味が無かったのですが、ある人がきっかけで、野草園にはまってしまったという経緯があります。そうした細胞のある子どもを見つけようと活動していますが、小さい子どもは分かりません。皆さんの話を聞かせていただいて、ありがたかったと思います。それで私の目標としては、野草園だけではなく、田舎の生活に対しても、分子のある物を出来ただけ探したいなという考えでおります。

(細野)

それでは北上さん、宜しくお願いします。

(黒滝村北上)

昭和 20 年に日本が戦争に負けて、それから復興の中で、木が大きくなったら切られていた時代がありました。それで、慌ててたくさん材木が要ると思い、この山もあの山も全部植えました。

山育てと言うことは、間伐して行って、木と木とが、枝が触れないようにしていくのが、正しい間伐です。昭和 49 年がピークとなって、その後衰退して、木を使って家を建てることは殆んど無くなりました。木を使って建てている家も、外国産の木ばかりです。植えた木を切っていかなければならない時期にありまして、吉野郡でも材木を商売している人がいないと言う状況です。その中で、子どものころ遊んだように、間伐材を炭にしようということで、炭焼きをして、今のグリーンツーリズムと合わせていただいています。

また奈良県では、平城京 1300 年祭で、たくさんの方が来られて、奈良県の南の方にも移動していただきたいと言うことで、黒滝村では何を体験していただけるのかと考えたときに、色々活動している次第です。間伐をして、次の時代に立派な木を育てていきたいと思っております。

(細野)

はい。ありがとうございます。それでは、村田さん、お願いします。

(黒滝村村田)

奈良県地域づくり支援課の村田と申します。このグリーンツーリズムの協議会を立ち上げる以前、4 回会合がありまして、当初から村民の皆様が、非常に熱心であるということと、それと皆さんプロなんです。人材づくりという面では、インストラクターはそのままいいのではと考えています。

1300 年祭もこの事業もきっかけだと思います。これをきっかけに、黒滝村の皆さんが活動を続けられるような協議会がうまく動けばいいなと願っております。またご協力したいと思っています。

かわべ先生へのご質問は、NPO を運営されている中で、一番困難だなと思っている点をお教えてください。

(かわべ)

私自身が困難だなと思うことは、報告書などを書くことが面倒くさいことと、経理処理が一般とは違うことです。本来行わなければならない事がメインで、そうした事務作業というものは出来るだけ、シンプルにしないと事務作業の為の NPO になってしまうと言うことです。

今は経済的に非常に厳しい状況であり、無償で活動できる人しか出来ないとか、スタッフに対しても低い人件費しか出せません。私は、この革命を起こさなければならないと思っております。

(細野)

北村さん、宜しくお願いいたします。

(黒滝村北村)

今回協議会を 11 月に設立しまして、約 20 名こうした方々がおられます。

先ほど会長から話があり、行政が主導であると言われていただきましたが、そのようには思っておりません。皆さんが体験されたことを、そのまま協議会でしていただくということで、会長、副会長、事務局を含めて、商工会が、業者に頼ってはいけません。手を上げたことはいいなと思います。

かわべ先生も言うておられました。きっかけ、スイッチを入れたと思っています。3 月までに協議会で、窓口、情報を発信することを目標として、そこまで今回の事業で行いたいと考えています。

育成、資源というテーマを三つ上げていきましたが、この 20 名が今後増えてくると思います。今でも、何人か様々な体験をされている方が集まっていますが、それを聞いて私たちも行うかと手を上げてい

ただいているので、組織をまとめるだけとなるだろうと思います。

加えて、交流ということで育成が出来るのではないかと考えています。その中で資源も生まれてくるのかなど、3月まで行政として一緒に見守っていきたくて考えています。

一構成員として意見も言いますし、これを行いたいと言ったのも私ですので、必ずこれを成功させたいと思っています。皆さんも思っていることで、3月にはいい報告が出来るかなと思っています。

ただ、組織を作るに当たって、ついてくる人、ついてこない人、これはいます。やはり皆意思統一しているようで、バラバラ温度差があるという、その辺をうまく引っ張っていく組織作りに当たって、一番大切なことは、もしくはヒントと言うのがあれば教えていただきたいと思っています。

(かわべ)

立場によっても違うと思います。私たちは、行政や様々な企業と連携しています。それで、私たちNPOにヒアリングに来られた方が、私たちも行っているが、うまく行かないと、相互の目的や、利害関係がうまく行っていないといいます。

何故私たちがうまく行っているかといいますと、一つには、宅建や行政職員と言っても彼らは私たちのNPOの理事でもあるからです。ですから、NPOのメンバーで行っていると言っても過言ではないです。その人がたまたま行政職員で、その人がたまたま宅建を持っていたと言うだけです。

結局、地域づくりを行うときに、私が思うことは、皆さん一緒に公平に行っているようでも、行政職員は、仕事として活動しています。同じ地域活動を行っても、そこから給料が出ています。逆に、民間の人たちは、自分で収入を得て、プラスアルファ住民として、地域活動を行う訳です。私が思うには、たまたま職場が、役所だろうが、県庁だろうが、あるいは林業だろうが、普通の会社であろうが、一住民、一村民であるということは変わりませんから、一住民の人に、自分達の働く仕事以外にプラスアルファ、地域活動的なものを要求するのであるならば、たとえそれが公務員の方であっても、そこは同じ立場として、活動することが一番重要であると思います。

あと、色々な組織がうまく行かないと言うことは、恵まれている証拠です。私たちは組織の目標や目的ではなく、ここの地域が消えてしまうと言う危機感を皆が持っているわけです。だから、企業も自分達が活動できるのも、地域があつてこそ、人がいてこそなんです。例えば、世界中で色々戦争がありますが、どこかエイリアンが攻めてきたら、世界中の人たちが手を取り合って、何とかしなくてはなりません。それと同じで、各組織で仲が悪いことは、恵まれている証拠ということです。

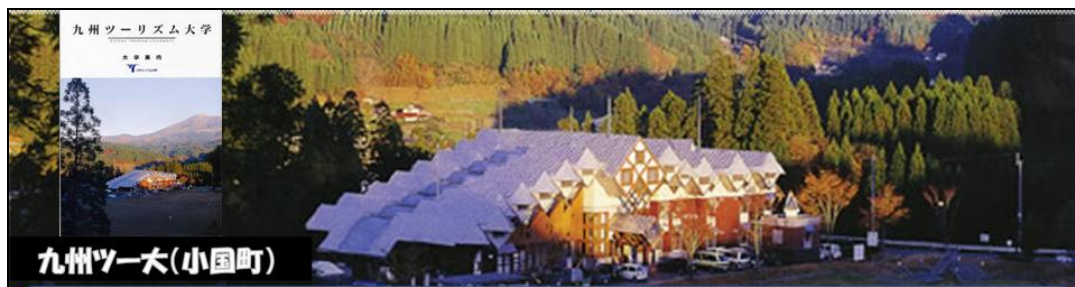
それから、私が組織を作る上で、重要であると思うことは、とにかくトップの熱意だと思います。企業でも、色々なグループでも、トップによって、変わってくると思います。だから、行政職員という立場であるならば、縁の下の力持ちとして、自分はステージに立たなくても皆さんが動きやすいステージづくりこそが、仕事ですよ。それで、一緒に草を刈ったり、一緒に体験したりする、これは一住民として行うべきことかなと思います。

(細野)

今日はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。

(中村)

以上を持ちまして、本日のプログラムは終了となります。本日の内容が、今後の事業推進に少しでもお役に立てれば幸いです。ありがとうございました。



「学習」と「交流」

小国町・星野村での実践



私のこと

熊本県小国町北里生まれ
大学卒業後 帰郷(農業・タウン誌)
財団法人学びやの里事務局長
小国町行政経営局局長(任期付)

熊本大学 非常勤講師(ツーリズム論)
九州ツーリズム大学事務局長
2008年 3月
福岡県星野村副村長
財団法人 星のみるさと理事長

その他
国土交通省 地域振興アドバイザー、
国土交通省 若者の地方体験企画委員会委員
(地域づくりインターン事業)
熊本ツーリズムコンソーシアム会長
新八女市観光事業開発委員会
ワーキンググループ座長など

現在、両親と妻と2男一女
を小国町に残し単身赴任中



九州ツーリズム大学開校の当初の目的



第1期生の授業風景

1997年9月開校

- ・ツーリズムの推進
- ・ツーリズムの担い手育成
- ・ツーリズム関連の情報発信

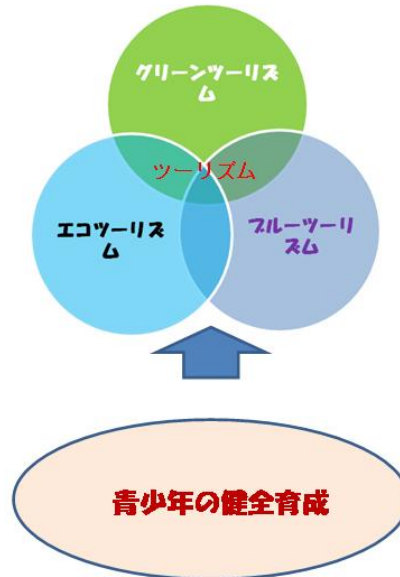
リーダーの育成とネットワークの形成



農山漁村の持つ教育的価値



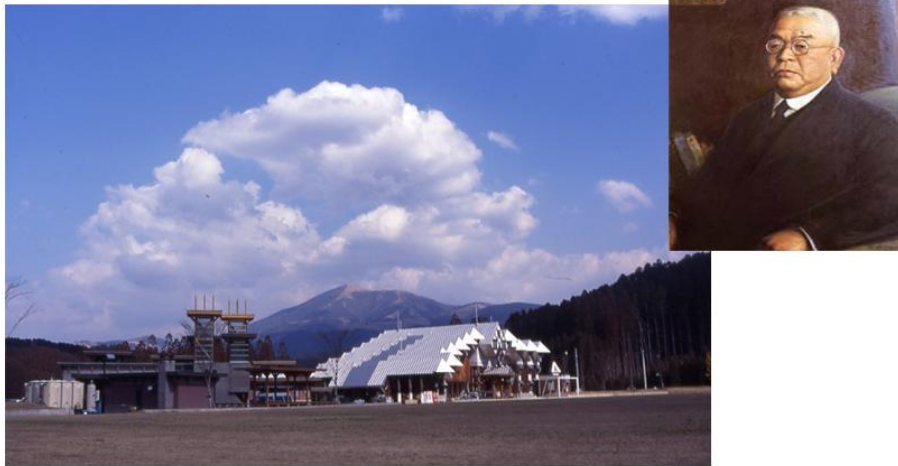
体験 交流型の新しい観光



うるるん農村体験教育ツーリズム (小国町) SINCE 2004



「地域を豊かにするのは人材である！」
「学習」と「交流」によるまちづくり
北里柴三郎博士の遺志



九州ツウリズム大学（財団法人学びやの里 拠点施設）

人+まちづくり(仕組み)

上勝町



笠松町長 & 横石知二さん

由布院



中谷健太郎さん



桑野泉さん

武雄市



樋渡市長

多彩なネットワークが完成

約1500名を超えるネットワーク

九州管内におけるGT実践者たち（民宿 レストラン 直売所）

若き研究者の誕生（早稲田 法政 埼玉 大阪市立大など）

大学との連携強化（地域づくりインターン事業）

観光関連（リクルート JTB 観光協会 観光コーディネート組織）

ツーリズム関連（九州のムラ GTのフランニングなど）

公務員（国 県 市町村） 市町村長 NPO法人のメンバー

移住者（UJIターン）



星野村の九州ツアー大卒業生



星野村には、高木村長（1期生）を始め、田辺地域再生協議会会長（3期生）など、役場や地域づくりのメンバーにもツアー大卒業生が多くいます。

九州ツー大の取り組みを基礎に
「くまもとツーリズム」コンソーシアム創設



「くまもとツーリズム」宣言

○くまもとの農山漁村で育まれた暮らしや文化を大切に、地域を愛し、ふるさとに誇りを持ち、訪れる人々を心からのおもてなしでお迎えます。

○訪れる人が、集落の豊かな自然、歴史、文化に触れられるような、滞在をうながし、地域で暮らす人々との出会いと交流を図り、持続可能な地域づくりを進めます。

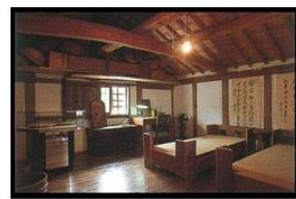
○訪れる人々と地域で暮らす人が、ともに農山漁村が築き上げた資源を大切に、交流から滞在に向けた感動体感「くまもとツーリズム」を推進します。



“感動体感”くまもとツーリズム

13年目を迎えた九州ツーリズム大学

育つ 実践者たち！

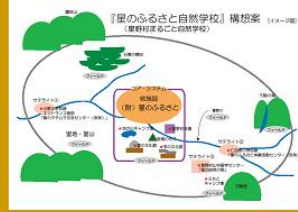


星のふるさとツーリズム連携図

星の仕事づくり講座

- ★星の村のものづくりコース
- ★星の村の料理づくりコース
- ★星の村の滞在づくりコース
(直売所 など)

星のふるさと自然学校



星のふるさとツーリズム

人材の育成
他人の眼
ネットワーク形成
情報を得る。

星のツーリズム大学

20年度星のツーリズム大学



星の一芸の村づくり講座

★村のものづくりコース

井原満明講師 →



★村の料理づくりコース

新江憲一講師 ↓



旅行者に地域の素晴らしさを伝えたい方
のための村造成コース

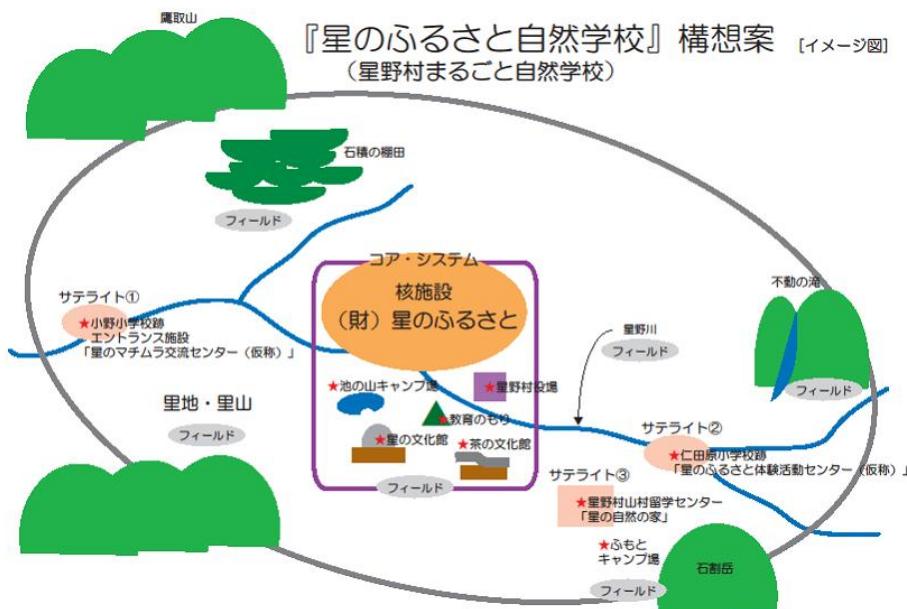
職人型村造成コース 地域の伝統的技術や工芸を継承し、観光資源として活用するための村造成コース。	体験型村造成コース 地域の自然や文化を体験し、観光資源として活用するための村造成コース。	滞在型村造成コース 地域の自然や文化を体験し、観光資源として活用するための村造成コース。
地域活性化型村造成コース 地域の活性化を目的とした村造成コース。	観光型村造成コース 観光資源の創出を目的とした村造成コース。	教育型村造成コース 教育資源の創出を目的とした村造成コース。



★村の滞在づくりコース 山下未央講師

← 滞在プログラム

『星のふるさと自然学校』構想案 [イメージ図] (星野村まるごと自然学校)



「楽しみ、生きがいのツーリズム」

中山 ミヤ子 (なかやま みやこ) 農家民宿「舟板昔ばなしの家」経営



- ・ 大分県安心院町生れ。20年前まで大規模な養蚕農家、現在は畜産と米主体の農業を営む。平成8年3月より農家民宿「舟板昔ばなしの家」を始める。
舟板昔ばなしの家では炭焼き、草木染め、コンニャク、豆腐、そば打ち、うどん打ち、牛飼いや等、多彩な農業体験が年中できます。客室はあら壁の二階建てで、周りは古い農機具に囲まれ、夜は「いろり」で昔ばなしを楽しみます。

専門職員の採用・・・九州ツ一大講師

土居 元 (どいはじめ) さん
(星のふるさと自然学校プロフェッサー)



プロフェッサーとして、土居 元 (どいはじめ) さんが着任しました。土居さんは、国際自然大学校 (東京) に20年近く勤務後 (副校長)、千葉自然学校の創設をはじめ多くの自然学校の立ち上げを指導してきました。現在は、九州各地の自然学校のアドバイスをしています。
今回、ふるさと雇用事業基金 (福岡県) により、星のふるさと自然学校のプロフェッサーとして、自然学校の本格的な準備を進めています。

連絡先 星のふるさと自然学校準備室 母子センター2階
(第3会議室) (52) 3111 (内線312)

星野村体験プログラムの例



体験・感動・交流プログラム


 星野村
 長閑な村で
 楽しいの盛り場～
星野村
 十二月五日（土）
竹灯籠まつり
 棚田交流
 日程 平成21年12月5日（土）15:00～20:00
 会場 広内・上郷地区の棚田
 問い合わせ先 星野村観光協会 0943(3)22000
 この事業は、経済産業省所管の地域活性化助成金（ビジネス）
 促進事業の一環として取り組んでいます。

主催 星野村
 共催 星野村観光協会
 協賛 星野村観光協会、星野地区運動会連合会、星野地区
 協議会、星野村観光協会、星野地区運動会連合会、星野地区
 協議会、星野村観光協会、星野地区運動会連合会、星野地区
 協議会



直売所はみんなの元気の源！



星野村農産物直売所「びそん」



ツ一犬ネットワークの登用



大野 希（おおののぞみ）さん
九州ツ一犬9期生。
福岡でまちづくり関係の会社に勤務。先輩の山下さん（3期生）に誘われてツ一犬を受講。現在、星野村の農産物直売所「びそん」の立ち上げから運営に携わっています。



地域に役立ちたいから
農村レストランを開店



九州ツ一犬講師の本田 節さん

新入社員は60歳から

人吉市、球磨川河畔に、築120年の民家を移築した風情あるたたずまいの農村レストラン「ひまわり亭」があります。
経営するのは、「人吉にこの女性あり」といわれる、本田節さん。「ひまわりグループ」の主宰者、そして郷土料理研究者でもある女性です。



星の食べてみん祭



星の農家レストラン創設

交流からの農住の時代

農山村があこがれの地に！



団塊ジュニアの農村移住が顕著に！



二局地居住の実践 (甲斐さん 4期生)



甲斐美保さんは、九州ツリーヌム大学の四期生。西日本新聞の記事を読んで九州ツリーヌム大学のことを知り、入学してきた。二〇〇〇年のことだ。住んでいた福岡から小国まで、半年間に渡る通学を終え、卒業。そして、翌月に小国に移住。現在星野村在住。ツリーヌム大3期生の松橋恵美さんと古民家にて田舎暮らしを実践

空き家保全と活用の実践

(田中さん 11期生)



田中俊夫さんは、九州ツリーヌム大11期生。現在星野村にて、空き家の保全と活用のために奮闘。NP0法人の創設において空き家の調査を実践。

2009年度美しい村連合ベスト3と白川村



群馬県・昭和村（養蚕民家の里）



福岡県・星野村（石積みの棚田）



鹿児島県・喜界町（隆起珊瑚礁）

次回総会開催地
→



岐阜県・白川村（合掌づくり）

日本で最も美しい村連合加盟効果



2005年（7カ所） → 2009年（33カ所）

- ① 世界で最も美しい村連合の創設の動き
仏・伊・米・英・中・日本などで結成予定
世界の星野村へ・・・地域ブランドの更なる向上
- ② 企業（カルビー・伊那食品など）の支援に期待
地域資源＋企業の技術＝新製品開発も可能に
- ③ 選ばれる地域・・・観光（交流）から定住へ
八女地域・・・九州の南フランスへ 美しい村（星野）

新八女観光開発委員会 ワーキンググループ

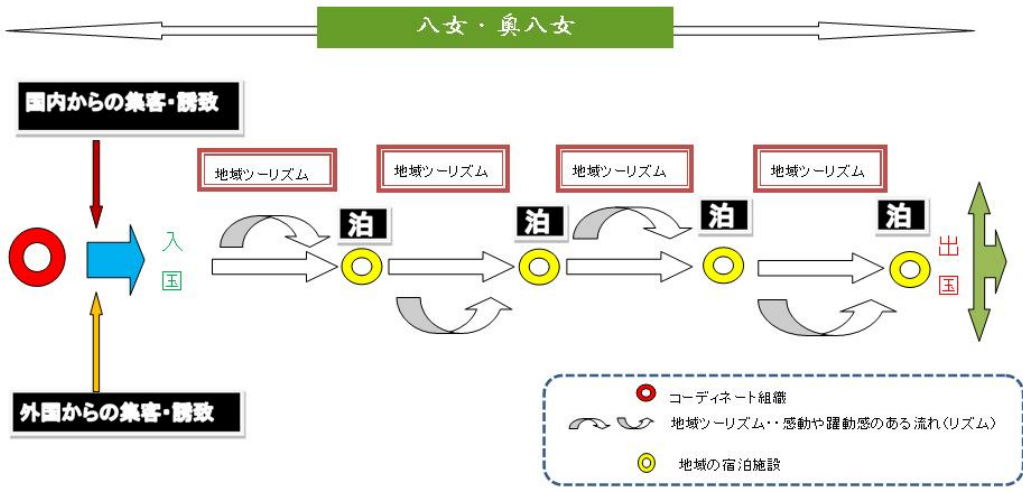
茶のくに 八女・奥八女



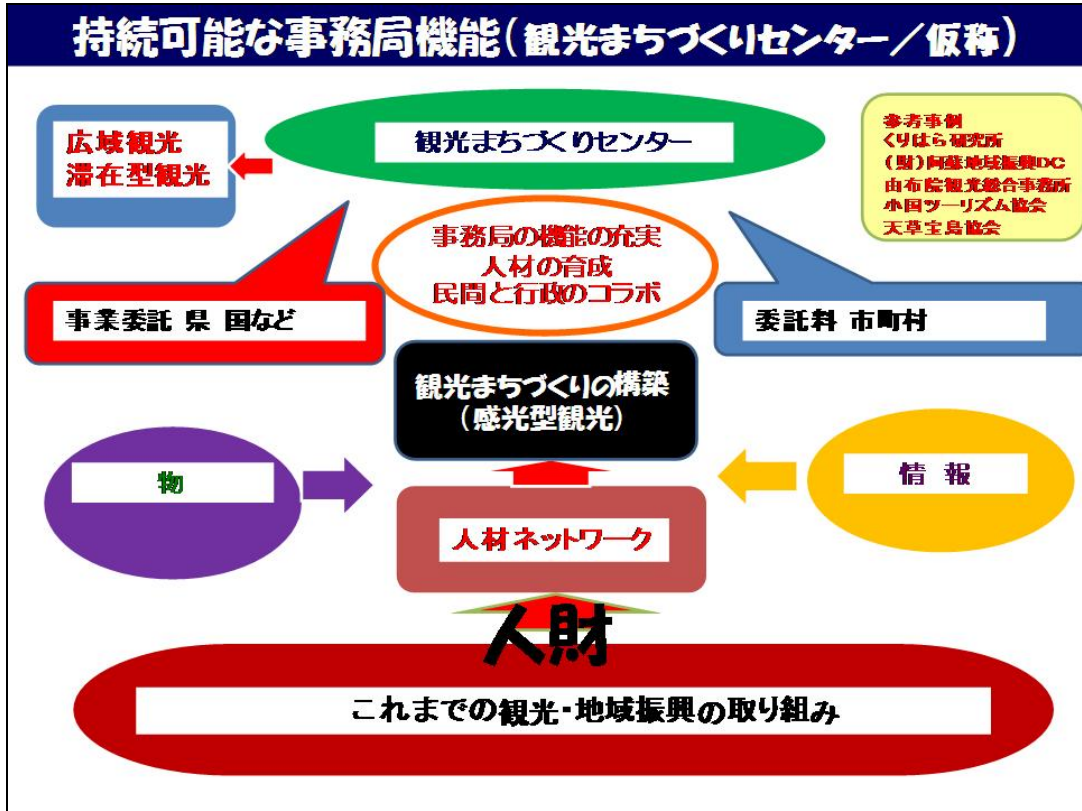
つながり、響く、八女の人と物語

滞流型観光の創出 = 滞在型(宿泊) + 対流型(ツーリズム)のイメージ

滞流型観光(造語)・・・地域の多彩な宿泊施設(ホテル・旅館・民宿・農家民宿・キャンプ場)などを滞在拠点にしなが、それぞれの地域ツーリズム(交流や体験)を楽しむこと。



滞在型観光とは、一箇所に滞在し、滞在地で静養や体験型を始めとしたレジャーを楽しむこと、またはそこを拠点に周辺の観光を楽しむレジャー形態のこと



持続可能な事務局機能の事例

行政＋民間協働型（活動資金は行政が支援 委託）

くりはら研究所・宮城県栗原市（合併に伴い広域的な組織として活動）
竹田研究所・・・竹田市（食育やツーリズム活動を中心に展開）

行政主導型（活動資金は金利で運営 職員の育成も目的）

(財)阿蘇地域振興デザインセンター 県と阿蘇7市町村が出資（30億）
（理事は首長 事務局長は民間人 職員は市町村からの派遣職員）

ネットワーク型（活動資金は行政と民間からの委託料）

天草宝島観光協会・・・合併に伴い従来の各観光協会を統合

民間主導型（資金は会員から＋入湯税）

由布院観光総合事務所・・・由布院の景観づくりやネットワーク形成
（事務局長は全国公募 スタッフはフロパーと研修生）

小国ツーリズム協会・・・観光業者以外からも参加 UJIターン
（道の駅からの益金を活用して地域の活性化を図る）

事例・・・くりはら研究所 (宮城県栗原市)



故 表屋弥生さん

- ・ 新しい観光産業づくり 「くりはら田園観光都市」

- ・ ●個性的で活力のある観光産業づくりを目指して

栗原市には、栗駒山などの豊かな自然の恵みを受けながら、農業を基幹産業に育まれてきた暮らしや文化、特産品などさまざまな魅力があります。これらの素晴らしい資源という「光」を調査・発掘し磨き上げ、その輝いた光を観(み)せるため、個性的で活力のある観光産業づくりとして、「くりはら田園観光都市」創造事業に2006年10月から取り組んでいます。

ご静聴ありがとうございました。



「2009 日本で最も美しい村連合認定」・・・星野村へぜひお越し下さい。

■NPO法人 結まーるプラス活動事例

●取り組みのきっかけは？

それは、ひとりの都市からの「ターナー」の「想い」から始まった！

なんて、ここはステキなところなのかしら！
自然も、文化も、人の心も豊か！！

住んで最高、暮してハッピー♪
まさに、**極上の田舎**ね！！



そうだわ！！

島根と鳥取の区別もつかない
都会の人に教えたいよ♪
こんなステキなところが、あるなんて
みんな知らないんですもの〜♪♪

という訳で、
「みなさ〜ん♪山陰は、島根は、石見は、最高よ〜！」

と、熱い呼びかけを始めることとなりました。

NPO法人 結まーるプラス

■NPO法人 結まーるプラス活動事例

●6つの活動(3つの攻めの活動と、3つの守りの活動)



NPO法人 結まーるプラス

■NPO法人 結まーるプラス活動事例

●田舎暮らしツアー

田舎暮らしに関心のある方たちに、地元の人と交流しながら、地域の雰囲気を感じてもらいます。プログラムののごくごく一例ですが…

住んで最高！
定住促進
住む人を増やそう！
●田舎ツアー ●定住相談



●農業体験



●1ターンの者のお宅拝見



●石見神楽鑑賞



●アウトドア体験



●昔暮らし体験



●田舎グルメ体験などなど…

NPO法人 結まーるプラス

■NPO法人 結まーるプラス活動事例

●都市からUターンを希望する人と、地域に放置された空き家を、つなげています。

空き家活用
地域の景観を守ろう！
●空き家バンク



●東京から1ターン(売買)



●京都から1ターン(売買)



●兵庫から1ターン(売買)



●東京から1ターン(賃貸)



●大阪から1ターン(賃貸)



●千葉からUターン(賃貸)

NPO法人 結まーるプラス

NPO法人 結まーるプラスからのお知らせです！(裏面もあります)

ふるさとの家を ふるさとのために…

空き家バンクへご登録を！

現在、桜江町の人口は、3500人余りで、高齢化率は39%に及んでいます。(鳥根県全体では、高齢化率約25%、全国1位)
 また、年間4.0人ずつ人口が減っており、地域で暮らす私たちは強い危機感を持っています。一方この桜江町には、『田舎』での暮らしを求め、年間30~40人の人が訪れ、その多くが中古住宅への居住を希望されています。
 家は人が住まなければ、あっという間に老朽化が進み、雨水の侵入した家は、大規模な修繕が必要になります。
 そこで、私たちNPO法人では、私たちが窓口となって賃貸・売買等が可能な中古住宅の情報収集を行いながら、田舎暮らしを希望される皆さんへ情報提供を行なっています。老朽化が進む前に、『桜江町を気に入って住みたい!』という方に、故郷のお宅を提供(賃貸または売買等)していただけないでしょうか?

空家紹介は、本来宅地建物取引業法で、免許を持った事業者に限られていたのですが、国の構造改革特区による特例措置が全国に適用されることとなり、江津市が「地域活性化のための空家情報提供等の担当事業」を目標に申請し、このたび知事の認可を受けることができました。この特区認定は、県内でも第一号となります。私たちNPO法人は、江津市から事業委託を受けて当事業に取り組むこととなりました。尚、賃貸・売買等の仲介については、専門の宅地建物取引業者が行います。

どうか、賃貸または売買していただける可能性のある空家がありましたら、下記情報をファックスまたは電話にてお知らせください。こちらから、ご連絡させていただきます。

空家情報提供フォーム ◆FAX 0855-92-8016 まで	
あなたのお名前	連絡先 電話 () -
空家の場所	・市山 ・川越 ・川戸 ・谷住郷 ・長谷
販売・賃貸の意向	・「販売」のみ可能性あり ・「賃貸」のみ可能性あり ・「販売」「賃貸」共に可能性あり
建物の状況	A. すぐにも住める状態 B. 多少の修繕が必要 C. 大規模な修繕が必要 D. その他

【この件に関するお問い合わせは、こちらまで】

特定非営利活動(NPO)法人 結まーるプラス(法人登記番号 2803-05-000734)

【住所】江津市桜江町川戸(川戸駅舎内)【電話】0855-92-8015 担当 伊賀さとみ

●NPO法人 結まーるプラス(ゆいまーるぷらす)の主な活動●

- ①定住人口を増やすために 「田舎暮らし体験ツアー」や「定住相談・支援事業」
- ②定住人口を増やすために 石見神楽体験ツアーなどの「体験交流事業」
- ③空家情報の活性化のために 「特産品開発支援」や「スローマーケット(特産市)」
- ④地域連携強化のために 「空家・空き地の有効活用事業」
- ⑤不便や不安を解消するために 「自警ネットワークのシステム構築事業」

など地域の維持や活性化のために様々な活動を行なっています!

空き家活用
地域の景観を守ろう!
●空き家バンク

●空き家の賃貸や、売買は、
地域の人たちへ、まずこう呼び掛けました。

NPO法人 結まーるプラスからのお知らせです！(裏面もあります)

自警ネット・チームさくらえに参加しませんか!

みなさん こんにちは!

私たちは、川戸駅で大好きな大好きな桜江町がもっと楽しく暮らしやすい町になるようにと、様々な地域活動に取り組んでいる「まちづくりNPO法人 結まーるプラス」です。このたび新たな活動のひとつとして、「地域の安全を守る自警ネット」を立ち上げることになりました。というのも、このころ、私たちの町で、お年寄りを狙う悪徳業者が増えているという状況が発生しています。また、全国各地を見渡せば、子供たちが被害を受けるにまじい事件も増えつつあります。「自分たちの町は自分たちで守る!」そんな時代になってきました。そこで、自防衛が第一とした「町交際関係との距離による監視づくり事業」に着眼したところ、採択して頂く事ができました。現在、江津警察署ともタイアップして地域を守る体制づくりを進めています。どうか皆さんも一緒に私たちの大切な桜江のお年寄りや子供たちを守っていきましょう!



このマークは、自警ネットのシンボルとして開発しました。
 英語の文字の意味は、
 We are watching you! (私たちは見守っています。あなたを!)
 Warning! (警告)
 We care about our elders & kids.
 (私たちは、私たちのお年寄りや子供たちを見守っています。)
 Always! (いつでも!)

というものです。ハート型は「地域を愛する温かい心」を、その中の目は、「不審者を見送り」つつ「お年寄りや子供たちを見守る」目を表しています。

活動の概要は次の通りです。ご賛同頂ける方は、ユニフォーム(有料)なども用意していますので、さくらえサロン(川戸駅舎内)にある「入会申し込み書」にご記入の上、メンバー登録をお願いします。
 ※ユニフォームは数に限りがあります。できるだけ日常的に町内で着用頂ける方を優先しておわけいたします。

- 1.目的
- 地域の犯罪防止機能を高めること
 - 地域のみなさんの安全に対する関心を高めること
 - 地域のみなさんの安全に対する連帯感を醸成すること
- 2.活動
- (1)「毎日地域パトロール!」の気持ちで(メンバー全員にお願いする活動)
- ・ 地域に出発する不審な人や車に目を光らせてください。
 - ・ そういふ人を見つけた場合は、警察に通報してください。
 - ・ ユニフォームや腕章を持っている方は、地域で活動する際はできるだけご着用ください。
 - ・ 子供たちやお年寄りをはじめ、地域住民の皆さまに積極的に声をかけを行ないきましょう。
 - ・ 犯罪や事故を見つけた際は警察へ通報します。
- (2) ネットを使ってスピーディな情報共有と情報交換(さらに希望される方だけの活動)
- ・ 特に、スピード化、情報化、多様化する犯罪に対応するために
 - ①「携帯電話のメール」を使って情報の共有と交換を積極的に行いたいと思います。
 - ②独自のホームページを作成してネット上で「パトロール日誌」などをアップし情報発信していきます。①②の活動に参加頂ける方は、自警メンバーリストに入ってください。
- (3) その他の活動
- ・ 各世帯に英語版、日本語版各1枚のステッカーを配布(無料)します。
 - ・ 地域の主要な場所にノボリを設置します。
 - ・ 希望する自治体さんには、ノボリや懐中電灯やホイッスルを配布(無料)します。
 - ・ 地域内の企業さん等には、腕章(無料)着用や、業務用自動車へのステッカー(無料)貼りのお断いをさせていただきます。

NPO法人 結まーるプラス(川戸駅舎内) 電話 0855-92-8015 担当:伊賀さとみ

自警ネット
地域の安心・安全を守ろう!
●チームさくらえ

●地域を守る「自警ネット」を立ち上げる時は、
地域の人たちへ、まずこう呼び掛けました。
●35000人の地域ですが、
100人以上が、手を挙げてくれました。

石見ならではの「お取り寄せ」

続きはWEBで、勝手に引き取らせ！

iwamidonya

ウチらが愛するモノしか売らない！

石見問屋

石見問屋

極上の田舎・石見

鳥獣害の害獣には「石見」と書いて「いわみ」と読む「極上の田舎」と呼ばれにふさわしい、美しい日本の原風景が神秘的に残されています。石見を愛することで誰にも負けない私たち「石見問屋」が「ウチらが愛するモノだけ」をご紹介していきます。どうぞ「極上の田舎・石見」をご確認ください。

ご挨拶
みなさん、はじめまして。「石見」ゆりとは、きれいな山があって、大きな川が悠々と流れ、森林であたたかい人たちが優しく暮らしている。それはそれは懐かしめうて美しい田舎なんよ。そこに生きるスガキな人たちが、生み、作り、育てる農産物や特産品、工芸品、職人・クラフト・アートの数々を採り出して、インターネットでご紹介する人が、この「石見問屋」です。まあ、ちいっぴいワゴンあけて、ゆりに見えんかい！

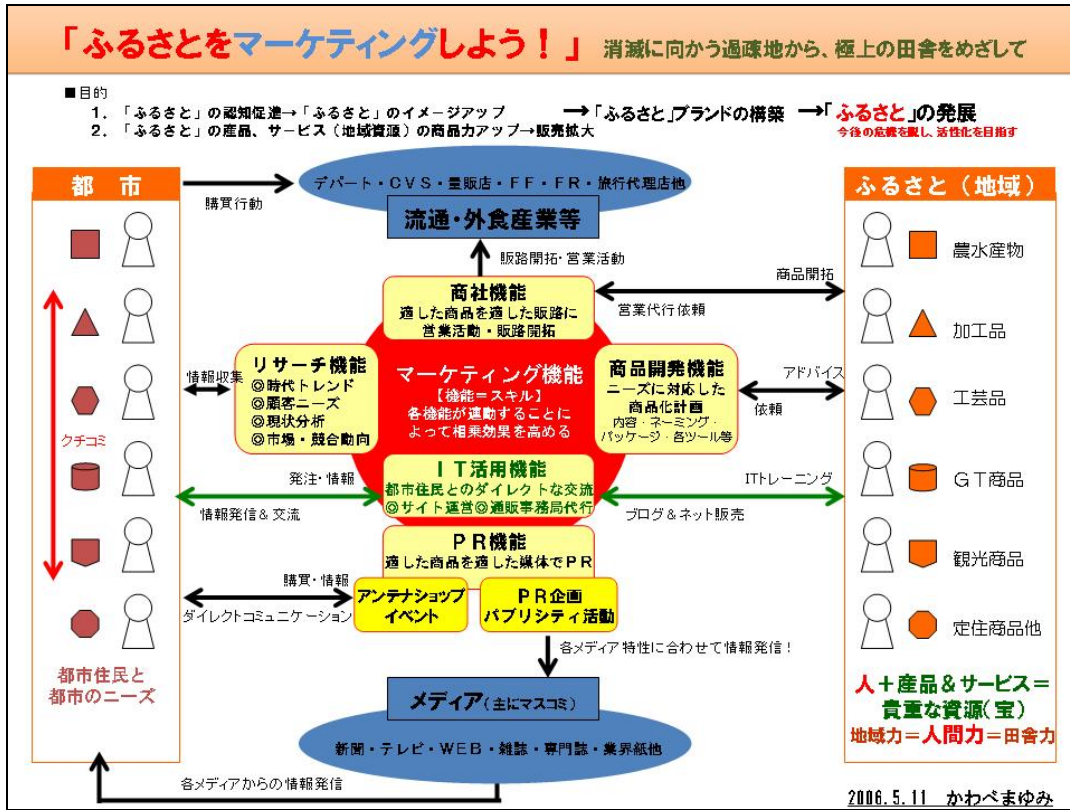
若旦那

このサイトに登場する人たちです。他にもおもしろい人がいっぱいおるでえ！

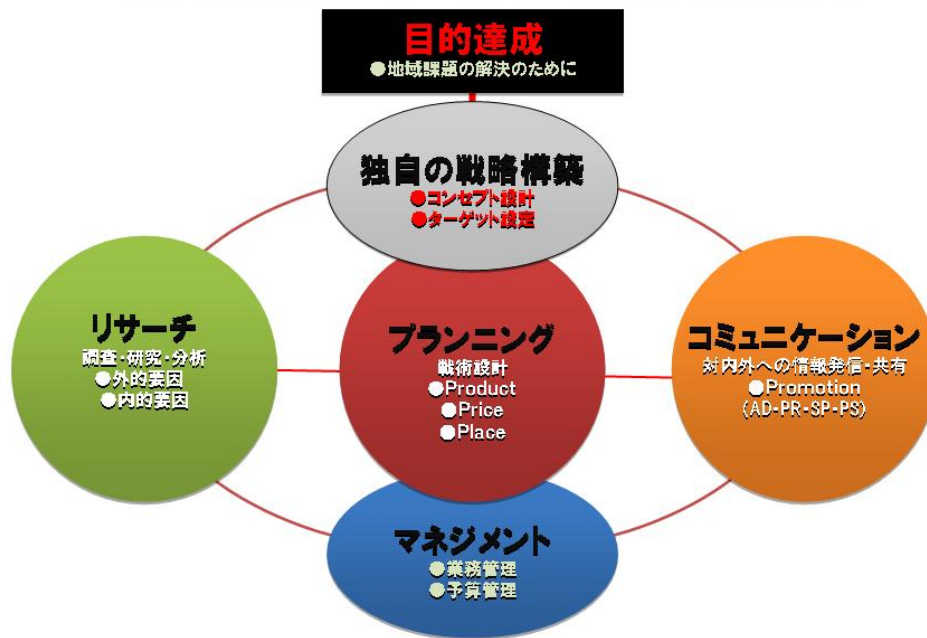
http://iwamidonya.jp 運営：〒699-4226 島根県江津市柳江町川戸駅前倉内 NPO法人 結まーるプラス 石見問屋

もったいない！
CB開発
地域の資源をマネーに！
●スローマーケット ●石見問屋

●地域の宝は、「人」。
●地域の人材や資源を活かした、「ミニシティ・ビジネス」の事例です。
●地域力は、人間力、人間力は、田舎力！



ふるさとをマーケティングしよう！



◎地域の人たちの知見や能力を引き出すポイント！

■人材発掘ではなく、☞交流

■人材育成ではなく、☞触発

■総意ではなく、☞この指とまれ

■啓蒙ではなく、☞成功事例

※人材発掘・育成・総意・啓蒙の共通点は、○○○○○○○○。

“熱さ”の分しか、熱は伝わりません。

地域再生を担う人づくり全国研修会

議事録

■研修会開催内容

報告発表

前半:「岩手県花巻市」、「大阪府柏原市」、「沖縄県やんばる3村」

後半:「兵庫県丹波市・篠山市」、「島根県雲南市」、「奈良県黒滝村」、「岡山県笠岡市」

事業全体総括

■研修会日時・会場

日時:平成22年3月1日(月) 13:00~17:10

会場:東京都千代田区 主婦会館

報告発表 前半：

「岩手県花巻市」、「大阪府柏原市」、「沖縄県やんばる3村」

(中村)

皆様の事業もいよいよ佳境に入って、ご多忙中のところ、発表の準備ならびに会場までご足労いただきまして、誠にありがとうございます。

地域再生を担う人づくりの第3回目、全国研修会と銘を打ち、本年度事業の報告・発表の会を開催させていただきます。

はじめに、国土交通省 都市・地域整備局 地方振興課 古澤法夫課長補佐より、開会にあたりましてのご挨拶をいただきます。宜しく願いいたします。

(国土交通省古澤課長補佐)

皆さんこんにちは。国土交通省地方振興課課長補佐をしております、古澤と申します。本来でしたら、この席に課長である坂本が来る予定でしたが、諸般の事情により私が代わりにご挨拶させていただきます。

地域再生を担う人づくりということで、今年一年間、皆様方は色々なOJT等を通じまして、活動されて来られたと思います。私ども、国土交通省の地方振興課の施策としましても、これからの地域活動というものにつきましても、恐らく、行政だけでは無理であろうと考えております。皆様方地域の活動を通じまして、活動に取り組む方々の活躍が必要であろうと考えています。

片方で、取り組みに当りまして色々な課題に、皆様方はぶつかることと思います。私どもといたしましては、そのような課題に対して、一つはアドバイザー制度としまして、アドバイザーを派遣するという事業を行っています。もう一つの視点としまして、地域の内部での取り組みとして、皆様方情報を提供しながら、色々な活動に向けて取り組みの方を推進していきたいということを考えております。

今年度の事業はこれで終わりますが、皆様方の取り組み、活動はこれからも続いていくものでございます。その中で、他の地域でも同じことですが、活動を進めていくと新たな課題が出てくると思います。その課題というものを、どのように解決していくかということにつきまして、今年度事業が参考になればと思っています。

特に課題解決と言いましても、顕在化している課題というものは、一つの要素だけで成り立ってはいません。いくつかの要素が複雑に絡み合って、一つの現象として出てきているものが課題というものになります。課題の解決に当りまして、その要素を見極めて、適切に対処していくことが必要であると考えています。その際に必要となることは、皆様方が取り組んでいることに対して、どの様に立ち向かっていくのか、どの様に構えていくのか、ということであろうかと思っております。

また、このような観点に立ちますと、地域のリーダーというものは一人、二人という少人数ではなく、構成されている皆様方の協力の上で成り立っていくものであろうと思っています。そのような観点から、今回の地域リーダー、人づくりということを行いまして、またOJTということで、実際に活動で取り組んだ中で、課題解決それから取り組みの促進を行ってきたと思います。

また来年度以降、当然皆様方は活動を行っていくと思います。それに当りまして、今後の課題対処の考え方についても、今年度一年間の成果というものを使っていければ、良いのではと考えています。

更に、今回皆様方、ここにお集まりいただいておりますが、情報交換会もあると聞いておりますので、こうした場でのネットワークの拡大ということにも努めていただければと思っております。

以上、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

(中村)

それでは、研修会を進行してまいりたいと思います。

本日は事業に参加された7つの地域の皆様による「事業の報告会」となっております。短期間ではありましたが、各地域で「地域再生」のプロジェクトが推進され、その過程に様々な人が関わりになられたと思います。

そのあたりの苦労話、自慢話などを含めて、お互いの地域同士でも情報を共有したり、意見を交わし合いながら、本年度事業を有意義な形として締めくくることができれば幸いです。

この後、前半を花巻市、柏原市、やんばる3村の皆様で、そして休憩を挟みまして、後半を雲南市、丹波市・篠山市、黒滝村、笠岡市の皆様にプレゼンテーションしていただきます。

限られた時間ではありますが、皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。

それから一点、配布しているアンケートについてご説明させていただきます。お手元に1枚紙でアンケートがあろうかと存じます。このアンケートは、本日の各地域のプレゼンをお聞きいただいた後、皆様ご自身の地域の状況と照らし合わせて、参考になる、共感できるといった観点で、それぞれ①プロジェクトの進め方について参考となった取り組み、②人づくりの進め方について参考となった取り組み、③にはこれら2つを含めた総合的な観点から、それぞれ2地域まで市町村とその理由を挙げていただきたく存じます。

申し送れました。本日の総合司会は、価値総合研究所の中村が務めさせていただきます。会場内のスタッフともども、どうぞ宜しくお願いいたします。

それでは早速ですが、「報告発表」の前半の部よりスタートしてまいります。最初の地域は、岩手県花巻市です。花巻市の皆様、コーディネーターの細野先生、黍嶋先生、宜しくお願いいたします。

(中村)

前半の報告発表のメインの進行は、中央大学大学院公共政策研究科委員長であり、社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩専務理事でいらっしゃいます細野助博先生にお願いいたします。またオブザーバーとして愛知大学三遠南信地域連携センター・上席研究員、黍嶋久好先生にご登壇いただきます。

ここからの進行は、細野先生にお願いしたいと思います。それでは、宜しくお願いいたします。

(細野)

皆さん、こんにちは。この度は、本当にお忙しい中、年度末で大変だと思いますけれども、是非有意義な研修会でありますように、皆様と一緒に議論していただきたいと思います。最初は、花巻市太田地区振興会の皆さんです。発表は 20 分、質疑応答は 10 分、計 30 分ですので、時間厳守でお願いいたします。それでは宜しくお願いいたします。

(花巻市浅沼)

太田地区振興会の地域再生を担う人づくり支援調査の報告を行いたいと思います。

先ず、当太田地区の概要ですけれども、本州の最北端にあるのが、青森県です。その青森県の南側、太平洋側に位置しているのが、岩手県です。岩手県のほぼ真ん中にあるのが、我々が住む花巻市です。その中でも、花巻市の西に位置しているのが、高村山荘、清水寺、スポーツキャンプ村がございます。高村山荘は、詩人であり、彫刻家である高村光太郎先生が 7 年ほど独居生活をしたといわれている山荘が現存して残されています。それからスポーツキャンプ村は、日韓共同サッカーのワールドカップを行ったベースキャンプ地として、実際に名乗りを上げました。

次に地域の産業ですが、稲作を主体とした農村地帯です。1 月末の花巻市の人口は、103,678 人です。世帯が 35,824 世帯です。そのうち、太田は、人口が 2,770 人で、698 世帯です。人口は横ばい状態ですけれども、高齢化率は年々増加している現状です。昨年高校野球で活躍し、今年西武野球球団に入団しました菊池雄星君の出身地ということで、昨年は色々騒がれました。

次に、この補助事業の申請にいたる経過をご説明したいと思います。先ず、平成 18 年 1 月 1 日に 1 市 3 町が合併しました。初代市長となった大石が、「小さな市役所」構想というものを掲げまして、花巻市市内を学区単位に分けられている 27 ヶ所に振興センターを設置しました。振興センター毎に、住民組織である「コミュニティ会議」を設置しました。コミュニティ会議で、太田の場合は太田地区振興会という名称です。

コミュニティ会議毎に地域ビジョンを策定することを市は奨励しました。それで、当太田地区では、21 年度中に地域ビジョンを策定するというので、一昨年 12 月頃から準備を進めていました。準備を進めている過程で、人材育成や人づくり、それから施設整備やハード整備などを行う必要性がある。必要性というよりも、太田の地域振興を行って行く上では、欠かせない要素であろうということです。その時に、国土交通省の補助事業があるということを知りまして、早手を上げましたら、採択をしていただいたというところです。

国土交通省に事業申請ということで、二つの基本構想を掲げました。一つは、グリーンツーリズムの推進による交流人口の拡大です。もう一つは、地場産品を利用した加工食品等の開発販売です。

グリーンツーリズムですが、農業体験のプログラムを作って、グリーンツーリズムに参加していくことです。加えて古民家を移築した村の家を活用することです。それからアドバイザーの養成ということで、グリーンツーリズムを推進する上で、知識等を勉強して、アドバイザーを、アドバイスでき

るような方を、養成していこうと考えています。

地場産品の方でございますが、今太田地区内には県道が一本通っておりますが、そのバイパスが平成26年に開通することになっております。今ある県道沿いに、産直施設がありますが、バイパスが開通することにより、交通量が減ってくるということが予想されます。

新しく開通するバイパスの方に食堂を含めた産直施設を設置したいと思っております。

当初は道の駅構想という事で、関係機関に要望説明をしましたが、道の駅はやはり難しいと思い、一つランクを落として運転手の休憩施設となるような建物を何とか建築したいと考えています。当然、地元だけでは難しいです。関係行政機関等々に要請しながら、我々の出来る部分について、頑張っていこうということでございます。

それから、6次産業化の産業推進による農家収入の確保ということですが、6次産業化ということは、通常であれば、1次産業、2次産業、3次産業があります。これらを足せば6になります。つまり、生産から加工、最後の販売まで全て地元で行って効率の良い収入を上げていこうかと考えています。

次に、村の家についてご紹介します。これは、我々の地区内にあります。築100年以上経っている建物が、空き家となったため、これを譲り受けまして、太田地区の中心地に持って来て移築しました。移築してからは、大体20年経っています。建物の内部は、昔存在した状況を再現しました。同じ敷地内には工芸館を建てまして、裂き織り教室や七宝焼き教室など生涯学習の場に使っています。

先ほどバイパスの話をしました。産直施設を先ほど申しました休憩施設と絡めて、新しいバイパスの方に移築したいと考え、様々な方面に要望を進めています。

以上を踏まえて、今年度実施した人づくり事業の具体的な取り組みは、一つは車座研修会です。10月20日に、集落の代表者を集めまして研修会を実施しました。85名の参加がありました。それから各集会で研修会です。集落単位で公民館があり、この公民館を会場にしまして地区内10ヶ所で、10月28日から11月13日までの間に開催しております。延べ226名が参加しました。

加えて、地域づくり講演会を12月20日に開催しまして、およそ200名の参加者をいただきました。また、先進地の研修視察ということで、11月18日に開催して、31名の参加をいただきました。

その他に、ビジョン策定委員会というものがあまして、太田地域のビジョン作りを積極的に行っているところです。6つの専門部を設けまして、専門部毎にビジョンを検討して、今最終的にまとめている段階です。

以上、今年度の事業の取り組みにつきましては、人づくりに関したソフト部分でございます。ハード的なものは何も行っておりません。

今後の展望と課題ですが、一番の懸案事項はビジョン策定でございます。大体1年ぐらをかけて、最終段階に来ております。明日役員会がありまして、出来た素案を役員会に示す段階まで来ております。役員会の承認をいただいた上で、実際地区民に周知する形で太田の地域づくりの将来像を示したいと思っております。

2番目の地域活性化のための施設整備ですが、太田地区を活性化するためには、人づくりはもちろんですけれども、どうしても施設設備が必要となってきます。先ほどご紹介しました村の家ですが、花巻市の所有となっております。私どもで手をかけることは出来ません。ビジョンで活用の将来像を作り、ビジョンを通して、こういう形で作りたいので、改築を行おうと考えています。現在村の家は、集会場的なことではしか使えません。これを宿泊できるような施設、あるいは農家レストランというかたちで飲食物を提供できるような施設にしていきたいと考えています。

産直施設の整備ですが、新しいバイパスが出来ますので、この際バイパス沿いに移築するように、そして食堂等も併せながら、地元で取れたものを加工して食材として提供したいと考えています。

3つ目にグリーンツーリズムの発展拡大についてです。村の家とも関係することですが、需要そのものはありますので、受け入れ体制として施設を整えて行きたいと考えています。人材も含めてです。

最後に、若手リーダーの育成です。現状で、活躍していただいている方々を見ますと、高齢化しています。今後の太田を担えるような若手を育てていきたいと考えています。

以上で発表を終わりたいと思います。

(細野)

はい。ありがとうございました。会場の皆様からどうぞ、色々な意見なり、質問なりをお願いしたいと思います。この会は、皆様からご質問をいただきますと、今発表していただいた方が、こういう視点があるのかと、こういう疑問があるのかということで、学習となりますので、どうぞ遠慮なく、意見ををお願いいたします。

(黒滝村中井)

黒滝村の中井と申します。グリーンツーリズムについてですが、具体的にどの様なプログラム、メニューを、あるいはどの様な組織でグリーンツーリズムを行っているのかを、教えていただきたいと思います。

(花巻市戸来)

今は、花巻市と農協が主体となって、修学旅行を引き受けています。申し込みが殺到しまして、受け入れ農家が少なく、担当者が受け入れ農家を集めているところです。

(細野)

具体的な数字は、どれぐらいですか。年に修学旅行がどれだけ来ていて、受け入れ農家がどれぐらいでしょうか。

(花巻市戸来)

徐々に増えておりまして、22年度は受け入れ人数が500人、そしてプログラムは農家にお任せしています。入村式は農協で行いまして、その後は受け入れ農家とその子どもたちをお迎えします。農家に着いてからの農作業は、農家によって色々な、例えば施設によっては田植えがあったり、太田では減反があり、休んでいる田んぼにりんごを植えたりしていきまして、りんごの花摘みから始まり、収穫の時もグリーンツーリズムで修学旅行生が入っていますので、収穫させたりします。また小学校の日帰りグリーンツーリズムがございまして、バス一台来てりんごを収穫してお手伝いをして帰るというものもあります。

(黒滝村中井)

宿泊がメインですか。

(花巻市戸来)

農家への民泊体験です。高校生や中学生は、大体4人1組です。

(黒滝村中井)

わかりました。ありがとうございます。

(細野)

一泊いくらですか。

(花巻市戸来)

一泊一人 8,000 円です。それから、例えば子どもたちでは農業体験だけでは、すごく盛り上がる子どももいますが、飽きる子どももいます。そうすると、花巻は宮沢賢治の古里ですので展示会館に連れて行ったり、また高村光太郎の山荘に連れて行ったり、スポーツキャンプ村で一緒にサッカーをする、というプログラムを取り入れていますので、本当に農業をするのは午前 2 時間、午後 2 時間程度です。

(細野)

はい。ありがとうございます。国土交通省の方は何かありますか。

(国土交通省古澤課長補佐)

グリーンツーリズムの拡大発展ですとか、村の家を改築したり、直産施設を整備したりですとか、色々考えているということですが、これに対する情報発信ですね。私も岩手県に勤務していたことがありましたので、大体位置関係はわかりますが、どの様に人を呼ぶのかという事に関して、どういう方法を考えているのか。

私のイメージとしては、恐らく、行政のホームページに載せるということが考えられますが、正直役に立たないだろうなと思います。私が一番強いと思っていますのは、一般の方々、特に農協でしたら、若手の方がおりますよね。今で言えば、ブログのようなものに入れるとか。そういうようなことで、お金をかけずに関係者に協力をしていただいているのかといった点についてはどうでしょうか。

(花巻市戸来)

今、積極的に取り組んでいるのは旅行会社です。沢山の申し込みがあります。

それで、一度来た学校は、何年も続けて来ます。

受け入れ農家も、それぞれ事情があり、毎年同じではなく、例えば、介護が入ってきたなどで、今年はダメかなという人も出てきます。本当に去年までの人数を受け入れるかどうかは、疑問ですけども、農家を沢山募って、沢山受け入れて行きたいと思います。

(国土交通省古澤課長補佐)

今日発表する地域の方々も、それぞれの特徴や特産物、PR したいことがあると思いますが、旅行会社を使うということだけではなくて、住民の方々を巻き込んでいくということも、一つのやり方かなと思います。

具体例を挙げますと、私は 3 月まで小笠原に勤務しておりました。小笠原の村民はホームページを立ち上げて、色々PR しています。そういう方法をもっと考えていくといいのかなと思います。

(細野)

はい。ありがとうございました。

(細野)

続きまして、柏原市の方々宜しくお願いいたします。

(柏原市泉)

皆さんこんにちは。本日は大阪の柏原市から4人で参りました。

梶谷さんはまちづくりのメンバーでもありますし、柏原の郷土史を探る会という地元の魅力についてまちを実際に、歩いて案内されています。次に小西さんです。この度のまちづくり集会の会長ですが、小西さんは、換えボタンという高級なスーツですとかワイシャツにあるボタンなど、色々な技術を使って作っているという、地元の地場産業をされている方です。次に森本さんは、柏原市の道路整備、景観舗装の担当の職員です。最後に、事務局の私です。それでは簡単に、柏原の一年間、どういうことを行ってきたのかという事を報告させていただきます。

柏原市は大阪府ですが、奈良と大阪の間の大阪側に位置しています。山を越えたら奈良になります。ブドウの産業で、大正時代から栄えて、昭和の始めぐらいで、山梨県を抜いて日本一になりました。

また奈良と大阪を結ぶ難波宮という龍田道という道があり、柏原を通っています。昔天皇が大阪を訪れる際、通ったと言われています。それにまつわる歴史的なストーリーが沢山ある地域です。

もう一つは、ワインセラーです。ブドウ産業が非常に盛んで、ワインを造っているところが大阪には5つありますが、その中の一つが柏原にあります。今ブドウの木で一番古い木が山梨県にありますが、日本で二番目に古い木が柏原にあります。昔から、ワインなどを造っている地域です。

活動経緯ですが、大阪府橋本知事によるミュージアム構想というものがありまして、まちそのものがミュージアムだということで、大阪全体で地域特性に応じた自慢を、地域に応じた物産等を持ち寄ろうということで、その一つに柏原市も位置づけられています。

ミュージアム構想に基づいて、ハード事業も行います。道を石畳にしたり、明かりをきれいにしたりしています。太平寺地区でも行おうと、地域に関心を持つ外部の方々と一緒にまちづくりを行う必要があるという矢先、この事業の存在を知り応募した次第です。

太平寺という村ですが、中には3つの地区があり、各区長やブドウの出荷組合がありまして、それ以外にこの地域は外の方々が非常に興味を持って活動しているエリアでもあります。

例えば、智識の会や、梶谷さんの郷土史を探る会、リターナブルビンを進めている女性グループ、花をいっぱいにしていこうとするグループ、そういうグループがあります。また、JA、ワインセラー、若しくはブドウを作っている農家の方々、といったメンバーで現在進めています。

先ずそういう方々で9月にどういうまちづくりを進めていこうか、今どういう課題があるのか、どういことを進めていけばいいのかという話を始めました。有志メンバーで9月に話し合い、様々なメンバーを募って、11月にまちづくり集会を始めました。このメンバーは30人ぐらいで進めています。

まち歩きワークショップということで、地区内を歩いて色々な課題を再認識したり、ワインのお店を見学したりしました。

その後先進事例という事で、東かがわ市引田町というところが、柏原と非常に似ているということで、そこを事例視察に行きました。最終的にはこういう方向性で行こうということを1月に決めて、2月にフォーラムを開きました。地域の方にも回覧で回して、参加していただき、このまちづくりのお披露目を行いました。同時に他市町村の方にも来ていただいて、フォーラムを行いました。

6団体ありますが立場が違いますので、地域の立場や若しくはブドウ産業の立場、若しくは歴史の

立場、様々な立場から、こういうものが良いという意見と、こういうことが課題ということを出し合いました。

それで、集会を設立しまして、30人ぐらいで行い、色々な進め方を皆で勉強している状況です。まち歩きワークショップという事で、今日来られている榊谷さんと他のメンバーが色々なまちの魅力について詳しくお話をされています。例えばブドウ御殿と呼ばれるような非常にすばらしい町並みが残っているということなど、町並みに詳しい方にお話していただきました。そして、ブドウのことはブドウに詳しい方がお話していただくということです。地域の神社のことは、地域の方からこういう祭りがありますという話があります。様々な得意分野を含めて、皆でこんなことは知らなかったということを感じました。

その後、資源課題マップを作成しようということで、マップを作ったと同時に、どの様なことをこれから行わなければならないのかという話も一緒にしました。

東かがわ市と似ているところは、東かがわ市も10年前はまちづくりについて何もしていない地域でした。ですが、江戸時代から製法を守っている醤油蔵あり、その蔵が頑張ってまちを変えて行き、今は様々な展開になっているということです。庄屋さんのうちを地域の観光、コミュニティ拠点としている事例です。

どういう思いで活動したかという話を醤油蔵で聞きました。まちの至るところで、地域のお母さんが住宅で空いている物件を借りて、自分のお店を開いたりしています。自分のギャラリーになっていたりしています。そういうことで、外からのお客様をドンドン受け入れようと、地域全体でもてなそうとしています。

そこで皆さんのモチベーションも色々お聞きしました。やはり、基本は地域で生きていくのだという、子どもから孫の世代まで生きていくのだということを思うときに、地場産業や、住むだけではなく仕事が出来ることが大切で、そこで飯を食えなければ、いくらきれいごとを並べても次の世代は戻ってこないという当たり前のことを実感しました。

儲ける為にまちづくりを行うと批判を浴びてしまいますが、東かがわ市でも同じ批判を浴びながら、醤油蔵の女将さんは頑張っていました。非常に参考になるようなご意見をいただきました。

その他、興味を持ったことは、外からそういう面白いまちだとわかると、移住者が出てくるということです。移住者が何人かいまして、その移住者がまた面白いプロジェクトを行って、地元の人と色々な反応をして、まちの魅力を発信しているということで非常に参考になりました。

そして、太平寺のまちづくりの方向性について議論をしました。

歴史資源を活用していこうとか、担い手がおらず宅地化しているブドウ畑を何とか保全して行こうとか、ブドウと地域産業を振興していこうとか、新しい食文化を作っていこうと。そして来訪者を、もてなす受け皿整備、基本的なトイレや、拠点施設のようなものですか、皆のハートの部分もあります。一番大切な地域のコミュニティを再生していこうということで、色々なところを皆で作ってあげたら良いなという話をしています。

具体的には、産直物の販売や案内や休憩所といった色々な扱いができる、拠点施設が欲しい。訪問者を受け入れるような引田のような温かいまちが良い。子育てが出来なければならず、地域ぐるみで行っていききたいといった話や、歩いて楽しいまちにしたい、様々な地域資源をPRしていきたい。

課題でもありますが、地域の状況は非常に深刻で、このままでは子どもが戻って来ないまちになりかねない。今動かなければいつ動くのだと、太平寺地区に住んでいない人もこの集会にたくさん入ってくれています。

やはり地域は地域で強固なコミュニティがあります。無責任な発言をすることは受け入れられない。

一方、外の方は地域の魅力を外の目から見ているので、地元の人よりも認識しているということもあります。外からの視点や力などを受け入れて行うことが必要ではないかという意見もありました。

最後に、儲からないと次につながらない。こういう活動は継続して活動していかなければなりません。地域を次の世代、孫の世代に継いでいかなければならない。継続して引き継いでいくには、継続できる収入が確保されなければならないという話をしました。

今後の展開イメージは、アイディア段階ですので、これだという決定はありません。このぐらいの柱を立てて、実際に活動していければという議論をしています。

それで、フォーラムを2月21日に開催しました。フォーラムには、午前の部と午後の部がありまして、午前の部は体験型見学会ということで、2時間ほど、フォーラムに来られたお客様に地域を案内しようと、梶谷さんと歴史の専門家にも来ていただいて、もちろんワインについても紹介していただき、非常に多面的な解説をしていただきました。参加者は見学会は30人ほど来られ、ご案内することが出来ました。フォーラムには100人ぐらい来られました。

フォーラムでの狙いは、区長さんから全ての地域の方に声を掛けていただいて、このような人によってまちづくりが進んでいる、という意識を共有したいということが一番の目的です。登壇者が8人に自らの思いを語っていただきました。市長にも来ていただいて、色々な話をさせていただきました。

アンケートを見ると、こんな人がいるのかと驚いたことが大きかったです。

地元ではブドウ産業は衰退産業であると認識されていて、次の世代が中々担ってくれないことで、自分が止めるときにはその仕事を止めて、ブドウ畑を売る若しくは宅地になってしまいます。しかしブドウ園の若い園主がここにおられて、ブドウを40種類ほど育てていますが、新しい観光農園がどういったものであるか、ブドウ産業をどうやったら継続して運営できるのか、といった話がありました。ブドウ産業にも新しい未来があるという発見があったという意見がありました。

最後に今年度の活動を振り返ってですが、参加者の意識がどのように変化したかと言いますと、地元の方は当たり前なのが、外から見るとこんなに資源の溢れた地域なのかと再認識したことです。橋本知事にも大絶賛していただきました。これは外の目から見て良かったということがあげられ、外部の応援団がこれだけいるということが分かりました。

まちづくりの進め方について、最初はまちづくりをそもそもどういう風に進めたら良いか分からなかったのですが、段々分かるようになって来ました。また、ブドウ産業にも意欲的に取り組んでいる人がいることがわかりました。

担い手に関する課題としては、地域の自治組織、区とどうやって共演していくのが課題です。跡継ぎのいない年配者と地域を担う若手が何人かいますが、感覚のギャップがまだあります。地場産業を担う若手が、将来的に飯を食える仕組み、子ども孫に引き継げるような地域にしていくことが、今の課題です。

今後の展開としては、まちづくり協議会という地域の集会という任意的な組織ですが、今後地域と市とがタッグを組んで、協議会を作っていこうということ、来年度早々に予定しています。まちの将来像のようなものを作って行き、具体的な事業等を来年度に皆でいくつか行っていこうということも一つの考え方かなと思います。

市の方で企画しているハード整備事業ですとか、地元でも交流過程や地場産業をどうやって活性化しようかといった話ですとか、来客者が魅力を感じるような受け皿づくりが必要ではないかという状況です。

(細野)

ありがとうございました。花巻さんどうでしょうか。

(花巻市佐々木)

一番地域の課題は、農村地域では非常に担い手不足という現状があります。色々な関係機関、国は国で、県は県で、市は市で、それなりの対策を講じている訳ですが、前には進んでいるが、効果が現れない。特に、花巻で一番の課題は農家の後継ぎに嫁が来ないことです。結婚をしない男性の方がたくさんいます。つまりこうした状況が農業を衰退していく形でもあるので、我々の地域では今課題となっています。

柏原市さんでは、どうなっているのでしょうか。もしこういう課題に対して、こういう方法がある、対策があれば、お聞きしたいです。

(細野)

同じ様な悩みを、そちらも持っているのですね。どういう工夫をされているか。

(柏原市森本)

担い手ですが、特に太平寺地区ではブドウ産業に担い手がいないということを常々聞いております。私は行政側ですが、市には産業振興課がありまして、そこでは太平寺地区だけではなく、柏原市のほかの地区でもブドウを生業にしているところがあります。全体を見て、担い手がいないということで、産業振興課が平成 21 年度に都心部の方を対象に担い手の養成塾のようなものを立ち上げました。都心部を対象に募集をしております。そこで、30 人の募集に 30 人の応募が来ました。他地区の方でも、行ってみたいという方がかなりおられます。それで、平成 21 年度に太平寺地区でも行ってまして、引き続き 22、23 年度も行っていこうとしています。1 年間ブドウの栽培を 1 から 10 まで教えた、そうすれば担い手となるかということ、中々担い手とまでなりません。しかし、これが担い手の出発点でもあろうかと考えています。

更に、今年度活動を振り返って、地場産業の若手が飯を食える取り組みということで、実際にブドウ作りを行っている私より若い方がおります。若い方同士で行いたいという話もありました。もっと多くの畑を貸して欲しい、そういう仕組みづくりをして欲しいという意見もありましたので、そういうことも取り入れて考えていかなければならないと考えています。

(細野)

国土交通省さんからどうぞ。

(国土交通省古澤課長補佐)

基本的な問題意識を踏まえた上で、具体的な形としてフォーラムを行っていることは良いことかと思えます。

ブドウから作られる飲み物、食べ物というのは何品ぐらいを考えていますか。

(柏原市森本)

ジュースとワインです。

(国土交通省古澤課長補佐)

なぜこういうことを聞いたかと言いますと、23 ページでお食事のメニューについて言及されていますが、ワインが造れるのであれば、例えばお酢みたいなものも造れるのかなと思ったからです。

(細野)

はい。ありがとうございます。ワインビネガーみたいな話ですね。一つアイデアをいただきました。

(黒滝村北村)

こうした地域協議会を立ち上げられるということで、市から協力をいただいているかと思いますが、補助や助成などソフト面ではどのように考えておられますか。

(柏原市森本)

今は、協議会が出来たところで、ここに何か助成や補助はまだ何も考えていません。ただ今後、今年 21 年度にまちづくり集会からまちづくり協議会になり、ここで終わりということではなくて、協議会を継続していく、まちづくりを継続していくことで、コーディネーターも必要であろうと思います。

コーディネーターを設けて、このコーディネーターにこの協議会を運営していただく。そして、コーディネーターの費用について市が補助していく、そのコーディネーターと契約をしていくという形をとりたいと考えています。

(細野)

引き続き、沖縄県やんばる 3 村さん、お願いします。

(やんばる 3 村大山)

こんにちは。私は、大宜味村のおおぎみ・まるごとツーリズム協議会事務局を行っています、大山章と申します。隣は、東村担当の観光推進協議会の事務局を行っている、比嘉茂正です。宜しくお願い致します。

今回、地域再生を担う人づくりということで応募させていただきました。やんばる 3 村としましては、滞在型周遊観光と協力体制の構築という取り組みをさせていただきました。

沖縄には観光客が約 600 万人、沖縄美ら海水族館があり、そこに 300 万人利用者がおります。水族館のある名護の奥に、国頭村、大宜味村、東村という 3 村があります。観光客を計算しますと約 17 万人が来ていますが、もう少し努力することで、周遊型の観光が出来るのではないかとということで、取り組んでおります。

やんばる北部に位置して、生物多様性が高く、世界的にも重要な地域として有名なところですが、大部分が山です。最近では、環境省が国立公園化に向けた取り組みなどを行っています。国頭村や東村がツーリズムを立ち上げている中で、大宜味村は長寿の里と言われていますが、隣村のツーリズムと連携が取れていませんでした。しかし、2 年前から、東村や国頭村が大宜味村に 3 村で取り組まないかという中で、協議会が発足し、現在に至りました。

3 村も、全国の集落と同様に、少子高齢化や人口の減少に直面しています。人口では、国頭村が 5,000 人、大宜味村が 3,000 人、東村が 2,000 人です。

3 村で新しい取り組みを行っている中で、中々システムが構築できないような状況となっています。

やんばる3村の実施目的がありますが、3村で問題を色々取り上げながら、共通の問題に取り組んで行こうとしています。

修学旅行生の受け入れを東村が行っていきまして、10年前から取り組んで、現在年間3,500人です。それに関しても、一部の学校によっては受け入れない状況がありました。どうにか克服しようということで、隣の大宜味村と国頭村が協力することとなり、民泊やグリーンツーリズムの勉強会などを行いました。

その他に、内部的な勉強会も含めて、外部的な取り組みをPRしていくということで、沖縄県が主催するイベントの花と食のフェスティバルに参加して、3村で色々なPRを行いました。

その他、環境省がやんばるの動植物を重要視している中で、地元の人が地元の大切さを分かっていただけないということで、3村で連携した勉強会なども実施しています。やんばるの生物の中で、国立天然記念物のヤンバルテナゴコガネ、ヤンバルクイナ、ノグチゲラがいます。塩屋のウングミという重要無形文化財もあります。

活動組織図ですが、国頭村ではくのがみ村交流推進協議会、大宜味村ではおおぎみ・まるごとツーリズム地域協議会、東村は東村観光推進協会という3つの組織で、やんばる交流推進連絡協議会を設立しました。その他にも、環境省がバックアップしているやんばる3村持続可能な地域づくり応援講座という事業があります。地域の問題や課題を挙げながら、取り組みをしようではないかと今年も来年も活動、計画を行っています。

活動の流れですが、昨年4月にこの協議会を設立しまして、昨年は組織体制の取り組み、今年度は協力体制・協力活動の強化を行いました。実践活動においては、昨年から活動している中で、3村で宿泊型修学旅行生の受け入れを、東村が色々取り組んでいます。民泊の中でも農業体験民泊というかたちで、実際に大宜味村や国頭村で農業体験が出来るような修学旅行生を、来年には約5,800名を受け入れるよう呼び込みを行っています。次年も需要が見込まれるという形ではありますが、需要に対して内部的な勉強会、民泊をされる農家さんへの教え込みを連絡協議会が率先して行わなければなりません。内部的なPRと外部的なPRも含めて、色々取り組んでいます。

環境省による国立公園化に向けた勉強会という形で関連事業がありますが、東村ではカヌー体験、大宜味村ではター滝、国頭村では与那演習林を使ったネイチャーゲーム、森を学ぶといったことを実施しています。今年度では以上の流れで行っていますが、やんばる3村においては持続可能な地域づくりという形で、あまり無理をせず、地域の取り組みを行っています。あまり無理をすると、関わってくる人が疲れてきますので、それが無いような形の取り組みを行おうと企画委員会などを作りながら、徐々に地域の人たちが参加できるような形を考えています。その評価検証ということで、3月に行い、次年度に向けて色々な取り組みを行おうではないかと考えています。

一昨年から協議会を立ち上げまして、旅行エージェントや学校にPRを行いました。今年の7月1日に、東村は10年前から色々活動されていますが、大宜味村としては大阪市の大東中学校が来てくれて、3村で約3,500名の受け入れ実績を上げました。受け入れノウハウは、東村が入村式や農家への注意といったことを実践していただいて、大宜味村の人たちが間近で勉強、体験をしました。一農家約4、5人を受け入れて、農家体験、沖縄食を含めて農家さんが普段食べている食事、またシーサーづくりなど、事故がないような形で、取り組みました。

安全管理を含めて事故が起きたときにはどのように対処するのかというマニュアルがありますが、そういう迅速な形を取れるような組織作りを含めて、実践しております。

村外にPRが出来ていない中で、沖縄県が主催する「花と食のフェスティバル」に約10万人の来場者があるということで、そのフェスティバルに参加しました。一ブースですけれども、そこで3村が

作りましたパネルを招いて、我々が行っている活動の内容や、特産物である加工食品、大宜味村であればシークワサーが有名です。そうしたものを使って、無料で配布して、3村色々な人と触れ合うような交流の場がありますという内容を説明して、PRをさせていただきました。

地域資源として金・物・人を持って来ましようということですが、地域の方が地域のことを中々知りません。以前では、センターなどを使って、講師を呼んでやんばるの素晴らしさをお話しされますが、色々重なり、講演疲れをしているところもありました。

違う形の勉強会が出来るのではないかとということで、フィールドを使って、やんばるの地域の人がやんばるの地域資源を学ぼうという形を行ったところ、各村からガイドの方を30名ぐらい招き、各村で行ったところ、かなり好評でした。

ネイチャーゲームを行ったり、生物学者から川の生物の説明を行ったり、沢を登って滝を目標として歩くという活動をさせていただきました。

その他にも、この時期は人が少なかったですが、夏場は人が多いので、ごみが多かったり、違法駐車が多かったりします。良いところもあれば、悪いところもあります。それらを踏まえて、実証検分を行ってきました。やんばるの地域をどうかしないといけないという勉強会をしました。

得られた成果としては、3村色々な取り組みを行って、地域に対して真剣に取り組んでいますが、参加されている方には熱い方がおられまして、問題課題を挙げ、対策を行っている中で、進行しています。3村の活動者が増加しています。民泊においても、ガイドにおいても増加しています。またやんばる3村においても理解者が増えました。運営委員会がありますが、率先して行いたいという人たちもいますので、参加意識を持って、この委員会に参加していただくような形をとっています。

その後、やんばる村外においても、沖縄には観光を中心としたPR団体、沖縄コンベンションセンターというものがあります。その方々からPR活動の方法をご指導いただいております。そうした方々にも参加していただければ、もっと面白くなるのではないかと考えています。

残された課題は、地域窓口、受け入れ体制を整備しなければなりません。現在の協議会がボランティアのような形をとっていますので、独立した事務局運営が出来ればと考えています。特産品など、観光客からお金が落ちる仕組みを作らなければならないと考えています。次に、大口修学旅行生の受け入れ、これをもう少し10,000人、20,000人と拡大していければと考えています。その他、地域リーダーの発掘がされていません。

今後の取り組みにおいては、地域資源のスキルアップがあります。県内外に向けたPR活動、持続可能な地域づくりの勉強会、3村協力した修学旅行の受け入れという形で、来年から活動しようかと計画しています。

沖縄やんばる3村が協力して、滞在型周遊型観光による持続可能な地域づくりを今後も目指して行きたいと思います。

(細野)

はい。ありがとうございます。今170,000人来ているわけですね。今度は300,000人が目標となりますか。何か質問はありますか。

(柏原市榎谷)

私は、市内の史跡をめぐるガイドを行っています。柏原市では、2年で3人のガイドが育ちました。太平寺地区も歴史資源が多いので、まちづくりにも参加させていただいています。

ところが、市の3分の2は山間部となっています。今後、出来れば、森林インストラクターといっ

た森のガイドを行おうかと考えています。3分の2の森林をどうすればいいか、もっと活かしていかなければと考えています。そして森のガイドを育てていこうと考えています。

沖縄のやんばるということでお聞きしますが、我々はやんばるの森は手付かずの森であるというイメージを持っています。それで、手付かずの森の中へ我々が入っていけるのかということと、観光化されてしまうと森が壊れてしまいますので、森の中のコース設定、ガイドを育てる上でのご苦労などはありますでしょうか。

(やんばる 3村比嘉)

やんばるの森は手付かずというところもありますが、きちんとルールがあります。3村の話ではありませんが、東村では日本で2番目に立ち上げたエコツーリズム協会があります。森に入る際は、しっかりとルートを確認していきます。ただ、入る場所、入ってはいけない場所を決めています。足の骨を折ってしまったときなど安全管理を確保し、消防署との連携もとっています。こうした形で森を楽しむということをしています。

ガイドについては、今平均年齢が27~28歳です。層としては、20代から50代までおります。育成については、好きでなければ出来ないという面があります。この辺が中々難しい面があります。森が好きなのか、人間が好きなのかということから始めないと育たないと考えています。しゃべることもガイドの一つですので、人間が好きでないとガイドは務まりません。

東村では、現状30名のガイドがおります。9割が地元の人間です。但し、大部分は一度村外に出ています。何もなくて小学校、中学校同じところにいまして、何も変化のないところで、生活をしていましたので、一端外に出ているガイドが多いです。それが戻ってきて、自分たちの地元の素晴らしさに改めて気付いたのが、ガイドをはじめたきっかけでもあります。先ずガイドになるのではなくて、一度地元を離れるといった指導方法もあると思います。何もなくてこそいいものがあるということだと思います。

ガイドが30名となるまで、10年かかりました。また収入がないとダメですね。10年前は収入が確保できるかどうか分かりませんでした。現在では収入も確保できるようになってきたので、若手が戻ってきて、ガイドを目指すようになりました。

(細野)

それでは、国土交通省さんどうぞ。

(国土交通省古澤課長補佐)

ガイドの話が出ましたが、私は昨年まで小笠原にいましたが、森に入る際も自主ルールのようなものがあり、入り口はここ、出口はここ、ルートはここ、それ以外は踏み込んではいけないというものです。これは植生維持の観点と事故防止の観点からです。自然環境の維持とエコツーリズムとのせめぎ合いの中から、ルートを決める。

ガイドさんがガイドに熱を入れる余り、観光客を夕方まで引きずり回して、逆に宿泊のほうから苦情が来るといったことはありませんでしたか。

(やんばる 3村比嘉)

熱が入ることもあります。ただ、ガイドの前にお客さんに色々聞いて、プログラムが終わってから何かないか確認します。なければ、多少ゆっくりしましよと、お客さんのペースに合わせるという

形をとります。ということで、宿泊先からクレームが来たということはまだ一度もありません。

(細野)

はい、ありがとうございます。黍嶋先生に講評をいただきたいと思います。

(黍嶋)

皆さんの共通しているところは、同じだと思いますが、展開の仕方が異なると思います。

人が表に出てくるところです。仕組みを作っていくことかなと思います。

気になった点は、事業前と後で変わったところはどこかということと、住民の人たちがどのように変化したのかという2点をお聞きしたいと思います。

(やんばる 3村比嘉)

3村の意識が高すぎて中々混ざり合うことがありませんでした。3村で何か行ってみようと言った時に、ちょうどこの事業を知り、申請しました。役員を含めて、皆で話し合う良い機会となりました。

もう一つは、農家さんが近隣の村が何を行っているかわかりませんでしたが、3村が一緒になって活動していこうという意識付けになりました。互いに隣の村に宿泊してみたり、勉強会をしたりといったことを行いました。それで、意識の改革が出来たと思います。

(細野)

これで前半を終わりたいと思います。ありがとうございました。

報告発表 後半:

「島根県雲南市」、「兵庫県丹波市・篠山市」 「奈良県黒滝村」、「岡山県笠岡市」

(中村)

ここからは黍島先生お願いいたします。

(黍島)

トップバッターは、島根県の雲南市です。お願いいたします。

(雲南市高木)

失礼します。島根県雲南市鉄の歴史村から参りました、高木と申します。この地域再生協議会の事務局を担当させていただいております。隣は島根県庁の地域振興部地域政策課の川合葉子さんです。どうぞ宜しくお願いいたします。

まず、事業に取り組む背景について、説明をさせていただこうと思います。

鉄の歴史再生協議会と申しますのは、鉄の歴史村という町づくり、村づくりをこれまで進めてくる中で、さまざまな財団法人、文化事業にあう財団法人ですとか、産業にあう第3セクター、それから町づくり会社、住民の活動を行うNPO法人、そして農業法人、地域組織という住民の組織などが集まって作られた協議会です。鉄の歴史村のこれまでの取り組みということを前置きとして簡単にお話をさせていただきます。

島根県雲南市吉田町というところは旧吉田村です。平成16年に合併するまでは、たたら製鉄という製鉄業、もののけ姫をイメージしていただければよくわかるかと思うのですが、その歴史と文化、そういったものを基にした村づくりを進めてきたところです。

まず、菅谷たたらという、日本で唯一製鉄炉が残っている文化遺産を保存・公開・復元してきたということがありますし、秘伝と言われたその技術を公開する場所として博物館が開館しています。ここには県国指定・県指定の文化財等々が数百点ほど公開されています。

それから、未来に対してこれから鉄の歴史村の知識・情報、それからさまざまな技術といったものを、集積していこうということで、鉄の未来科学館といったものも整備をされていて、オープン・エア・ミュージアムということで公開されています。昭和61年にこの鉄の歴史というものを、私たちは末永く次世代に渡って、伝えていく責務があるということ「鉄の歴史村宣言」として宣言しました。

ソフト事業としては、シンポジウムを開催しております。これは毎年開催してまして、20年の実績を持つものです。各分野から第一線の先生方をお招きしまして、製鉄業のほか、建築学、生命科学、デザイン、民俗学、文化人類学、宗教学など、第一線で活躍していらっしゃる先生が、毎年いらっしゃいまして、2日間に渡ってシンポジウムを開催するということを重ねてきました。

こういった学術的な部分をもう少し発展させまして、現代の技術と、それから伝統的な秘伝と言われたたたら製鉄の技術を合わせて、現代に幻となったたたら製鉄を蘇らせようということで技術の復元、それからそこでできた玉鋼という最高級の鉄を使った小刀づくりの体験などを、この文化事業を

やっている財団法人を中心に行ってきております。

文化から、交流、それから産業に結び付けていこうということで、今度は産業面についての取り組みですが、第3セクターを昭和59年に立ち上げまして、こちらのほうにも住民の方が一口5万円ずつで、約200人の方に出資をしていただいて設立しました。卵かけご飯専用醤油の「おたまはん」というのがいち早くヒット商品となりまして、焼肉のタレですとか、農産加工品の製造・販売、そのほかバスの運行などを中心に行っております。

交流型商業、交流型産業を小さくてもいいから作ろうということで、平成16年に市町村合併する直前に、住民の有志の方が一口50万円ずつ出し合しまして、20人の方の賛同を得て、株式会社鉄の歴史村という会社を設立しています。

この会社では、ツーリズムの宿「若槻屋」の運営と、「山里かふゑ・はしまん」ということで、昔の庄屋さんのお屋敷を改修して、そこでお客様をもてなしするというサービス業を始めたところです。

これと合わせて交流型農業への試みをしようということで、有限会社「木村有機農園」という農業法人で活動を行っております。

市には、鉄産経営者の町並みが残されておりまして、商店の方が中心となり「町並み委員会」を結成されて、壁面の壁の格子との統一ですとか、自動販売機を隠したり、住民の方が中心に町並みづくりを行ってきております。

事業導入をするまで、これまでにどういった成果があったかということ、鉄の歴史村、たたら製鉄の村だということ、私たちはこういう村だという個性を持つことができたということが1つ、それからそれぞれ役割を担う組織が整ってきたということがもう1つの成果としてあります。

博物館事業ですとか、学術研究事業、シンポジウムをする財団法人、産業面では、農産加工を中心に行う第3セクター、合併直前に設立された町づくり、コミュニティービジネスというものを試みようということで、住民の方が賛同して作った株式会社鉄の歴史村、それと合わせて交流型の農業を試みてみたいということで、「木村有機農園」、交流事業を実際に行うNPO法人「まちづくりコラボレーション島根」というそれぞれの役割を担う組織を私たちは持つことができたということが、これまでの成果としてあります。

そうした中で組織、資源、個性というものを持つことができたのですけれども、今後はこれをうまく回して、地域の人たちと一緒に運営していく、そして成果を挙げていくというようなことが、求められています。

特に、この事業を導入するにあたりまして、交流活動ですとか、ものづくりといった分野で、組織を実際に動かす人、中に入って動かす人、つくりあげてきた組織が実施する活動に参加する人、みんなで実施する活動を応援する人、こうした人たちをもっと充実していく必要があるだろう、もっと地域の人たちが参加する機会を作っていくことが必要だろうということで、この地域再生を担う人づくり支援調査事業を実施させていただきました。

事業の内容ですが、まず意思の統一を図るとして幹部の方の研修を行いました。最終的に目指すところは、交流を持って産業を興し、文化という中で価値を作っていこうというのが私たちの目的だということで、確認をし合いました。

実際やっていく活動としては、実践活動の中で、人材参加を募っていこうということでOJTを重視しました。

私たちの吉田村というところは、島根県の県庁所在地の松江市から車で約1時間ちょっとかかるようなところです。一番近い都市の消費地というところが、松江市になります。

まず、松江市で、マーケットを知りたいということでイベント販売をさせていただきました。

「松江水燈炉」という1ヶ月間に渡るイベントで、そのうち3日間ほど、「鉄の歴史村広場」ということでひとつのエリアを貸しきらせていただいて、都市の人たちが、私たちが作るものにどういったものを求めているかということを知るために試験販売をやらせていただきました。

さきほどの農産加工品、2軒の和菓子屋さん、わら細工、コンフチュールドレッシング、鉄を使ったナイフ、お米、卵を売ってみようということになりました。そのイベントに向けて実際、実働となる人たちが3回ほど実行委員会を開きまして、自分の知り合いに葉書を出すなどPR活動を実施し、開催まで進めていきました。

1つの和菓子屋さんは蒸し饅頭、もう1つの和菓子屋さんは最中を販売しました。わら細工も売りました。松江市がだんだん観光地として成長してきている証拠に、東京から遊びに来たという人たちもいらっしやいました。

山のものを持っていこうということで、秋のコスモスですとか、秋の草花を持って行って、演出をして会場を飾りました。郵便局長、元市民部長、市役所の行政職員など、ものをつくらない人たちは、呼び込みを担当していただきました。

これが、マーケットを知ろうということで実施したものづくりOJTというものです。

この次にツーリズムのOJTを実施しました。実際に今度は地元で人が集まるイベント、「ごっつおさん祭り」を開催しました。

地域の特性を活かして、人が集まるイベントは何かということ話し合った結果、「食」であろうと。しかも、単においしいもの、というだけでなく、鉄を運んだ北前船ということをも一つのキーワードにして、独自性のあるイベントに仕立てていこうということで企画しました。

「ごっつおさん祭り」の実行委員会をまた開催しました。さきほどの元市民部長、副委員長に割烹料理の料理長、その他それぞれの方々が実行委員となりまして、県庁、市役所からもご参加をいただいて、開催をしたところです。この実行委員会の中で実際に、アドバイザーとして、松江のほうからこういったイベントの得意な方をお招きしまして、いろんなアドバイスを仰ぎながら、勉強をし検討を重ねていきました。

当日は、よさこい踊りで盛り上がり、パン屋さん、お蕎麦屋さん、ドーナツ屋さん、と近くの方々においでいただいたり、地元の料理人さんたち4人が協力をして、北前船の寄港地の料理、さば寿司ですとか、芋煮ですとか、外の料理を自分たちで工夫をして、作って提供したりしました。

単においしいものだけではなくて、文化性もイベントに盛り込んでいこうというのが1つの意図としてありましたので、同時開催として、北前船がつなぐ地域文化フォーラムということで、本日おいでの岡山県笠岡市の方ですとか、大阪府の堺市、福岡県の芦屋町、島根県的美保関町といったところからパネラーとしておいでいただいて、フォーラムを開催しました。

地元の主婦の方たちも参加してくださいまして、ごちそうを作るということで、何日も前から準備・検討してやっていただきました。

事業の成果として、ものづくりOJTとして松江で行った試験販売、ツーリズムOJTとしての「ごっつおさん祭り」で、今後はより工夫をしていこうということで、意欲が高まったということがあろうかと思えます。地域の人たちが今まで鉄の歴史村づくりというところに参加をためらっていたような人たちも、参加の機会を与えられたのではないかなと考えています。

次に、地元の同業者ですとか住民が協力して行うことで、新たな活動への試みができることを実感することができたと考えています。みんなで鉄の歴史村という看板を背負って松江をより売りに出したり、地元でイベントを開催したりということで、協力して実施するというのを1つ勉強しました。地域の資源や個性を再認識し、活かす方法が広がった。

たたら製鉄というキーワードでまちづくりを行ってきたのですが、学術的な面がかなり強く、もう少し違う層の個性の認識の仕方というのが必要であるということを知りました。北前船という鉄を運んだ交易ということでそれが少し「鉄」ということをキーワードに、地域の個性という認識の仕方が広がったのではないかなということがあります。

次に、近隣の住民の方や、市役所、県庁の方と、この事業があったことで、協力してつながりをもつことができたということも大きな成果ではないかと思います。

これからの活動ですけれども、つい先日、反省会をしまして、これからも是非やっつけようということになりました。来年は、1月前からではなくて、3ヶ月ぐらい前から準備をしようということの話が盛り上がりまして、参加の機会を作っていきたい。

さらに、ツーリズムの活動をもう少し日常的なレベルまで落としこんでいって、ボランティアガイドですとか、飲食のサービスですとか、そういった受け入れ体制を充実させていきたい。

次に地域の名物がやっぱり何かほしいということで、名物づくりを行っていきたい。

最後に、組織の活動の活性化、産業作り、文化について交流活動ということで、組織そのものの活動を活性化していかなければいけないし、参加する人たちの応援体制というのも幅広く持っていけないといけないということを知っています。

全体的な流れはこういったところです。

県庁の川合さんのほうから今回イベントに参加していただきましたので、その感想なり、これからの希望なりということをお話ししていただきたいと思っています。

(雲南市川合)

失礼します。島根県庁の川合と申します。宜しくお願いします。

私は観光 OJT というところの「ごっつおさん祭り」のイベントのお手伝いですとか、実行委員会、反省会のところに参加させてもらったのみで、今までの地域づくりの流れなどについてはよく承知していないのが実態です。

吉田村は今まで、文化的な側面からの取り組みということで、何十年もカリスマ的な存在の方がいらっしゃるしまして、その方を中心に地域づくりに取り組んできました。その流れもあって、今までは50～60代の方を中心とした地域の取り組みだったので、今回の地域再生、担い手育成事業を通じて、その次の世代、30～40代の若い人たちがやっつけようという機運が盛り上がってきたように思います。

また、今まで表舞台に立つことがなかった女性の方が独自の取り組みをされたり、今までは連携をしていなかった地元の料理人の方たちが、横のつながりで連携してくる、という新しい地域づくりの取り組みが生まれてきたということが、今回の事業の成果ではなかったかと思っています。

地元の人の意識の面では、私は松江に職場があるので、どちらかというお客さんの立場で町を見ています。しかし、夜のおだやかな明かりの中、ゆるやかにつづく坂の両側に古い町並みが続いていて、とても素敵な町なのです。それを地元の方にお話すると、「自分たちは今までずっと住んでいるからこれは当たり前だと思っている。良さがあまりわからない。」と言われます。もっと自分たちの町に自信を持っていいのではないかと、と外の目から見ると感じたところでした。

この事業を通じて、来年度以降もこのような取り組みをますます活性化させていく、ということに反省会でも意思統一がされたところですので、今後も期待しているところです。

(黍嶋)

はい。ありがとうございました。

今、発表を聞いて、みなさん哑然とされたところもあったかもしれません。さきほど川合さんのほうからカリスマ的な人が地域を引っ張ってきたというお話がありましたが、私は世代交代も進めて行っていただきたいと思います。そういう意味でも、来年度以降も是非、引き続きやっていただきたいと思います。

是非そのカリスマ的な存在の方に加え、次の新しい人を作っていくという仕掛けを考えていただきたいと思います。

岡山県の笠岡市の方、何かございませんか。

(笠岡市加藤)

岡山県笠岡市から参りました、加藤と申します。先ほどお話にありましたフォーラムに参加させていただきました。組織が非常に素晴らしかったです。さきほどお話にありましたカリスマ的な存在の方が、積極的に組織を引っ張ってこられて、それを回しておられる。日本でも類を見ないような素晴らしい組織だと私は感銘を受けました。

「ごつつあん祭り」ですが、笠岡市からも出店させていただきました。各地域からいろんな商品を出品すると同時に地域の方々のものづくり、食べるものであったり工芸品、民芸品のようなものであったり、そのようなものをたくさん吉田村の町並みの中へ溶け込ませながら、販売・交流をしていった非常に楽しいお祭りでした。

我々笠岡市も見習いたいというものばかりで皆さんも是非一度行ってみてください。素晴らしいところですよ。ありがとうございました。

(黍嶋)

高木さんいかがですか。

(雲南市高木)

カリスマという話が出ていますけれども、地域に対してかなり先を示していくリーダーというのがあります。それに対して今度は仲間たちというのがあります。「何をやっているかよくわからん」と言われることもあります。しかしながら、あれはこうだよ、と村の人に説明されたり、実際にお金を出して協力してくださったり、汗を流して協力してくださったりという方がいらっしゃいます。さらに、次の世代の人たちがこの村で末永く生きていくにはどうしたら良いかということを探している人たちがいます。そういったことで重層的にいろんな人材、地域の人たちが活動しているようなところです。

笠岡の方にも私たちは学ばせていただくことがたくさんありまして、今回北前船ということでつないでいただいたのも笠岡の方ですし、笠岡市の守屋さんにもご講演に来ていただいたりして、私たちも勉強させていただいています。これからもお互いに励ましあっていかせていただければ嬉しいと思います。

(黍嶋)

はい。ありがとうございました。では国土交通省お願いします。

(国土交通省古澤課長補佐)

地域を引っ張っていく方はカリスマ的だとか、かなり先導的だとかいう言い方がされます。それはそれで良いことなのですが、別の見方をすると、その人がネックになって先に進まないということもあろうかと思えます。特に地域のつながりが強いところ、若手がいろいろ案を出しても、そのの長がうんと言わない限り先に進まないということも地域によってはあろうかと思うのです。今後そういうところが課題になってくると思いますので、早め早めに翻訳をできる人を育てつつ、古い人と言ったら怒られますけれども、そういった人と若い人とうまく連結させるようなことが必要なのかな、と説明を聞いて思いました。

また、冒頭に別の地域でも言いましたけれども、もっと住民を巻き込んだ情報発信もやると良いのかなと思います。

鉄ということであれば、岩手の南部鉄器などもありますけど、鉄鉱石ということで鉱山の側から攻めるのか、あるいは作られた刃物というかたちで、新潟や堺などそういうところに広げていくのか、鉄を中核においても今後の広がり方はいろいろあると思いますので、とりあえずは今のことをベースに置きながら、10年後、15年後そちらのほうに広げるということもあるのかなという、印象というか感想を持っています。

(黍嶋)

ありがとうございます。細野先生、お願いいたします。

(細野)

私も同じ話だけれども、鉄を中心として産業の何か展開ってできないでしょうか。観光ばかりではなくて、そういったプランニングもあるのですか。新潟の三条も鉄で有名でしょう。そこと組むとか、あるいは岐阜の関市あたりと組むとか、いろいろネットワーク化ができると思います。

(雲南市高木)

実は今年度もう1つやっていることがあります。北前船とつながって今度は船の舟運、鉄が運ばれてきた道はどういうものかということ調査させていただく事業をやっています。その中で、鉄というものは本当に基礎産業ですので、完成品というものはなかなかないものなのですが、ただ、各地の産業にどういった貢献をしてきたか、漆産業があるにしても、伝統工芸やるにしても、鉄を使わない道具はないわけですね。出雲から出た鉄がどのようなところでどう貢献しているのか、またその交易で出雲にどういった文化がもたらされたのか、というところを今現在調査してまして、これをまたどうにかネットワークとしてつないでいけたら、ということをおもっています。

(黍嶋)

はい。ありがとうございました。

(黍嶋)

丹波市・篠山市さんお願いします。

(丹波市・篠山市森岡)

兵庫県の丹波地域から参りました篠山チルドレンズミュージアムの館長をしている森岡と申します。今日は兵庫県県民局谷口さん、篠山市太古の生き物係化石担当大路さんとお話をさせていただきます。

この事業を実施しようと思った背景は、丹波地域で国内最高水準、日本初と言われる草食恐竜の化石が市民により発見され、キャラクタのチータの商品開発など進む中、化石を地域の活性化に活かし、再生協力ツーリズム、イメージアップ、広域連携のための資源として位置づけようとしたことにあります。篠山市では小学生が総合学習の時間に肉食恐竜の歯を発見しました。哺乳類だけでなく、トカゲ、トリケラトプスの先祖の骨、カエル、恐竜の卵も発見され、学術的価値が高い資源がたくさん出てきました。

篠山層郡が両市にまたがって掘ればかなりものが出てくるといわれています。ただし、学術的な要素が先行しすぎて、地域の人が置いていかれている雰囲気もあります。市内各地に露出層があり共通資源にならないかと、いろいろな活動が始まりました。トンカチを使って石を割ったり、解説をうけたり、フィギュアを作ったりして、新たな魅力資源がでてきたというところです。

人材が必要になった経緯として、もともと丹波市と篠山市は地域づくりが活発で、100品目ぐらい民間主導でいろいろな商品が開発されてきましたが、あまり売れず、活性化もできず、行政批判が始まっているような状態です。どうも町づくりに対するプロセスが違った方向に進んでいると思われました。トータルではなく、自分だけ良ければ良い、ポケットにお金が入ればよいといった考え方で、みなさん頑張っているが、その頑張り方が古びている。そこでエリアマネジメント、地域全体をトータルでマネジメントできる人の育成、ワンランクあげる取り組みができないものかと思ひ、この事業に申し込みました。

地域再生に必要なのは人づくり、推進母体づくりということで、恐竜をきっかけとした両市にまたがる推進母体を設立しました。先週金曜日に設立総会を行いました。

市民を巻き込む参画フォーラムを1月29日に行いました。そのときに地域のアイデンティティを作るというイメージ論を先生に語ってもらい、都市部で集客して田舎に人を送り込む、若手のツーリストに講演をしていただき、鹿肉の料理、スイーツなど実際のプログラムを見てもらいました。

2月26日に「丹波恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会」で町づくりをブラッシュアップすべく、地域情報誌を発行している雑誌の編集者の鳥山さんをお招きしたところ「イメージのないところに人は来ないので、イメージを作る必要がある。消費者は論理的に物を選ばず、直感的に物を選ぶ。直感的に物を届けることも大事だ。」と言うことを学びました。

コミュニティビジネス起業としては、つばさプロジェクトの越道さんから「企業では物を1,000作って3つもあたらないので、もっと努力をしろ。」といわれました。

講座には、都市住民のニーズというよりは、地域でツアーをやっている人が聞きに来ていました。

上手くいくためのヒントは、田舎ツアーの信用は人をどう見極めるかにつきます。奈良の室生寺の里めぐりツアーに参加しましたが、廃校を利用して山の中に日本酒のギャラリーを作っているのは、時間がなくなるぐらいよくしゃべっていらっやいました。地域の資源はたくさんあります。磨き方もたくさんあります。

地域連携している学園の先生に料理教室もしてもらいました。ヒントになるように、地域の食材とスイーツで料理教室を開きました。編集者から見る丹波地域の魅力を探る「大人組」の副編集長によると、女性の視点でも地域を見てほしい。おとなが読む雑誌をつくるのがコンセプトで、都会の人は田舎の情報をほしがっているとのことでした。関西ではタウン誌が廃刊となってきていて、生き残っている雑誌が田舎、おそば(食系)の雑誌だそうです。丹波丹後ブックを7万~10万部作りましたが、

売り切れました。

この中でアウディが地域を走っています。つまりスポンサーです。お金がなくても雑誌は作れます。行政主導の恐竜化石をきっかけに 企画運営委員会に我々が入り、下からあがって企画の調整を行っています。エリアマーケティングとして両市で活性化していきましょうということを期待しています。

次なる展開として人と物が集まっている、化石を中心とする資源がある。次にどうするか。良くない事例としてお金がないと何もできないという声が上がってきています。

篠山市は合併の第一号都市で、今合併のその後ということで視察が始まろうとしている。つばきプロジェクトに入ってもらい、化石ツアー、ほたるのツアー、いなか満喫ツアーなどの現地ツアーを組んでいます。

いなかにはおいしいご飯と良い風景があるので、田舎でランチが大山で始まっています。食の開発として、若い人が鹿肉の専門店を貝原市でオープンしようとしています。「大人組 kansai」は、住民参加型の地元情報誌で、手元に残る街づくりの記録、書店に並ぶガイドブックの作成を目指しています。

本事業に参加して、講習会、人材育成の仕掛けを作りました。ツアープログラムの具体的アクションに繋げつつ、コンテンツを作る情報ツールを作ろうとしています。

(丹波市・篠山市谷口)

丹波県民局の谷口です。先週の木曜日に本を出版しました。地元の神戸新聞から丹波竜発見から町づくりにいたるまでの書き下ろしです。恐竜の話はマニアックでわかりにくいので、一般の人に理解してもらうために背景も含め 1 冊の本にまとめました。

(丹波市・篠山市大路)

篠山市役所の大路です。22 年度から保護と活用を含めた展開を図ろうとしています。財政的に厳しい中、行政としてできることが限られています。市民のパワーがないと実行に移せない、そのバックアップをしながら進めていこうと思っています。

(黍嶋)

太古の生き物係とは何をやる場所ですか。

(丹波市・篠山市大路)

1 月に新設されました。「篠山へ帰ろう住もう係り」というのが定住の係りでしたが、今は兼務で、化石の担当もしています。学術的な研究が先行しているので、住民を巻き込むために石割の係りなど作業所の開設予定です。子供が興味をそそるような展示スペースを 4 月にオープンします。

(黍嶋)

会場からご質問等はございますか。

(やんばる 3 村大山)

運営委員会のメンバーは何人ぐらいで、どういう風な方向性で動かれているのですか。

(丹波市・篠山市森岡)

丹波の地域には丹波の森研究所という地域シンクタンク機能を持つ財団があります、その事務局が丹波の森協会です。両市、県の担当レベル、地域レベル、団体の代表からなります。今、47か48団体が登録しています。つまり、トップが一人ずつ来ても50~60人の人は簡単に集まります。

(やんばる3村大山)

事務局は何人ですか。

(丹波市・篠山市森岡)

6人ぐらいです。

(黒滝村福西)

黒滝村にも野生の鹿がたくさんいるので鹿をどういうふうに研究しているのか教えてください。

(丹波市・篠山市森岡)

丹波地域にはワイルドライフマネジメントセンター（野生生物保護管理センター）という、鳥獣の研究対策をしている施設があります。普通は焼いたり、煮たりですが、集落丸山にフレンチのシェフがおり、彼によると、鹿肉は豚肉や牛肉と比べると、料理のおいしさが発現する範囲が狭いそうです。でもプロが作るとおいしい料理ができるので、そのノウハウを地域の女性に教えていただいています。貝原では若い方が空き家に入られ、鹿肉のお店で地域の方と連携されています。

(柏原市森本)

化石が出た後の処理はどうなっていますか、また今後の活用の仕方はどうですか。

(丹波市・篠山市森岡)

出てきた骨は固まりでプラスタージャケット（石膏）で固めて研究施設へ移動します。これを割るのは地域の人です。痕跡があるものが出てきたら、研究施設へ戻します。これが体験メニューになっています。クリーニング（専門的な技術がいる）技術者の養成にお金をつけています。出てきた骨のくず石を小学生が割っていますが、そこから化石が出ている状態です。まだ本丸はふたがあいていません。ガイドが地域にたくさんいるのでツアーを企画しています。研究者は、石膏を割って、化石が出てきて、クリーニングして、研究して、学会で発表しないと研究成果として発表しません。スピーディではないので、それは待たず、サイエンスカフェなどで活用を始めています。

(柏原市森本)

掘った跡地は今後どうするのですか。

(丹波市・篠山市森岡)

公園化するという話がありますが、単なる跡地にしかありません。何も残らないということです。残し方も含めて発掘の仕方を検討しているところです。今は、危険ではない程度に公開をしています。残しつつ発掘しようかということです。

(黍嶋)

最後に古澤さん一言お願いします。

(国土交通省古澤課長補佐)

本とか地域の情報誌の事例ということでは、岩手県が 950 万円程かけて、マンガで岩手県の魅力を PR しようという取り組みがあるようです。他にもいろいろな方法もありますが、コンテンツの充実が重要かと思います。

(黍嶋)

ありがとうございました。では黒滝村さん、宜しくお願い致します。

(黒滝村中井)

奈良県吉野郡黒滝村から参りましたグリーンツーリズム協議会会長の中井と申します。先ほど発表された方々は大変な経験や実績をつまれています、すごいな、と感じました。また、遠い道のりだなというところが実感です。

グリーンツーリズム協議会は、去年の 11 月のはじめに発足したばかりで、実質ゼロからのスタートです。

黒滝村は奈良県の中央に位置します。北隣が吉野町、南隣が天川村、1300 年前から古い歴史ある村の間に位置しています。黒滝村も南北町時代ぐらいから文献に出てきます。人口は 950 人でその内の 50%以上が 65 歳以上の高齢者で少子高齢化の典型の村です。今日参加されている地域の中で最も人口の少ない村です。面積の 96%が林野で、主産業であった林業が衰退し、それに従事する人口も少ないです。

高齢化と産業の衰退をどうにかするべくグリーンツーリズム体験型観光を進めたいということでこの事業に応募しました。奈良は平城遷都 1300 年ということで、マスコットキャラクターの遷都くんが広報活動をしています。奈良市の平城京跡大極殿が 4 月に一般に開放されますが、その中に黒滝村の 250 年のヒノキが使われていますので、是非訪ねてみてください。

プログラムですが、数年前から個々に寄せ植え、炭焼きなどを体験としておこなってきました。それを今回、持ち寄り、グリーンツーリズムということで組織化し、情報発信し、他の村の方を勧誘し、村として宿泊型の体験観光を始めたいということで協議会を発足しました。組織をどうするかということですが、今の時点で、常時体験要望を受け入れる事務局を常設するコストがでないの、日を決めて仕事をしています。将来的には常時体験型観光を受け入れたいと思っています。今 4 つの体験プログラムがありますが、年配の人がされていますので、後継者問題が深刻になっています。他にもいろいろプランはありますが、勧誘できていないので、参加してもらおうべく考えています。協議会の組織ですが、会長、事務局は商工会、行政、アドバイザー、県から調整員を派遣してもらっています。まだ始めたばかりなので、成果が発表するのが難しい状況です。

アドバイザーの渡辺さんはアウトドアガイドのプロの方です。自分たちの体験の概要のまとめ、安全性の確保、事業のマーケティングを教えていただいているところです。はじめは、単価や、自分たちのキャッチフレーズは何なのかさえもわかりませんでした。

この前、細野先生に単価の相談をさせていただきました。第 2 回の研修会の後、観光学をご専門とされる菅原先生にお話を伺いました。人材が鍵になるとのことでした。

協議会については、人数が多く全員が集まり話しをするのは難しいので、主要なメンバーで企画委

員会をつくり、そこで予め大まかな内容を決めることにしました。レギュレーション（概要）、各体験の概要を作成しています。

村外から民家を借りレストランをされている方で、絵も書かれている方がいらっしゃいます。その方に炭焼き体験の工程や炭の中の構造をイラストに書いてもらっています。わかりやすい表現が自分たちではできないので助かっています。自分たちのやっていることが違って見えます。草木染めの工程の紹介でもイラストを描いていただき、親しみやすくなりました。

この4ヶ月の実績として、黒滝おもしろ体験を2日にわたって村民向けにやりました。お互いの体験を経験するためとHPやパンフレットの写真撮影のために実施しました。

また、単価についてのアンケートを行いました。プログラムは、ほとんどが森林・山林に関わる体験です。子供のまき割りが好評で、周りで見ている人が喜んでいました。

杉の葉染め体験では、一番上の方は84歳のおばあちゃん、地域の女性の方に教えていただき、交流がとても大事なことがわかりました、こんにやくづくり体験、こけだま体験、寄せ植えを丸い玉で作るもので好評でした。

明日は、軽井沢にピッキオという自然の中で遊びを企画する会社があるそうなので、そちらに行き、黒滝村でできることを探りに行こうと思っています。

これからのことばかりですが、今後は組織の中に入っていない人を巻き込み、レギュレーションについてももっと親しみのあるパンフレット等にして仕上げる必要があります。

プログラムは今年3回行う予定です。HPに活動の情報を載せてもらおうと思っています。

特に人材をどうするかということは問題です。アドバイザーの渡辺さんは、個人的に林業体験に関心をお持ちで、林業をどういう風に観光化するのか、日本では成功した事例がないということで頑張りたいと思っています。

今年7月に奈良県と大阪市にある塾の学生と先生を80~100名を受け入れる予定です。これから子供たち・学生を積極的に受け入れたいと思っているので、実施マニュアルを作成しようとしています。

(黍嶋)

上北さんお願いします。

(黒滝村上北)

もくもく山里炭工房という炭焼きをしています。林業の衰退により、山へ行って間伐ができなくなったので、廃材を利用して炭焼きをやっています。これを次の代に継いでいただきたいと思っています。これからもっと山が衰退してしまいます。間伐しないと木は育ちません。これからも炭焼きに利用したいと思っています。

(黍嶋)

前田さんお願いします。

(黒滝村前田)

先ほどから皆さんにいろいろいいことを教えていただきました。皆さんはいい環境でお生まれになったとうらやましく思いながら、黒滝についても探せばいいところがあるのではないと思っています。地域の人々と直接接して、自分一人より二人、それ以上と、広げるのは楽しいということを知りまし

た。

(黍嶋)

国土交通省さんお願いします。

(国土交通省古澤課長補佐)

間伐材の話がありました。林業が振るわないため、木を倒したらそのままのところが見られません。まき割りの話が出ましたが、都会の子供はこういう経験がないので、このプログラムなどから広げるといいと思います。

(黍嶋)

ありがとうございました。では笠岡市さんお願いします。

(笠岡市福井)

元気笠岡推進協議会の取り組みについてご説明させていただきます。笠岡情報ハブの構築が主題です。平成21年度の担い手育成を進めるポイントは2つありました。地域の情報ハブを構築すること、情報発信、情報を共有することで、地域の連携を図り、地域の活性化をすすめることでした。

経緯ですが、昨年度事業の教訓から取り組んでいます。昨年度、島諸、商店街、中山間部という3箇所が連携して、商店街を中心に活性化運動を進めようとしていました。しかし、すぐ隣の地域、住民が、どういう活動しているかを全く知らず、力が分散してしまいました。そこで、情報ハブで共有機能をもったHPで問題解決をしたいと思いました。

その方法として、具体的施策として研修会等で情報発信者の育成、信者たちをたくさん作ろうということになりました。情報を整理してHPでお互いに閲覧する、実際の連携活動にいかそうという流れです。

情報のサポーターの育成研修会を実施しました。もとリクルートの職員、広告代理店にお勤めの酒井先生をお招きして、情報の出し方、どういうものがインターネット上で重要かについて2回に分けて勉強しました。地域のパソコンクラブ、ブロガーのスキルアップ、情報の出し方などルールをもって説明する研修会を実施しました。

目的は、こういう人を中心として実際のツアーを行い、情報を出す側の人たちがツアーの解説を行いながら、参加者にどういうふうに情報を出していったら、喜ばれるか、実際に肌で感じてもらうための実践活動の研修会を行いました。

その前段階として、月1回商店街がおかげ市という大仙院の縁日にあわせた売り出しセールを行っていますが、大仙院の由来、参加するためのルールなどを店主自体が全く知りませんでした。情報が誰かのところには溜まっているが、全体に広がっていないという問題がありました。研修を受けた皆さんに商店街の人たちにどういうふうにして話しを進めるのか、事務局が主催者として、方法論について酒井先生を中心に実際に組み立てて、みてもらい、本番のツアーに参加してもらい、自分たちのスキルをあげてもらうという2段階の実施を行いました。

参加者は知ってるつもりの笠岡ツアーに自分たちが先導する立場で、参加してもらいました。一般の20名の人に参加してもらい、研修を受けた人がおかげ市を説明し、どうやって伝えるのか、ふれあいを持って、どうやってHPに載せていくか研究してもらうための研究してもらうためのツアーです。笠岡の干拓地、新しいの名物を食べるなど、参加者の方には事前にお知らせし、インストラクターを

目指す人には詳しい資料を事前に勉強してもらいました。その中で1つわかったことがありました。

いままでパソコンクラブやブロガーに情報集めを依頼すると地域に密着した情報が出てくると思っていました。しかし実際には、おもしろおかしい話は出てきますが、我々の必要としている地域情報は出てこないということがわかりました。

実践の過程として、地域サポーターの育成を通して、問題となったのは、情報を発信する人の意識付けの問題でした。地域情報を発信する人に任せれば、地域の細かな情報が集まるのではないか、地域情報をもっているのは誰かということです。

笠岡の公民館の人々が発信者として事業を進めていくことになりました。笠岡市には公民館が20館ほどありますが、主事のみなさんに情報発信者としての体験と勉強をしていただくため、1月26日に情報発信の必要性についての研修会を行いました。そこで意思の統一をはかり、それぞれの公民館で情報発信すると、笠岡全域の利便性が増すことを説明しました。

2月9日地域情報共有研修会を実施しました。それぞれの公民館がスケジュールを発表します。これをHP上で自動的に集約し、統合スケジュール化し閲覧できるようにしたものです。

2月18日に向け、技法と運用の仕方の研修を実施していくこととなります。情報共有の場として、それぞれの公民館が自分の土地にある良いものを共有し、その中からみんなで回ってみたいところをピックアップし、公民館主事が実際にまわり、ツアーの企画をしてもらうことになりました。

あなたも町の添乗員プロジェクトとして公民館の方が1本のモニターツアーにまとめています。そのアンケート結果として、他の地域を訪問することで自分の地域のいいところの比較ができる。いろんな人がいいことを知っていると、自分も地域のことを知りたくなる。地域で信念をもって取り組んでいる人を知って、共感したときにそのつながりは強いものになるので、共同することの意義に実感をしている。情報発信は必要ですか？という質問には、していきましょう、という答えになりました。

本事業の担い手育成の成果として、公民館の主事の方々の人材の意欲意識の創出、意識改革ができたと思います。また、情報の責任の所在、公共側の情報発信についての問題を見出すことができました。公共が発信する情報では責任の所在が重要となります。公平性が情報の発信を阻害するという問題を確認できました。事務量が増えることを嫌うという傾向もあります。しかし、それも乗り越え、ブログや予定表を共有することで、有効活用する可能性を見出しました。

成果として、笠岡情報ハブの協力者の出現があります。地域から新しい観光スポットを探し出すという新しい企画手法として、ビジネス化の実現が期待できます。六甲エージェンツの方に商品化を検討していただくことになりました。情報ハブを専門化に利用していただく道が開けました。地域のケーブルテレビとも協力していこうという話もあります。

継続的な担い手育成のためには、組織が必要です。元気笠岡をNPO法人として設立する計画を立てています。資金が必要となりますので、あなたの町の添乗員のしくみを作り、エージェンツに売り込もうと考えています。

情報は、共有して、利用しあうことが大前提となります。これからも笠岡情報ハブを継続的にを行います。今回の事業では、人づくりと情報発信手法を得ることを同時に行うことができました。専門家の方が入ることにより情報の蓄積も可能となります。その中で動く人々を教育して事業を行える可能性がでてきます。担い手となる裾野を広げることができると思います。

また、情報ハブに興味を持っていたエージェンツの視点から地域情報をとりまとめてはどうかという提案をいただきました。彼らによると、我々がおもしろいという歴史的資産はどこにでもあり、瞬間的にお客さんがおもしろいと思うものを探ることが重要であるということでした。

(黍嶋)

質問はありませんか。

(花巻市浅沼)

情報の責任所在でどのような問題があったのですか。

(笠岡市福井)

個々の公民館で情報を発信し、カレンダーを共有する際、予定がはっきりしていないものを書き込まれると、公民館側は困るという意見がありました。正確に書き込まれる保障がない。ブログも公式な意見の場ではないので、公民館としてブログを書くのは問題であるとか。また、全員がツールを使えるわけではないので、突出したところは情報発信ができるが、反対の場合、その公民館の情報が落ちてしまうという問題があります。

スキルは高いほうではなく、低いほうにあわせるしかないのです。スキルが低くても、やっていきましょうというところは、別途に我々が手助けし、実際に効果があるところを見ていただいたりして、我々が講習事業を行うということです。できないところをできるようにすれば、解決できる場所があるのではないかと考えています

(黍嶋)

公民館での情報発信については補足してご説明がありますか？

(笠岡市福井)

公民館の情報を **GOOGLE** で集約しました。これを必要なところに流します。特別なプログラムにすると、お金がない団体は情報を発信することができなくなってしまうのですが、

このように我々がノウハウを提供すれば、利用できる場所が増えていくと思います。しかし、依然として公共がこういうものを使うのには問題があるかもしれません。それぞれの公民館が単独にカレンダーを書いて、それを集約し統合カレンダーを作りました。ブログの集計画面です。自己責任で自分のブログで書いていきます。新しい情報から元気笠岡 HP で紹介しています。

(黍嶋)

最後に国土交通省さんお願いします。

(国土交通省古澤課長補佐)

情報は載せないことには検索エンジンにヒットしないので、どうやって載せるかというところに着目したのはよい点だと思います。行政は公平性、客観性が求められるので、地域の特色に応じた情報については、一般の方のブログを活用する等の方法も考えた方がいいと思います。何を **PR** するのか、客層をどこに持っていくのかということも大事です。情報は載せないと検索してくれないというところに着目したのは良い点だと思います。

(黍嶋)

これで終わります。

(中村)

これで報告発表を終わらせていただきます。最後に細野先生から包括的なお話を伺います。

(細野)

みなさんに共通していえるのは人口減少時代、経済的には非常厳しいということです。

こういう状況下で選ばれるまちになるためにどうするか、そのためには魅力づくりが必要です。また、選ばれ続けなければなりません。つまり継続性が大事、ビジネスモデルをきちんと作る必要があります。補助金がなければできない、なんていうことになります。たとえば、単価はいくらですか、という問題。客単価と客数は反比例するので、高くすると人は来ません。いかに客を呼ぶか、客単価にふさわしいサービスをどうやって提供するかということを考えないとリピーターはでて来ません。ビジネスとしては成立しえないのです。

先ほど丹波の方から人と物があるのに、お金がついてこない、という話がありました。実はもっと違う人材が必要なのかもしれません。

人づくりには3つあると思います。始めに、地域資源を活用するためのプロデューサー、コーディネーター、2つ目は情報発信をする人、3つめインストラクター、アドバイザー、専門家です。

全てを自前では不可能です。どこをアウトソーシングするか考えることが重要です。アウトソーシングにはお金がかかります。自前で努力できる部分はどこか、目利き、好奇心、学習力、メッセージ力という部分です。

アウトソーシングするにしても、大きな効果を出すためにも、共鳴装置が必要です。つまり、経済的なインセンティブ、これにはお金がかかりますが、考えなければいけません。

また、何回やっても上手くいかない嫌になるので、ちょっとした成功でもいいから、ビジュアル化することが必要です。今日のパワーポイントも成果です。どういうふうにパワーポイントで資料を作ったらいいか、少しお分かりになりましたね。つまり、どうすれば、人が理解してくれるのか。紙とネット両方必要です。大学で学会の資料を **CD-ROM** にしたら、誰も読まなくなりました。文明の進歩は紙の消費量に比例します。今回の資料をあとで見てくださいね。

最後にご担当の皆様お疲れ様でした。国土交通省の方には、こういう機会作っていただき、皆様を代表してお礼を申し上げます。地域再生を担う人材育成の大きなメルクマールになったと思います。

(中村)

以上でプログラムは終了です。ありがとうございました。

既存の人材育成プログラム事例一覧

- ここでは、P37 に示した持続して地域再生を担う人づくりを行う際の留意点のうち、「新たな知見・ノウハウ取得を行う際に有用だと考えら得る人材育成プログラムについて記した。
- 現在、人材育成プログラムは国・自治体、NPO 等あらゆる主体により実施されており、ここでは、平成 22 年 1 月時点において実施されている既存の人材育成プログラムの事例を整理した。

実施主体：観光庁観光地域振興部観光資源課

人材育成プログラムの概要名称	観光カリスマ塾
プログラムの概要・目的・理念など	<p>「観光カリスマ塾」は、観光カリスマの活躍した地域で、観光カリスマを講師に迎え、その成功のノウハウの伝授、活動の現場体験、受講者によるワークショップなどをセミナー形式で集中的に行い、地域の観光振興を担う人材を育成しようとするもの。</p> <p>地域のリーダーとして観光地づくりに成功した観光カリスマから、その取組みのプロセスを観光カリスマの現地で直接講義を受け、意見交換をすることにより、次代の観光まちづくりのリーダーを育成することを目的としている。</p> <p>観光カリスマを講師として、観光カリスマの現地において、20 名程度の受講生を対象に、講師となる観光カリスマ自身が策定するカリキュラムを基に、講義・現地視察等を 1 泊 2 日(または 2 泊 3 日)のセミナー形式で開催している。</p>
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●調査・企画・計画の技術 ●企画の要点などを観光カリスマの講義によって受講。後半は、現地における視察が多い。
プログラム形式(単位：回) (1 回の講座で重複する場合がある)	<p>講義：10、研修・視察：1 (合計 2)</p> <p>1 回あたりの講義時間：1 日</p>
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業：1 ●調査研究：1 ●派遣事業：1 ●助成事業：1 ●その他：1 <p>全国 8 箇所で開催。それぞれの地域の観光カリスマを講師で招き、2 日間のプログラムを実施。1 日目は講義、2 日目は視察などがスタンダードなスタイルとなっている。</p>
URL	http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/jinzai/charisma.html

実施主体：財団法人地域活性化センター

人材育成プログラムの概要名称	全国地域リーダー養成塾
プログラムの概要・目的・理念など	<p>「地域づくりは人づくり」。この塾は、既存の枠にとらわれない斬新かつ大胆な発想のできる地域のリーダーを養成するため、専門家、実践家などを講師として、体系的かつ効果的なカリキュラムによる研修を行っている。</p> <p>平成元年の開塾以来、656名が巣立っており、塾で得た知識と「人財ネットワーク」を存分に活かし、地域づくりの現場で活躍している。</p> <p>広い視野と深い見識、卓越した想像力と豊かな人間性を備え、常に問題意識と確固たる使命感を持ち、積極的・主体的に行動のできる地域のリーダーを養成する。</p>
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・新しい住民参加のかたち ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の再生とデザイン ●経営・運営技術 <ul style="list-style-type: none"> ・実践的地域経営論 ・地域経済の振興と自立 ●その他専門技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域をとりまく時代の潮流 ・分権改革の推進
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	<p>講義：6、研修・視察：7、演習・WS：4（合計17）</p> <p>レポート提出：有</p> <p>1回あたりの講義時間：2日</p>
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 <ul style="list-style-type: none"> ・機関紙「地域づくり」の発行 ・書籍刊行 ・地域再生フォーラムの開催 ●調査研究 <ul style="list-style-type: none"> ・市町村合併後の新しいまちづくり ●派遣事業 <ul style="list-style-type: none"> ・コンサルティングの実施 ●助成事業 <ul style="list-style-type: none"> ・魅力ある商店街づくり助成事業 ・活力のある地域づくり支援事業 ・スポーツ拠点作り推進事業 ・地域イベント助成事業 ・地域づくりアドバイザー事業 ・地域づくり団体等活動支援事業
URL	http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/

実施主体：財団法人地域活性化センター

人材育成プログラムの概要名称	地域再生実践塾
プログラムの概要・目的・理念など	平成 17 年 4 月、地域再生法が施行され、各地域では、地域経済の活性化、雇用機会の創出など「地域再生」に向けた取り組みが行われている。 地域再生には、産業や技術、自然、文化など地域資源を活用し、他の地域との差別化戦略によりまちの魅力を高めていくことが大切。 そのためには、地域に誇りと愛着を持つ地域住民や民間企業などが知恵と工夫を創出する行政との協働の舞台づくりが必要と考える。 そこで、(財)地域活性化センターは、平成 17 年度から、地域再生について様々な視点から考えるワークショップ「地域再生実践塾」を、全国 5 カ所で開催している。 中心市街地の活性化や地域ブランドの確立など地域で課題となっているテーマを選定し、先進的な地域を開催地として、ケーススタディを中心としたカリキュラムを展開する。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・グループワークによるまとめと発表 ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークによる現地のノウハウのヒアリング ●経営・運営技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークによる現地のノウハウのヒアリング
プログラム形式(単位：回) (1 回の講座で重複する場合がある)	講義：10、研修・視察：5、演習・WS：5 (合計 20) レポート提出：有 (1 回) 1 回あたりの講義時間：3 日
備考	各回ごとに募集をかけて、受講生を募集している。
URL	http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/

実施主体：主催：経済産業省 商務流通グループ中心市街地活性化室、
事務局：独立行政法人中小企業基盤整備機構 まちづくり推進課

人材育成プログラムの概要名称	まちづくり学習 (現地研修)
プログラムの概要・目的・理念など	街元気リーダーが活躍する現地を視察し、リードとのディスカッションや受講生同士のコミュニケーションを図ることでまちづくりを学ぶ研修。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●その他専門技術 <ul style="list-style-type: none"> ・現地街元気リーダーとのディスカッションによつての受講
プログラム形式(単位：回) (1 回の講座で重複する場合がある)	講義：1、研修・視察：1 (合計 2) 1 回あたりの講義時間：2 日
備考	街元気サイトとして、共同のウェブサイトから情報発信を行っている。それぞれの先進事例地域で開催。地元の街元気リーダーを講師に現地を視察しながら学習を行う。研修の成果などをレポートとして掲載。また、受講者のその後の活動なども紹介している。
URL	http://www.machigenki.jp/

実施主体：主催：経済産業省 商務流通グループ中心市街地活性化室、
事務局：独立行政法人中小企業基盤整備機構 まちづくり推進課

人材育成プログラムの概要名称	まちづくり学習（実践高度化研修）
プログラムの概要・目的・理念など	4泊5日でまちづくりの現場に入り、経験豊かな街元気リーダーのもとでまちづくりの実務を体験していただく、云わば"まちづくりのインターンシップ"。既にまちづくりに携わっている方が、先進的な取組を実施している地域において、まちづくりの実務を習得することを目的とするもの。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●調査・企画・計画の技術 ●経営・運営技術 ●その他専門技術 ・街元気リーダーのもと実務を経験することを通してまちづくりの手法を学ぶ。
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：1、研修・視察：1、演習・WS：1 レポート提出：有（1回） 1回あたりの講義時間：1日
URL	http://www.machigenki.jp/

実施主体：主催：経済産業省 商務流通グループ中心市街地活性化室、
事務局：独立行政法人中小企業基盤整備機構 まちづくり推進課

人材育成プログラムの概要名称	まちづくり学習（街元気セミナー）
プログラムの概要・目的・理念など	商店街の活性化やまちづくりに取り組む方々、特に新しいまちづくりの手法を検討している方々や様々な関係者と連携してまちづくりに取り組む方々を対象としている。全国で取り組まれている、商店街と若者（特に大学生）のアイデアや行動を活かしたまちづくりの取組み事例について、実際に活動している商店街、大学教授等から直々にお話をしていただく。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●調査・企画・計画の技術 ●経営・運営技術 ・地元資源を活かした観光振興と、大学・学生との連携による取組の紹介
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	研修・視察：1（合計1） 1回あたりの講義時間：4時間
備考	セミナー会場は街元気リーダーの活動地域により毎回変わる。 セミナーの前に、現地見学しておくが良い。
URL	http://www.machigenki.jp/

実施主体：主催：経済産業省 商務流通グループ中心市街地活性化室、
事務局：独立行政法人中小企業基盤整備機構 まちづくり推進課

人材育成プログラムの概要名称	まちづくり学習（街元気講座）
プログラムの概要・目的・理念など	現在、全国各地で中心市街地の活性化に向けて取組みが進められているが、中心市街地の活性化を考える際、中心市街地を含む地域全体の農商連携、産業育成、地域資源、食、流通等といった新たな視野を持つ必要性が増してきている。そこで、全国8箇所において「街元気講座」を開催し、全国各地で先進的な取組みを推進している先達の講師をお招きし、実体験を踏まえた取組事例から活きたノウハウや取組みのポイントについて説明いただく。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●調査・企画・計画の技術 ●経営・運営技術
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：1（合計1） 1回あたりの講義時間：4.5時間
備考	セミナー会場や内容は、街元気リーダーの活動地域により毎回変わる。
URL	http://www.machigenki.jp/

実施主体：主催：経済産業省 商務流通グループ中心市街地活性化室、
事務局：独立行政法人中小企業基盤整備機構 まちづくり推進課

人材育成プログラムの概要名称	まちづくり学習（学習教材）
プログラムの概要・目的・理念など	「まちづくり」とひと口に言っても、その内容は様々な要素を持っている。このまちづくり教材では、基礎から実践にわたるまちづくりに必要な知識を学習できるようになっている。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・人を動かすコーチング ・“やる気”ベクトルから“やる”サイクルへ ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・都市計画の役割とまちづくり ・中心市街地活性化を実現するための計画作成と手順 ・まちづくり支援策 ●経営・運営技術 <ul style="list-style-type: none"> ・活性化に向けた取組み体制づくり ●その他専門技術 <ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりの哲学 ・自分の街を知り、知ってもらうためのPR方法 ・空き店舗対策とテナントミックス ・地域支援と生活者のサービスの拡充 ・にぎわいを呼ぶ空間整備
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：19（合計19）
URL	http://www.machigenki.jp/

実施主体：福山市立女子短期大学研究教育センター、福山商工会議所

人材育成プログラムの概要名称	ふくやまコミュニティ創成塾
プログラムの概要・目的・理念など	コミュニティのさまざまな課題を考える視点を学び、実践に移すことができる企画力を身につける。「生涯現役」で働く人材と福山の地域社会活性化をめざす人の育成を目的とした講座。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●基礎講座 <ul style="list-style-type: none"> ・生涯現役で働くことの意味、仕事の方策や課題の見つけ方などコミュニティ活性化の基礎を学ぶ。 ●実践講座 <ul style="list-style-type: none"> 上記の基礎をもとに、実践的なスキルを学ぶ。 ●応用プロジェクト <ul style="list-style-type: none"> 企画書を作成し、公開プレゼンテーションの形で発表する。コミュニティに眠っている人的・物的資源を発掘し、「ものづくり」に活かす企画力を身につける講座。備後地域には日本中に誇れる「ものづくり」文化がたくさんある。 ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティビジネスで地域資源を活かす ・なぜ売れないのか？商品企画を考える ・どう守る？知的財産権 ・どう活かす？ヒト・モノ・カネ ・企画書作成 ●その他専門技術 <ul style="list-style-type: none"> ・人と環境 ・おそるべき食の実態 ・食環境でコミュニティ再生 ・福山の食生産の実態 ・福山の食と居住環境
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：13、演習・WS：2（合計15） レポート提出：有 1回あたりの講義時間：1.5時間
備考	大学教育
URL	http://www.fukuyama-jc.ac.jp/extension/index.html

実施主体：名古屋学院大学

人材育成プログラムの概要名称	地域創成プログラム
プログラムの概要・目的・理念など	「地域創成プログラム」は地域社会と協働するよき市民、よきビジネスパーソンの育成のために作られた。このプログラムは、その原型を含め、すでに愛知県瀬戸市でのまちづくり活動の中で活かされ、多くの実績を積み重ねてきた。本取組は、本学がキャンパスを設置する瀬戸市と名古屋市の両都市を対象に、このプログラムを「もの・まちづくり（ものづくりの蓄積を生かしたまちづくり）」というテーマで実践し、地域の再生と交流を実現しようとするもの。このプログラムを学ぶことで地域理解を深め、共生の思想を学び、創造する力を身につける。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域理解 ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域計画論 ・ものづくり経済論 ・日本経済史 ・地域政策入門 ・地域活性化研究 ●経営・運営技術 <ul style="list-style-type: none"> ・企業研究
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：10、研修・視察：2、演習・WS：18（合計30） レポート提出：有
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 <ul style="list-style-type: none"> ・本学教員による講師派遣 ●その他 <ul style="list-style-type: none"> ・大学教育活動 <p>いわゆる一般学生の教育プログラムだが、文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の選定を受けたプログラムとして実践されている。</p>
URL	http://ngugp.jp/gendai/index.html

実施主体：松山商工会議所、松山大学、松山市、財団法人松山観光コンベンション協会、
社団法人愛媛県観光協会

人材育成プログラムの概要名称	ふるさとふれあい塾
プログラムの概要・目的・理念など	多くの方に“松山の良さ”を再認識していただくとともに、観光客を温かく迎えるためのホスピタリティの向上と松山の魅力について自信を持って案内できる人材の育成を目的とする。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・映像を活用した「地域の魅力再発見・再評価」 ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域資源を活かした愛媛の観光振興への取組 ●その他専門技術 <ul style="list-style-type: none"> ・松山の歴史に地位資源に関する講義
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：13、研修・視察：1（合計14） 1回あたりの講義時間：1.5時間
備考	・「松山観光文化コンシェルジェ検定」の実施
URL	http://www.jemcci.jp/sightseeing/fureai/top.html

実施主体：早稲田大学芸術学校

人材育成プログラムの概要名称	市民参加コーディネートコース
プログラムの概要・目的・理念など	まちづくりの様々なプロジェクトに市民の参加をコーディネートする能力が問われている。演習では、前期にワークショップを組み立てる、個々のファシリテーショングラフィックなどの手法を学び、現場のテーマ設定のもと、ワークショップを企画・実行する。後期は、一連の流れを企画するプロセスデザインを学び、ワークショップ開催に至るまでの、調査・企画・告知・実施・評価などから成る流れを実践する。講義ではNPO・まちづくり会社などの組織や参加と協働の最新動向について学ぶ。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 ・まちづくり参加協働論 ・ワークショップ演習 ・プロセスデザイン演習 ●調査・企画・計画の技術 ・プロジェクトマネジメント
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：20
備考	早稲田大学の運営する芸術学校内にある専門コースとして募集。
URL	http://www.waseda-aaschool.jp/course/weekday/urd1/index.html

実施主体：三鷹大学ネットワーク

人材育成プログラムの概要名称	健康と福祉のまちづくりのための人材育成講座
プログラムの概要・目的・理念など	「健康と福祉のまちづくりのための人材育成」をめざして実施するもの。健康や福祉に関する専門性を持った学生と、福祉に強い関心のある市民や、福祉現場で働く職員の皆さんが共同受講できる、10回連続の講座を企画した。 前半3回は、地域ケアを具体的に学ぶための基礎として、コミュニティ・環境・生命倫理に関する内容を学ぶ。第4回目以降は、医療、運動、福祉のそれぞれの分野から、専門の異なる講師が「予防」を共通のキーワードに講座を展開し、第10回目には参加者と講師によるグループディスカッションで講座全体のまとめを行う。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●その他専門技術 ・地域福祉
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：10（合計10）
備考	三鷹ネットワーク大学に参加するルーテル学院大学、杏林大学、日本女子体育大学、国際基督教大学、法政大学、立教大学が協働し行っている。
URL	https://www.kouza.mitaka-univ.org/kouza/C0632700.php

実施主体：奈良地域づくり団体協議会（まほろば地域づくりネット）、
奈良県地域振興部地域づくり支援課

人材育成プログラムの概要名称	新世紀まほろば塾
プログラムの概要・目的・理念など	21世紀の地域づくりに必要な総合力とマネジメント能力を備えた人材の養成を目的に「新世紀まほろば塾」を平成14年7月に開塾。 個性的で魅力ある地域づくりをめざし、意欲のある方を対象に奈良県立大学と協力し、講義・グループワーク等を実施している。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 ●調査・企画・計画の技術
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：9、研修・視察：4、演習・WS：7（合計20） レポート提出：有 1回あたりの講義時間：2時間
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●助成事業 ・県の支援事業の案内などを行っている。
URL	http://www.nara-download.jp/mahoroba/

実施主体：松山市市民部市民参画まちづくり課

人材育成プログラムの概要名称	地域リーダー養成セミナー
プログラムの概要・目的・理念など	住民主体の地域におけるまちづくりを推進する為の人材育成。基礎編と応用編に分かれている。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・KJ法を活用した協議の実践 ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域コミュニティの類型化 ・まち歩きによる課題の発見 ●経営・運営技術 <ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりの実践におけるしくみ・組織を考える
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：6、研修・視察：3、演習・WS：3（合計12） レポート提出：有
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 ・公開シンポジウムを3回開催。講義の成果をまちづくり教本「地域コミュニティづくりのすすめ」として作成。松山市と愛媛大学が共同で事業を実施。
URL	http://www.city.matsuyama.ehime.jp/simins/1179140_914.html

実施主体：仙台市企画市民局地域活動推進課

人材育成プログラムの概要名称	仙台市地域づくり人材育成講座
プログラムの概要・目的・理念など	平成20年3月に策定した「仙台市コミュニティビジョン」の具体化に向けた取り組みの一つとして、開催。活力ある地域づくりを行うためには、多くの地域住民や組織が関わりながら、地域が自ら課題を共有・解決していくことが求められている。この講座は、そのために必要な「地域づくりをコーディネートする人材」の育成を目的としているものであり、地域にある資源や情報をつなぎ合わせ、さまざまな意見をまとめながら、地域が主体的に課題を解決していく手法について、ワークショップ（参加型学習）形式で学ぶ実践的な講座となっている。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の未来をデザインしよう ・地域みんなで全体計画を立てよう ●経営・運営技術
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	演習・WS：4 1回あたりの講義時間：7時間
備考	仙台市コミュニティビジョンの具現化に向けた取り組みの一環として開設。
URL	http://www.city.sendai.jp/soumu/kouhou/press/08-12-02/tiiki2.html

実施主体：ランドブレイン(株)

人材育成プログラムの概要名称	地域産業マネージャー育成研修
プログラムの概要・目的・理念など	地方へのU J I ターンを希望している都市在勤者や農村地域での活性化に取り組み始めた方々等を対象に、農村地域における地域づくり事業・産業振興の展開にあたって地域をリードし主体的に活動する人材「地域産業マネージャー」の育成を行う。地域の固有性・豊かさを認識すること、持続可能性を実現するための考え方を学び、農村の地場資源を地域産業やコミュニティビジネス等として活かすこと、農村地域での起業や体験交流事業等に必要な知識等を習得、農村地域における新たな事業実施に向けての知識、企画力、地域住民や多様な方々とのコミュニケーション力、事業運営能力を養うことを目的とした研修を実施する。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●経営・運営技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域との関わり方を学ぶ ・地域産業マネージャーのあり方 ・地域産業マネージャーのあり方と行政の役割 ●その他専門技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域産業マネージャーが必要な理由
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：3、研修・視察：2（合計5） 1回あたりの講義時間：1日
備考	人づくりによる農村活性化支援事業として、農林水産省からの補助金を得てランドブレインが実施している。
URL	http://www.landbrains.co.jp/hitodukuri/chiiki/

実施主体：(財) えひめ地域政策研究センター

人材育成プログラムの概要名称	地域づくり人（びと）養成講座
プログラムの概要・目的・理念など	地域の実態に即した実践的な研修を通じて、地域づくりのリーダーとしてのスキル向上を図り、各地域において活動の中心となる人材を育成する。 また県内各地の地域づくり実践者との交流をはかり、将来にわたる幅広い地域づくりネットワークの構築を図ることを目的とする。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ総論 ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の景観を活かしたコミュニティづくり ・地域資源の活用 ●その他専門技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域福祉の実際
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：2、研修・視察：3、演習・WS：1（合計6） レポート提出：有
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 <ul style="list-style-type: none"> ・情報誌「舞たうん」の編集発行 ・刊行物 ●調査研究 <ul style="list-style-type: none"> ・自主調査 ●その他 <ul style="list-style-type: none"> ・まちづくり情報ネットワークづくり
URL	http://www.ecpr.or.jp/blog/?m=20070628

実施主体：いしかわ地域振興推進協議会（石川県企画振興部地域振興課内）

人材育成プログラムの概要名称	いしかわ地域づくり塾（ゼミ・県外研修編）
プログラムの概要・目的・理念など	テーマ「地域づくり活動の継続・発展を目指して」 地域が主体となって、地域資源を活用した活力ある地域を実現するためには、地域の推進役となる誇りと愛着を持ったリーダーが不可欠。 「いしかわ地域づくり塾」では、いしかわの地域づくりのリーダーを育成すべく、地域づくりに役立つ実践的な講座を開設している。 ゼミ形式の少人数で、県外研修など具体的な事例を交え、地域づくり活動の実践を学ぶ。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・活動の継続に必要なもの ●経営・運営技術 <ul style="list-style-type: none"> ・活動の継続に必要なもの ・多様な主体の連携 ・住民と行政の関係
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：3、研修・視察：1、演習・WS：1（合計5） レポート提出：有 1回あたりの講義時間：2.5時間
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 <ul style="list-style-type: none"> ・「情報誌いしかわ地域づくり往来」の発行
URL	http://www.pref.ishikawa.jp/shinkou/juku/

実施主体：いしかわ地域振興推進協議会（石川県企画振興部地域振興課内）

人材育成プログラムの概要名称	いしかわ地域づくり塾（インターン編）
プログラムの概要・目的・理念など	地域が主体となって、地域資源を活用した活力ある地域を実現するためには、地域の推進役となる誇りと愛着を持ったリーダーが不可欠。 「いしかわ地域づくり塾」では、いしかわの地域づくりのリーダーを育成すべく、地域づくりに役立つ実践的な講座を開設している。 魅力あふれる地域づくりには、新たな視点や客観的なものの考え方を持つことが重要。金沢・加賀・能登に活動拠点を構える3団体に、インターンとして参加する。
プログラム内容	●その他専門技術 ・各団体の活動に参画し、地域づくりに必要な総合的な技術を学ぶ
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	演習・WS：5（合計5） レポート提出：有 1回あたりの講義時間：6時間
備考	●啓発事業 ・「情報誌いしかわ地域づくり往来」の発行
URL	http://www.pref.ishikawa.jp/shinkou/juku/

実施主体：いしかわ地域振興推進協議会（石川県企画振興部地域振興課内）

人材育成プログラムの概要名称	いしかわ地域づくり塾（事例研究編）
プログラムの概要・目的・理念など	テーマ「参加協働型社会を拓く～コミュニティ・ビジネスの事例から学ぶ～」 地域が主体となって、地域資源を活用した活力ある地域を実現するためには、地域の推進役となる誇りと愛着を持ったリーダーが不可欠。 「いしかわ地域づくり塾」では、いしかわの地域づくりのリーダーを育成すべく、地域づくりに役立つ実践的な講座を開設している。 全国各地から地域づくりの仕掛け人を講師に迎える。
プログラム内容	●調査・企画・計画の技術 ●経営・運営技術
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：5（合計5） 1回あたりの講義時間：2.5時間
備考	●啓発事業 ・「情報誌いしかわ地域づくり往来」の発行
URL	http://www.pref.ishikawa.jp/shinkou/juku/

実施主体：茨城県企画部地域計画課（いばらき地域づくりねっと）

人材育成プログラムの概要名称	いばらき地域づくり人材育成講座
プログラムの概要・目的・理念など	個性的で活力ある地域づくりを推進するため、住民、地域団体などの地域づくりを志す人々に対し、地域づくり活動の専門家・実践者の講義やグループワークなどを通じて、地域における課題の発見・解決能力や組織のマネジメント能力など、地域づくりのリーダーとして活動するにあたり必要な能力を専門的・実践的に学習する。 講座修了生の皆様には、県内外の地域づくり団体との連携・交流事業等に積極的に参加いただくことを期待している。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・体験学習の循環過程 ・集団の発達 ・集団に働く諸力 ・集団の運営 ・リーダーとリーダーシップ ・効果的コミュニケーション ・統率と協働 ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域にある問題の発見 ・情報の収集と分析 ・検討課題の明確化と設定 ・解決方法の策定 ●その他専門技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ニュースプリント作成
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：4、研修・視察：1、演習・WS：2（合計7） レポート提出：有 1回あたりの講義時間：6時間
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●助成事業 <ul style="list-style-type: none"> ・地域づくり総合サポート事業他各種支援事業 ●その他 <ul style="list-style-type: none"> ・地域づくり相談窓口 ・地域づくりいばらき人（県内で地域づくりに頑張っている方々を紹介する。）
URL	http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/kikaku/chikei/chikeitop.htm

<p>人材育成プログラムの概要名称</p>	<p>「市民活動レベルアップセミナー」（オープンセミナー、連続セミナー（6回＋意見交換会）、相談事業）</p>
<p>プログラムの概要・目的・理念など</p>	<p>我孫子市で活躍する市民活動団体が、より効果的かつ有意義な活動できる団体として自立していくことを支援する目的で実施するもの。</p> <p>オープンセミナー開催の趣旨</p> <p>「地方分権は自治体内分権・市民自治の充実を期待しており、これからの自治体運営には自立した市民の参加が不可欠といわれている。自治体には既に自治会・町内会などの地縁組織やボランティアグループ、NPOなどの民間非営利組織が活動しているが、それら個々の市民活動団体がそれぞれの特性や役割について相互に理解し、地域の課題解決や地域づくり・まちづくりのために連携していくことが地域力を高める。は、市民活動団体の役割とネットワークについて改めて考える機会とする。」</p> <p>連続セミナーは、基礎講座は初級者向け、実務講座は中級・上級者向けと分けた。</p> <p>基礎講座では「市民活動の目的と組織」、「市民活動の運営管理」、「市民活動のネットワーク」の一般的な3テーマで、市民活動の歴史や目的なども含めて基礎的な知識を提供。</p> <p>実務講座は、「市民活動の資金調達」、「市民活動のIT活用」、「市民活動の企画・政策提案」の3テーマでスキルアップを狙う。</p>
<p>プログラム内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・市民活動のネットワーク ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・市民活動の目的と組織 ●経営・運営技術 <ul style="list-style-type: none"> ・市民活動の運営管理
<p>プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)</p>	<p>講義：7（合計7） 1回あたりの講義時間：3時間</p>
<p>備考</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 <ul style="list-style-type: none"> ・「千葉の貝塚群を世界遺産に！～千葉の貝塚群とまちづくりを考える～」シンポジウム ・ちばまちづくりNPOフォーラム ●調査研究 <ul style="list-style-type: none"> ・大規模団地の地域活性化方策モデル調査事業 ・千葉県における住民と行政の協働のための制度環境調査 ●その他 <ul style="list-style-type: none"> ・千葉市民活動センターまつり ・千葉県環境づくりタウンミーティング総括大会
<p>URL</p>	<p>http://www.jca.apc.org/born/siryoun/projectreport/abiko-seminar060320.htm</p>

実施主体：特定非営利活動法人日本 NPO センター

人材育成プログラムの概要名称	NPO ブラッシュアップセミナー
プログラムの概要・目的・理念など	<p>地域で組織力強化に取り組まれている団体の方向けのセミナー。</p> <p>地域社会において、市民活動団体の活動への期待は高まり、果たす役割も大きく、重要になってきている。そのような中、それらの"市民の声"に応えていくためには、組織としてのガバナンス力（統治力）が求められている。</p> <p>"ガバナンス力"といえば支配的な感じも受ける。が、個々の団体のミッションを遂行する上で、組織内外に対する責任のありようを明確にしつつ、市民の主体的な参加や合議等による運営など、民主的な組織運営に裏打ちされた組織運営力のことだと考える。</p> <p>そこで、地域でキャパシティービルディング（組織力強化）に取り組まれておられる団体が、より充実した活動を進められる上での一助となるよう考えている。</p>
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・市民に開かれた組織をつくる ●経営・運営技術 <ul style="list-style-type: none"> ・組織の価値を高める一活動評価のあり方 ●その他専門技術 <ul style="list-style-type: none"> ・自信を持って活動する一組織ガバナンスのあり方 ・組織を正しくわかりやすく伝える一情報発信のあり方
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	<p>講義：4（合計4）</p> <p>1回あたりの講義時間：5時間～5.5時間</p>
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会のためにフォーラム ・機関紙「NPOのひろば」 ・ひとりひとりの力がみなぎる地域を目指してフォーラム ・自律と協働から生まれる新たな社会フォーラム ・地域の自治力を育てるためにフォーラム ●調査研究 <ul style="list-style-type: none"> ・大規模団地の地域活性化方策モデル調査事業 ・千葉県における住民と行政の協働のための制度環境調査 ●その他 <ul style="list-style-type: none"> ・能登半島地震被災地支援活動
URL	http://www.jnpoc.ne.jp/

実施主体：NPO研修・情報センター

人材育成プログラムの概要名称	協働コーディネーター養成講座
プログラムの概要・目的・理念など	<p>参加して「協働コーディネーター」について知り、その社会的役割、意義を実感し、「協働コーディネーター」を目指す。入門・初級編と中級編に分かれて開催。</p> <p>「参加協働型市民社会」を実現するための「協働」のあり方を明らかにするとともに、新しい公共を拓き、協働推進の要となる、「協働コーディネーター」を養成する講座。「協働コーディネーター」は真の市民社会構築に不可欠の新しい「職能」、社会的に大きな可能性のある仕事。</p>
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 ・初級～中級 <p>ファシリテーションの基本的な理論と実践のための基本的な理論と実践のための技術</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中級～上級 <p>『協働のデザイン』の理論と実践方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上級 <p>協働評価とそのコーディネートができる人材を養成</p>
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	<p>講義：2(合計2)</p> <p>1回あたりの講義時間：4時間～6時間</p>
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 ・リーダー研修 ・コミュニティ・レストラン公開講座 ・グループファシリテーター養成ワークショップ ・メールマガジン ・出版物発行 ・NPOとワーカーズ・コレクティブマネージメントアップ人材養成講座 ●派遣事業 ・参加協働型社会人を切り拓く人材養成講座出前 ●その他 ・子育て支援者(子育てNPO)指導者研修事業 ・日本女性会議2005ふくい女性会議 ・大都市企画主管者会議「協働の取り組みについて」
URL	http://www2u.biglobe.ne.jp/~TRC/

実施主体：茨城県、大好きいばらき県民会議

人材育成プログラムの概要名称	「ご近所の底力」ひとづくりセミナー
プログラムの概要・目的・理念など	地域コミュニティの再生・活性化を図るため、地域の皆さんの自主的・主体的な取り組みを支援する『ご近所の底力再生事業』の一環として、地域課題の発見や解決能力を高める実践的なプログラムを提供し、地域コミュニティ活動を支え、地域の活力を生み出す人材の育成を目的としている。 地域のリーダーやコーディネーターとして、地域コミュニティ活動を支え、活力を生み出す人材の育成を目的に、フィールドワーク(実践活動への参加体験)やワークショップ(計画づくり)などを行っている。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●合意形成技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域コミュニティの役割と必要性 ・地域活動実践のポイント ●調査・企画・計画の技術 <ul style="list-style-type: none"> ・地域コミュニティ活動のためのプランづくり
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：1、演習・WS：2 (合計3) 1回あたりの講義時間：6時間～10時間
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 <ul style="list-style-type: none"> ・エコライフフォーラム ・大好き いばらき “夢のある家庭や子育てができる社会を築く”シンポジウム ・『地域力』向上について考えるシンポジウム ・広報誌「大好き いばらき」 ●助成事業 <ul style="list-style-type: none"> ・ご近所の底力・さきがけモデル育成事業 ●その他 <ul style="list-style-type: none"> ・安全なまちづくりキャンペーン ・花いっぱい運動の集い ・生活学校、生活会議運動の推進 ・ひぬま流域クリーン作戦
URL	http://www.daisuki-ibaraki.jp/saisei/hitodukuri/h18.html

実施主体：とちぎ協働デザインリーグ

人材育成プログラムの概要名称	環境プログラム プロジェクト・ワイルド ～エドゥケーター養成講座～ (NPO 法人 那須高原自然学校)
プログラムの概要・目的・理念など	プロジェクト・ワイルドとは、生きものを通じて環境を学び、「自然や環境のために行動できる人」を育てる環境教育プログラム。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●その他専門技術 ・プロジェクト・ワイルドのエドゥケーターを養成
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	1回あたりの講義時間：約1日
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 <ul style="list-style-type: none"> ・エコミーティング ・託児ボランティア養成講座 ・車椅子ボランティア入門講座 ●助成事業 <ul style="list-style-type: none"> ・アウトドア自然保護基金プログラム ・障害者市民防災活動助成 ●その他 <ul style="list-style-type: none"> ・足尾の山に100万本の木を植えよう！ ・福祉人材・研修センターによる各種相談
URL	http://www.tochigi-vnpo.net/

実施主体：特定非営利活動法人 宇都宮まちづくり市民工房

人材育成プログラムの概要名称	「ボランティアと私」
プログラムの概要・目的・理念など	自分の好きなことを生かして、気軽にボランティアをするヒントを頂く。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●その他専門技術 ・好きな事を活かしたボランティア
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：1(合計1) 1回あたりの講義時間：2時間
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションスキルセミナー ・ピア・カウンセラー公開講座 ・とちぎ地域・自治フォーラム ・情報紙『わ・わ・わぁ』 ●助成事業 <ul style="list-style-type: none"> ・とちぎコープ NPO 法人助成金 ・J T 青少年育成に関する NPO 助成事業 ●その他 <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツボランティア ・福祉人材・研修センターによる各種相談
URL	http://www.usaposen.net/

実施主体：かぬま市民活動サポーターズ

人材育成プログラムの概要名称	市民活動応援講座
プログラムの概要・目的・理念など	市民活動は人とひとの出会いから。そして、組織づくりへ。そのノウハウを楽しみながら身につける。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●その他専門技術 ・ ボランティア NPO の壁を越えたコミュニティビジネス
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：1 (合計 1) 1回あたりの講義時間：約 1.5 時間
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 ・ とちぎ協働フォーラム ●その他 ・ かぬまフェスティバル
URL	http://homepage3.nifty.com/flat/

実施主体：特定非営利活動法人おおきな木

人材育成プログラムの概要名称	事例で学ぶまちづくり
プログラムの概要・目的・理念など	栃木県内外の事例から、「まちづくり」を学ぶ。何かに取り憑かれたように、具体的に働いている人たち、まちを良くしている人たちに直接合ってみる。そこから彼らの持つエネルギーを感じ取り、自分の活力を創り出していきる。
プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> ●調査・企画・計画の技術 ・ 日光のまちづくりの到達点を探る ・ 商店街の活性化とまちづくり ～山形県新庄市百円商店街に学ぶ～ ・ 清原地区のまちづくりに学ぶ ●その他専門技術 ・ まちづくり映画「百人の陽気な女房たち」
プログラム形式(単位：回) (1回の講座で重複する場合がある)	講義：1 (合計 1) 1回あたりの講義時間：2.5 時間
備考	<ul style="list-style-type: none"> ●啓発事業 ・ ボランティア活動推進セミナー ・ 自立就労支援講演会 ・ シニアはつらつ応援フォーラム ・ 子育て・親育ち勉強会 ・ 男女共同参画社会フォーラム ・ NPO と栃木県とのコラボ企画事 ●助成事業 ・ 社会貢献活動支援助成団事業 ●その他 ・ 少子化を結婚という視点で考えるイベント
URL	http://www4.ocn.ne.jp/~isupport/

実施主体：広島県福山市協働の街づくり課

人材育成プログラムの概要名称	まちづくりリーダー養成講座（まちづくりカフェ）
プログラムの概要・目的・理念など	主体的なまちづくりを進めていくための中心的な役割を担う人材を養成するため、まちづくり活動の企画や組織の運営・管理などを学ぶ。 ●2008 年度テーマ：まちの縁人（エンジン）に磨きをかけよう！ ●2007 年度テーマ：アイデアをカタチに！企画力アップ講座
プログラム内容	●調査・企画・計画の技術 ・現地調査 ・アイデア整理 ・活動企画
プログラム形式(単位：回) (1 回の講座で重複する場合があります)	講義：2、演習・WS：3（合計 4） 1 回あたりの講義時間：半日又は 1 日
備考	●啓発事業 ・協働の花ニュース（毎月発行） ・協働のまちづくりフォーラム ●調査研究 ・ハンドブック（特に地域における協働のまちづくりの進め方についてまとめたもの：全 5 p） ●助成事業 ・地域まちづくり推進事業 ・キーワードモデル事業（学区） ・ふくやまの魅力づくり事業 ・キーワードモデル事業（NPO） ・住民参加型施設等整備事業 ・協働のばら花壇整備事業 ・地域集会施設整備費補助事業 ●その他 ・福山市協働のまちづくり推進懇談会 ・市民活動総合保障保険制度 講座のテーマや運営は年度により変わる模様 2007 年度は 2 回で夜間 2 時間
URL	http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/dankaisedai-taisaku/shakaisanka/shakaisanka5.html

平成 21 年度地域再生を担う人づくり支援調査業務報告書

平成 22 年 3 月

国土交通省 都市・地域整備局 地方振興課

調査・研究 (株) 価値総合研究所
東京都港区三田 3-4-10 電話 : 03-5441-4800
